

# 日本方言研究会

## 第 118 回

### 研 究 発 表 会

### 発表原稿集

#### ▼午前の部 9 時 30 分～12 時 05 分

- 1) 関西方言との接触による移住者の言語変化—会話データによる分析—………中村堯…1
- 2) 首都圏在住の大阪出身若年層による言語実践の事例的検討……………上林葵…9
- 3) 愛知県における語アクセント動態について……………榎本暁…17

#### ▼午後の部 13 時 35 分～18 時 15 分

- 4) 日琉諸語・諸方言の生成に向けた手法の提案—鹿児島方言を例に—………坂井美日…25
- 5) 八重山語西表西部諸方言における音調発生  
……………セリック・ケナン, 萩野千砂子, 五十嵐陽介…33
- 6) 愛媛県旧三崎町与侈（よぼこり）の三つ仮名弁について  
……………佐藤栄作, 久保博雅, 宮岡大…41
- 7) 八重山黒島方言の指示詞体系について……………萩野千砂子…49
- 8) 京都市方言の文末詞ガナの用法……………松丸真大…57

#### 付 錄

- |                             |    |
|-----------------------------|----|
| 方言関係新刊書目                    | 65 |
| 2023 年度方言関係博士論文・修士論文・卒業論文一覧 | 73 |
| お知らせ                        | 奥付 |

令和 6(2024) 年 5 月 31 日(金) 9 時 30 分から

国立国語研究所

# 日本方言研究会会則

昭和 62 年 5 月 22 日 制定  
平成 30 年 6 月 16 日 改定

1. 本会は日本方言研究会 (Cercle dialectologique du Japon : Dialectological Circle of Japan) と称する。
2. 事務所は日本国内におく。その場所は別に定める。
3. 本会は、日本方言研究の促進と研究者相互の連絡を目的とする。
4. 本会の事業は、(1) 年 2 回の研究発表会の開催、(2) 機関誌の発行、(3) その他、とする。
5. 会員は、日本の方言研究に関心を持ち、本会の活動に積極的に参加するものとする。このうち、本会からの情報の提供を受ける個人・団体を連絡会員、機関誌を定期購読する個人・団体を購読会員とする。手続きは別に定める。
6. 役員としては、世話人 12 名をおく。人選は世話人会が行う。世話人の任期は 4 年とし、2 年ごとに半数を改選する。世話人の 2 期兼任は認めない。ただし 2 年後の再任は妨げない。
7. 本会の運営のために次の委員会をおく。委員会は世話人と世話人外の委員で構成される。

## 研究発表会委員会、編集委員会、総務委員会

研究発表会委員会は研究発表会に関する業務、編集委員会は機関誌に関する業務、総務委員会は他の委員会の管掌する業務以外のすべての業務を担当する。委員の任期は 4 年とし、同一の委員会における 2 期兼任は認めない。必要に応じ、委員会を臨時におくことができる。その構成と任期は別に定める。

8. 経費は、(1) 会費、(2) 寄付金その他、でまかなう。会費の額等は別に定める。
9. 会則の改定手続きは、その都度定める。

世話人 \*新井小枝子・\*大橋純一・\*小川俊輔・\*小西いづみ・佐々木冠・\*澤村美幸・下地理則・\*高木千恵・竹田晃子・津田智史・中西太郎・原田走一郎  
(\*は 2025 年 5 月まで、無印は 2027 年 5 月まで)

研究発表会委員 \*大橋純一（委員長）・\*高木千恵（副委員長）・佐々木冠・津田智史・\*久保博雅・坂喜美佳・又吉里美・\*三樹陽介  
(\*は 2025 年 5 月まで、無印は 2027 年 5 月まで)

# 関西方言との接触による移住者の言語変化—会話データによる分析—

中村堯<sup>1</sup>

## 1. はじめに

人々は生活を営む過程で、生活拠点を移すことがある。日本国内で移住すると、移住先ではこれまでに聞き慣れていない方言を耳にすることになる。例えば関西圏へと移住した場合、実際の生活において「なんでやねん」「そんなんあかんやろ」といった表現が頻繁に聞こえてくる。関西方言は1980年代のお笑いブーム以降に全国へと広がり、全国的に「仲間内のことばとして若年層を中心に受け容れられ」(友定・陣内, 2004)るほど、影響力の強い方言である。本研究では、関西圏への移住後に、移住者のことばが関西方言と接触してどのように変化していくのかについて調査を行なう。

## 2. 先行研究と本研究の目的

言語接触後の言語変化について、Winford(2003)は言語変化の結果と過程をそれぞれ分けて考える必要があるとした。すなわち、言語変化の過程は「借用」と「干渉」の2つに大別され、言語接触場面での主要な言語変化は一般的に「借用」によるものであると述べている。実際の言語変化の過程を示す際には、「借用」の下位概念である「移入」(importation)と「代用」(substitution)で説明される。接触した言語の特徴を部分的にそのまま取り入れることを指す「移入」はことばの音、形式、意味をすべて引き継ぐ必要がないものとして定義されており、言語変化の初期段階に見られる変化であると考えられている。一方、「代用」とは自らの言語形式を変えずにことばを置き換えることである。「代用」は文法形式の置き換えに見られやすく、特に機能語や接続詞が頻繁に置き換えられるという見解が述べられている。

日本国内の言語接触については、徳川(1978)によって方言接触の結果として考えられる言語使用の類型がまとめられて以降、方言間の接触場面に着目した研究が行われるようになった。関西圏への移住者を対象としたロング(1990)では、大阪や京都で生活する他地域出身の大学生がどの程度京阪方言を受容しているのかについて調査している。その結果、出身地の方言を移住前と同程度使う移住者は少なく、京阪方言を受容すると出身地の方言を使わなくなる傾向が強いという結果が得られている。

しかしながら、これまで、移住後の言語接触場面を取り上げて、移住者の言語変化の過程を分析した研究は見られない。特に、日本の方言接触場面において、どのような過程を経て移住先の方言を受容し、移住者が自らのことばとして用いるようになるのかということはほとんど明らかにされていない。そこで、本研究は関西圏へ移住した大学生を対象と

<sup>1</sup> なかむら ぎょう (神戸大学非常勤職員) 221c116c@gsuite.kobe-u.ac.jp

して、関西方言との接触による言語変化の過程を縦断的に調査し、言語変化の過程を分析する。

### 3. 調査の概要と分析方法

調査は、関西圏への移住者と関西出身者の二人一組の会話を収録する形式で実施した。期間は2023年5月から2023年10月までの6ヶ月間とし、会話収録参加者二人一組の会話を毎月1回約15分間の会話を収録し、全6回の会話データを収集した。

本調査では、移住してから間もない大学1年生を対象とし、会話収録参加者二人一組はいずれも同性とした。2023年4月に参加者を募り、移住者の出身地域が大きく分けて(1)糸魚川・浜名湖線以東の地域(以下、東日本とする)、(2)東海地方(愛知県)(3)九州北部地方となるように考慮した上で、6組12名(男性6名、女性6名)の大学1年生に参加を依頼した。各組の移住者および関西出身者の性別、生育地および居住歴を表1に示す。

表1 会話収録参加者リスト<sup>2</sup>

ID	性別	生育地(居住年数)	その他居住歴	所属団体	アルバイト
A-EJ	男	新潟県上越市(18年)	-	運動系サークル	飲食(9月~)
A-KAN	男	京都府京都市(18年)	-		
B-EJ	女	東京都品川区(18年)	-	文化系サークル	教育(7,8月)
B-KAN	女	三重県鈴鹿市(18年)	-		
C-TK	男	愛知県名古屋市(13年)	大阪府堺市(2年) 岡山県倉敷市(3年)	運動系部活動	飲食(5月~) 塾講師(5月)
C-KAN	男	大阪府枚方市(18年)	-		
D-TK	女	愛知県一宮市(18年)	-	運動系サークル	飲食(5月~)
D-KAN	女	大阪府堺市(18年)	-		
E-KS	男	長崎県長崎市(18年)	-	運動系サークル	警備(6月~)
E-KAN	男	奈良県生駒市(18年)	-		
F-KS	女	熊本県菊陽町(11年)	熊本県天草市(7年)	運動系サークル	飲食(7月~)
F-KAN	女	大阪府東大阪市(18年)	-		

収録した会話データは書き起こしソフトNVivo Transcription(ver2.2)<sup>3</sup>を用いてWordファイルに文字化した。その後、共通語形と関西方言形の対立をもつ項目を対象として、Wordファイルの検索機能を利用し、対象項目の出現数を数えて分析を行なった。分析の対象項目は文法項目、表現項目、語彙項目の3つに大きく分かれる。具体的な分析対象項目は表2の通りである。文法項目については細谷(2004)および上林(2020)を参考として選定した。間投助詞の共通語形に「サ」を含めていないのは、共通語形と関西方言形で明確に異なる「ネ」と「ナ」の使用に焦点を絞るためである。「ナイ」「ティル」などの活用形が含まれ

<sup>2</sup> 各参加者の表記はEJ(東日本出身者)、TK(東海地方出身者)、KS(九州地方出身者)、KAN(関西出身者)とする。所属団体およびアルバイトは移住者に対してのみ調査を行なった。

<sup>3</sup> <https://sg-transcription.mynvivo.com/landing>

表2 分析対象項目

文法項目		表現項目			
	共通語形	関西方言形			
断定詞	ダ	ヤ	確認要求	ヨネ・デショ	ヨナ・ヤンナ
原因理由の接続詞	ダカラ	ヤカラ	提示	ヨ	デ
ノダ相当形式	ノダ・ンダ	ネン・テン	あいづち	ソウダネ	セヤナ
終助詞 ネ	ネ	ナ	語彙項目		
動詞の否定辞	ナイ	ン・ヒン・ヘン		共通語形	関西方言形
間投助詞	ネ	ナ	本当に	ホント(ウニ)	ホンマ(ニ)
アスペクト	テイル	トル	だめ・いけない	ダメ・イケナイ	アカン
形容詞省略形	オモシロ(イ) [語幹]クナイ	オモロ(イ) [語幹]ナイ	違う・ じゃない	チガウ ジャナイ	チャウ

る項目は、その活用形も合わせて検索を行った。ただし、「わからん」「それな」という表現はすでに全国各地で用いられている表現として考えられるため、本調査の分析対象には含めなかった。なお、相手の発言を引用したり模倣したりする形で出現した場合には、その数を総数に計上していない。表現および語彙の項目に関しては、真田ほか(2018)を踏まえた上で選び、派生形も含めて出現数を数えた。このような定量的分析を踏まえて、どのような移住者にどのような項目で言語変化が見られるのかについて検討を行った。

#### 4. 調査結果

移住者6名の調査結果について、それぞれ図1~6を示す。各図には、共通語形と関西方言形の総出現数の中で関西方言形が占める割合を算出し提示した。文法項目の結果は、出現数の平均が5回以下の項目を点線で表示した。

##### A. 東日本出身男性移住者（A-EJ：新潟県上越市出身）

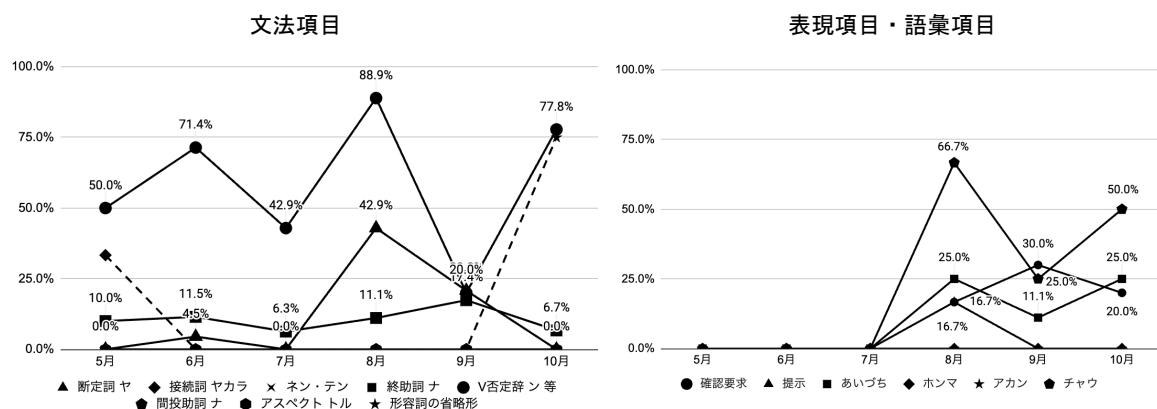


図1 東日本出身男性移住者の言語変化

文法項目の主な変化は、動詞の否定辞「ン」、断定詞「ヤ」、終助詞「ナ」に見られる。関西方言形の出現率は大学生活が始まって以降、増減をくり返すが夏期休業前の8月に最大となる。夏期休業を挟むと、9月の関西方言形出現率は大きく減少するが、大学の後期授業が始まると動詞の否定辞は77.8%の割合で関西方言形が出現し、形容詞の省略形も同様の割合で用いられている。表現項目では、7月までの3ヶ月は関西方言形が一回も出現していない。しかし、8月の会話では、すべての表現項目において関西方言形がわずかながら出現している。その後、「提示」については関西方言形の出現が見られないが、「確認要求」や「あいづち」では関西方言形の使用が見られる。語彙については、「チャウ」のみ関西方言形の出現が見られる。「チャウ」は、文法項目や表現項目で出現が見られた関西方言形の項目と同様に、8月に出現し、以降も継続的に使用されている。

## B. 東日本出身女性移住者（B-EJ：東京都品川区出身）

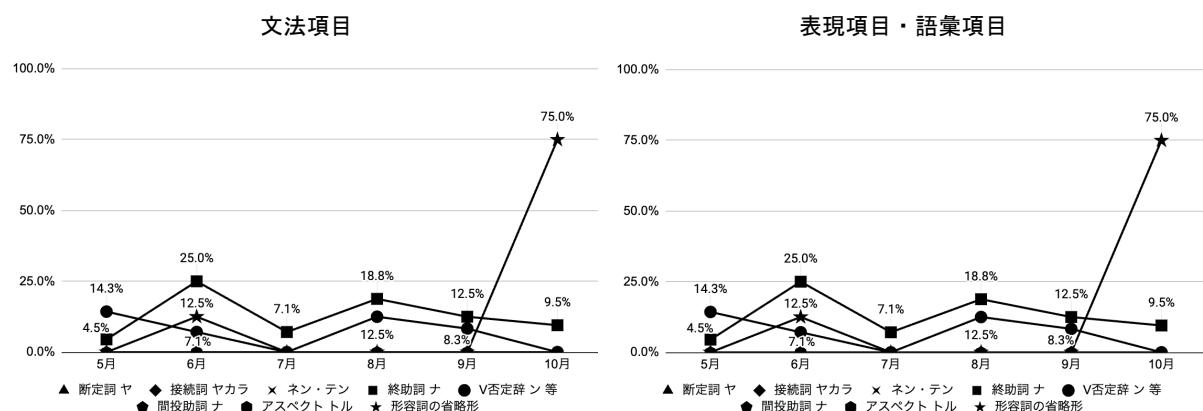


図2 東日本出身女性移住者の言語変化

文法項目の変化は、終助詞「ナ」、動詞の否定辞「ン」、形容詞の省略形で増減が見られる。東日本出身男性移住者の結果（図1）と比較すると、断定詞「ヤ」を除き同様の項目で関西方言形が出現している。増減について見ると、東日本出身男性移住者と同様に、6月および8月に関西方言形の使用率が増加している。しかし、その使用率は東日本出身男性移住者と比べて非常に少なく、依然として共通語形の使用が中心となっていることがわかる。表現項目では、関西方言形が1例も見られず、すべて共通語形が使用された。語彙項目についても共通語形の使用が大半を占めているが、8月に「アカン」が1例見られた。この「アカン」は9月以降の会話場面において再び出現することがなかったことから、突発的な出現であると言える。

## C. 東海地方出身男性移住者（C-TK：愛知県名古屋市出身）

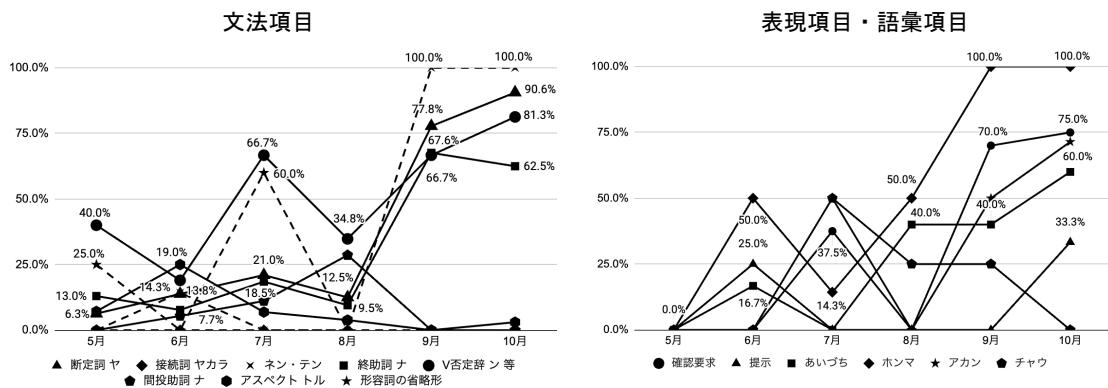


図3 東海地方出身男性移住者の言語変化

文法項目については、動詞の否定形「ン」、断定形「ヤ」、終助詞「ナ」の項目において関西方言形が多用されている。8月までの期間を見ると、アスペクト「トル」や間投助詞「ナ」、形容詞の省略形についても関西方言形が用いられているが、これらの項目は9月以降共通語形の使用が中心となっている。9月以降は動詞の否定形「ン」、断定形「ヤ」、終助詞「ナ」のいずれにおいても関西方言形の使用率が高く、関西方言形が自身のことばとして使用されるようになっていると言える。9月以降のノダ相当形「ネン」「テン」を見ると関西方言形が100%使用されており、関西方言との言語接触を経て、関西方言形が自身のことばとして確立され始めていることがうかがえる。表現項目の変化については、東日本出身男性の移住者と比較すると、言語接触後の早い段階より関西方言形が用いられ始めている。8月まではいずれの項目においても、関西方言形の使用率は50%以下にとどまっているが、9月には「確認要求」が70.0%、10月には「あいづち」が60.0%と関西方言形が多用されるようになっている。語彙項目では、8月までは50%以下の割合で関西方言形が使用されているが、9月、10月の会話では「ホンマ(ニ)」が100%使用され、「アカン」についても10月の会話において71.4%と比較的高い割合で関西方言形が使用されている。

#### D. 東海地方出身女性移住者 (D-TK : 愛知県一宮市出身)

東海地方出身の女性移住者の結果を見ると、文法項目における関西方言形の出現率は、動詞の否定形「ン」、終助詞「ネ」、アスペクト「トル」、断定形「ヤ」の4項目が増加している。東海地方は関西圏と近接地域であるため、調査初期段階より関西方言形の出現は確認されるものの、その使用率は移住の経過とともに増加する傾向にある。断定形については8月の時点まで、共通語形「ダ」の使用がほとんどであったのに対して、9月以降は関西方言形「ヤ」の使用が増加し、10月の会話では34.6%の割合で関西方言形が使用されている。東日本出身の女性移住者の結果（図2）と比較すると、東海地方出身女性移住者の関西方言形の使用率の方が大きく増加していることがわかる。表現項目については、「確認要求」が5月に33.3%、10月に50%の割合で関西方言形が使用され、10月には「あいづ

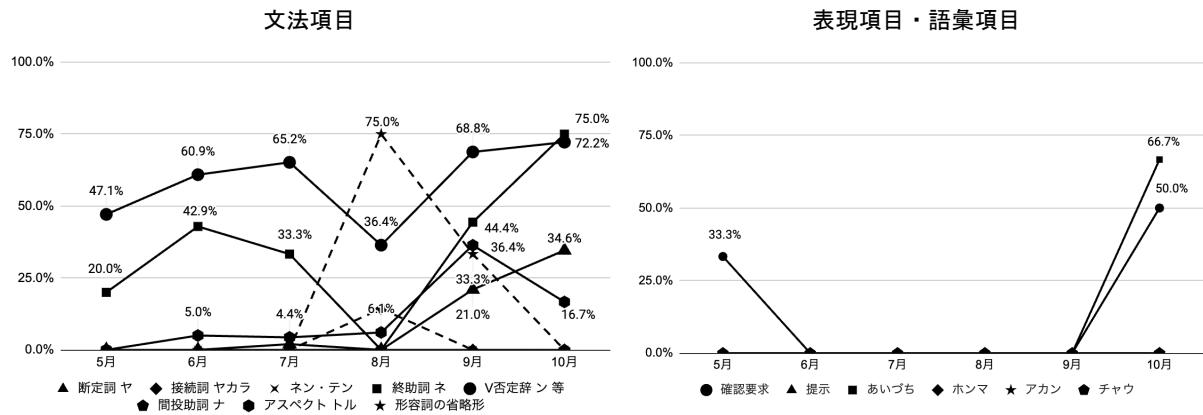


図4 東海地方出身女性移住者の言語変化

ち」でも関西方言形が 66.7%を占めている。5月から9月までの間は、関西方言形の表現項目がほとんど見られていないのに対して、10月の収録では比較的高い割合で関西方言形が出現している。語彙項目では、関西方言形の使用は1例も見られず、すべて共通語形の語彙が用いられている。

#### E. 九州地方出身男性移住者 (E-KS : 長崎県長崎市出身)

最後に、九州地方出身の男性移住者および女性移住者の結果について述べる。

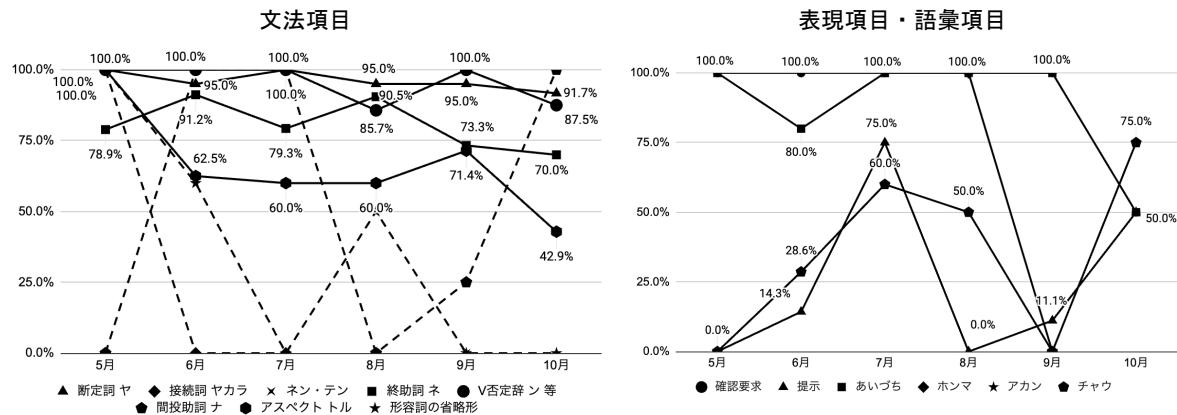


図5 九州地方出身男性移住者の言語変化

文法項目については、動詞の否定辞「ン」、断定詞「ヤ」、終助詞「ナ」における関西方言形の使用率が一定して高い。九州方言と関西方言は同じ西日本方言として、これらの項目が2つの方言の間で共通しているため、言語接触初期から高い割合で関西方言形が出現した結果となっている。アスペクトについては、九州方言において「トル」と「ヨル」の2つが使い分けられており、「トル」の出現率が高いものの、言語接触の過程で相手の関西

出身者は「テイル」形を多用する傾向にあることが把握されると、移住者自身のアスペクトでも「テイル」形の使用が増える。文法項目と同様に、九州方言と共に部分をもつ「確認要求」や「あいづち」ではほぼ一定して関西方言形が使用されている。一方、「提示」を示す「デ」は九州方言には存在しない表現であり、言語接触の過程を経て関西方言形の使用が増減をくり返している。「デ」は7月に75.0%、10月に50%の割合で出現しており、移住の経過とともに増加する傾向があると言える。語彙については、「ホンマ(ニ)」「アカン」の二項目がそれぞれ8月と7月に突発的に出現している。一方で、関西方言形語彙「チャウ」は、夏期休業明けの9月には見られないが、移住歴の経過とともに使用率が増加する傾向にあることがわかる。

#### F. 九州地方出身女性移住者（熊本県菊陽町出身）

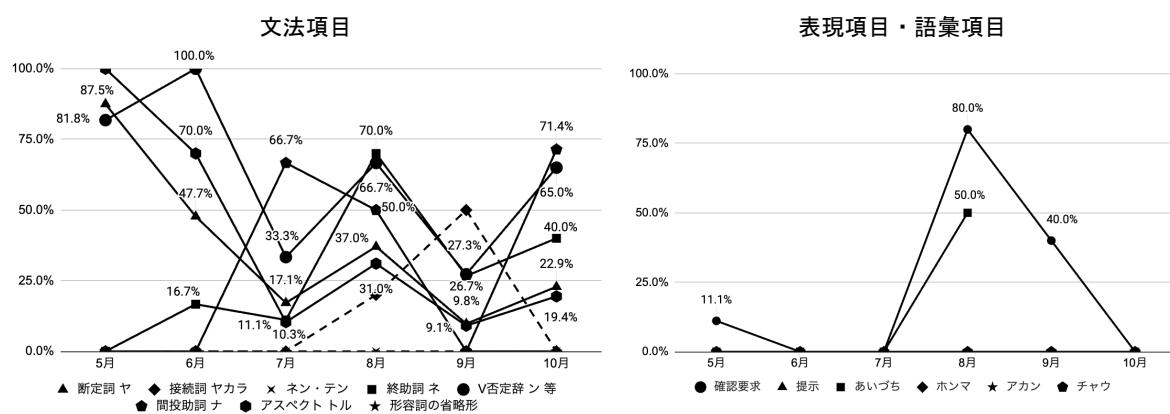


図6 九州地方出身女性移住者の言語変化

文法項目の変化については、九州地方出身の男性移住者と同様に、九州方言と関西方言形で共通している断定詞「ヤ」、動詞の否定辞「ン」、アスペクト「トル」が5月や6月の移住初期段階で多用されている。これらの項目は関西での移住歴が長くなると、関西方言形の使用率が減少し、共通語形の使用が増加している。収録6回目の10月では、動詞の否定辞「ン」が65.0%と比較的高い割合で使用されているのに対して、断定詞「ヤ」およびアスペクト「トル」はそれぞれ22.9%、19.4%と使用率が大幅に減少している。その一方で、間投助詞「ナ」および終助詞「ナ」は移住歴の経過とともに増加していることがわかる。表現項目については、共通語形が主に使われており、関西方言形の使用は限定的である。「確認要求」は4月に11.1%、8月に80.0%、9月に40%の割合で関西方言形が使用されている。「あいづち」は8月のみの出現であり、関西方言形の使用率は50.0%である。「提示」では関西方言形の出現が見られず、すべて共通語形が使用されている。語彙項目の結果については、東海地方出身の女性移住者と同様に、すべて共通語形が使用され、関西方言形の出現は1例も見られなかった。

## 5. まとめと課題

本調査の結果、関西方言と接触した移住者の言語変化は、性別や出身地域によって関西方言の使用率の増加に違いが見られた。本調査の結果においては、男性の移住者の方が女性の移住者よりも関西方言の使用率が大きく増加するという性差が見られ、出身地域別にみると、東海地方出身者の関西方言形使用率が顕著に増加した一方で、東日本出身者では共通語形の使用が目立った。九州地方出身者の場合は、母方言である九州方言と関西方言と共に共通する項目があるため、移住の初期段階より九州方言と同じ形式をもつ関西方言形の項目が多く使用されていたが、関西での生活を通して、アスペクト形式「トル」のように関西方言の中であまり使われていない項目の使用率は減少する傾向が示された。

移住者の所属コミュニティに着目すると、飲食系アルバイトや運動系部活動に所属している移住者は関西方言形の使用が増える傾向もあり、所属するコミュニティによって関西方言との接触頻度に差が生まれることが示唆された。さらに、移住者が使用した関西方言形の項目を会話データの文脈や前後の状況と照らし合わせてみると、断定詞や終助詞といった文法項目は移住者が共通語形から「代用」する形で相手に「あわせる」変化を見せていた。一方で、「アカン」のような関西方言らしさが強く表れる語彙は関西出身者の発言から引用され、「つられる」形で使われていたことから、関西方言に対する移住者の言語変化の過程には「あわせる」場合と「つられる」場合の2つがあることが考えられる。

今後は、本調査で変化が見られた項目について詳細な追跡を行ない、項目ごとの言語変化パターンを解明したい。また、本調査は形態的要素の分析にとどまっているため、音声面での言語変化を検討し、関西圏移住のことばに關西方言が「うつる」という現象についてさらに考えていただきたい。

### 【引用文献】

- 細谷書子(2004).「大阪市方言話者のスタイルの切り替え」『阪大社会言語学ノート』大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, 6, pp.42-63.
- 上林葵(2020).「関西若年層のカジュアル談話にみるスタイル切換え：首都圏移住者を例に」『阪大日本語研究』32, pp.37-61.
- ロング・ダニエル(1990).「大阪と京都で生活する他地方出身者の方言受容の違い」『国語学』162, pp.76-89.
- 真田信治 監修(2018).『関西方言事典』ひつじ書房.
- 徳川宗賢(1978).「単語の生と死 方言の場合」『国語学』115, pp.40-46.
- 友定賢治・陣内正敬(2004).「関西方言・関西的コミュニケーションの広がりが意味するもの—全国6都市調査から—」『社会言語科学』7(1), pp.84-91.
- Winford, D.(2003). Contact-Induced Changes — Classification and Processes, *OSU Working Papers in Linguistics* 57, pp.129-50.

# 首都圏在住の大阪出身若年層による言語実践の事例的検討

上林 葵<sup>1</sup>

## 1. 研究の背景と目的

本発表では、共通語化等の影響により多変種化の渦中にある現代日本社会における若年世代の言語運用能力の解明の一端として、大阪出身者を事例に、複数場面における言語実践の在りようを記述することを目的とする。個人の持つスタイル（「一人の言語使用者がさまざまな場面や状況に応じて使い分けることばのレパートリーおよびその使用がもたらす社会的、心理的、談話的効果（渋谷 2015:23）」）を実態面から捉えた試みは 2000 年代以降活発に行われてきており、例えばカジュアルとフォーマルという両極端のフォーマリティーに位置する場面での切換えの様相など、ベースとなる枠組みやデータの蓄積が進みつつある（渋谷 2002 ほか）。一方で、出身の異なる親しい相手との場面など、現代社会で起こりうる場面での運用の実態に関しては、解明の途上にあるといえる。

加えて、社会構造の変化や交通網の整備・発達に伴う人口の流出入等により、現代では「移住」という行為が国内外を問わず珍しいことではなくなっている。移住は人間のみならず、言語同士が接触する最大の機会でもあり、現代日本はいわば多変種（・多言語）化した社会へと変容しつつあるといえる。こうした中、移住者を対象とした言語研究は様々な側面から蓄積されてきたが、その多くは（「移住」がテーマであることから当然ともいえるが）移住先変種の習得や受容の過程の解明（ロング 1990 ほか）や移住前変種（母方言）の残存状況の把握（荻野 1995 ほか）など、特定の言語スタイルの獲得ないし維持・忘却といった変容プロセスに関わる、いわば通時的な側面への関心が強く見受けられた。その一方で、話者自身の保有するそうした種々の言語スタイルが、どのような場面において、どのような形で選択・実践されうるのかといった、共時的な側面を捉えた研究は多くはない。

そこで本発表では首都圏に住む大阪出身の若年層を事例として、出身地域の異なる二者を対象としたカジュアル場面での言語実践の在り方にについて、文法項目を中心に記述することを試みる。本発表の目的の詳細は下記の 2 点にまとめられる。

- A) 場面間での運用の実態にどの程度の異同があるか。違いがあるとすれば、どのような言語要素が切換えに与りやすいか。
- B) 切換えの在り方に性差はあるか。どのような項目に性差が現れやすいか。

以下ではまず 2 節で調査の概要を述べ、3 節で異郷/同郷対者に対する言語運用の異同について、話者及び分析項目の観点から分析する。続く 4 節で性差に着目し、場面間の切換えと話者の性別との関係について検討したのち、5 節でまとめと今後の課題を述べる。

<sup>1</sup> かんばやし あおい（志學館大学） akamba@shigakukan.ac.jp

## 2. 調査の概要

研究の方法として、大阪出身若年層男女の場面別の自然談話資料<sup>2</sup>を分析する。分析場面を親しい関係の相手とのカジュアル場面に固定し、その中でも切換えが生じやすいと想定される「対者の出身地の違い」を変数として、同郷出身者場面（以下「同郷場面」）と異郷出身者場面（以下「異郷場面」）の二場面間での方言形/非方言形の切換えの実態を見る。なお、出身地（ホーム）に現住の在阪者の場合だと切換えが起こりにくい可能性を考慮し、調査時点では大阪以外の地域（本発表では首都圏）に在住の話者のみを対象とした。

調査は2017年から2024年の間に実施し、言語形成期を大阪府下で過ごした男女各2名（計4名）に協力を得た。同郷場面では大阪ないしそれに準ずる近隣地域出身者と、異郷場面では関東圏ないしその近郊地域出身者と各1時間程度会話をしてもらい、その様子を収録した。主要な分析対象の4名と、各場面における対者<sup>3</sup>の話者情報を表1に示す。

表1 話者情報（●=主要な分析対象者）

話者ID <sup>※1</sup>	性別	生年	当時年齢	成育地	外住歴	主要話者との関係性
●F1	女性	1997	19	大阪府堺市	18-19: 東京都渋谷区	-
●F2	女性	1996	21	大阪府池田市	12-18: 大阪府箕面市、18-21: 東京都渋谷区	-
●M1	男性	1997	25	大阪府松原市	22-25: 東京都北区	-
●M2	男性	1997	25	大阪府堺市	24-25: 東京都板橋区	-
SF1	女性	1996	20	大阪府堺市	0-3: 大阪府大阪市	F1の同郷対者（高校以来の友人）
SF2	女性	1996	21	兵庫県宝塚市	なし	F2の同郷対者（小学校以来の友人）
SM1	男性	1997	26	大阪府東大阪市	なし	M1の同郷対者（大学以来の友人）
SM2 <sup>※2</sup>	男性	1997	25	大阪府松原市	22-25: 東京都北区	M2の同郷対者（中学校以来の友人）
DF1	女性	1997	19	神奈川県川崎市	0-2: 高知県内、2-4: 東京都内	F1の異郷対者（大学以来の友人）
DF2	女性	1997	20	静岡県三島市	18-20: 東京都渋谷区	F2の異郷対者（大学以来の友人）
DM1	男性	1995	28	新潟県新潟市	18-22: 福島県福島市、22-24: 愛知県名古屋市、24-26: 東京都北区、26-28: 福岡県福岡市	M1の異郷対者（職場の同期生）
DM2	男性	1999	24	東京都三鷹市	なし	M2の異郷対者（職場の同期生）

※1【話者IDの凡例】 S/D: 場面の区別（同郷場面=S、異郷場面=D） F/M: 性別記号(Female/Male) 数字: 話者識別番号

※2 M1と同一人物。

## 3. 異郷/同郷場面間での運用の異同

本節では各話者の異郷場面及び同郷場面での言語運用について、文法項目を対象に分析する。分析項目は（大阪）方言形と非方言形の対立を含むものを中心に、計7項目を選定した（各項目及びその具体形式は後掲の表2参照）。以下では話者ごとの運用特徴を確認したうえで（3.1節）、切換えに関与しやすい/しにくい項目について検討する（3.2節）。

### 3.1. 話者ごとの運用実態

はじめに、各場面における方言形・非方言形の使用割合の全容を話者ごとに確認する（図1）。図1からはまず、話者の場面間の運用にかなりの個人差のある点が見てとれる。運用パターンとして、【①】各場面での方言形/非方言形の使用割合に明瞭な差があり、当該場面

<sup>2</sup> 本発表で用いるデータの一部は、上林(2020)の分析でも使用している。

<sup>3</sup> 各場面の対者の中には主要分析対象者と年齢差のある者もいるが、当人らは友人同士であるとの認識を互いに共有しており、データにおいても年齢差の影響を感じさせるような箇所は見受けられなかった。

における期待形式（同郷場面での方言形、異郷場面での非方言形）がそれぞれ 9 割以上を占める【切換え明瞭型】（F1、M1）、【②】①に準じた運用ではあるが、当該場面での期待形式がそれぞれ 7 割前後にとどまる【切換え緩慢型】（F2）、【③】基本的に方言形の使用がベースにあり、異郷場面での期待形式（非方言形）の使用割合が 5 割以下の【母方言維持型】（M2）の 3 タイプに分けられる。切換え方が緩やかな②と③の話者も、項目によっては使用差のあることが予見されるため、次に各話者の項目ごとの具体的な使用実態を見ていくこととする（表 2）。

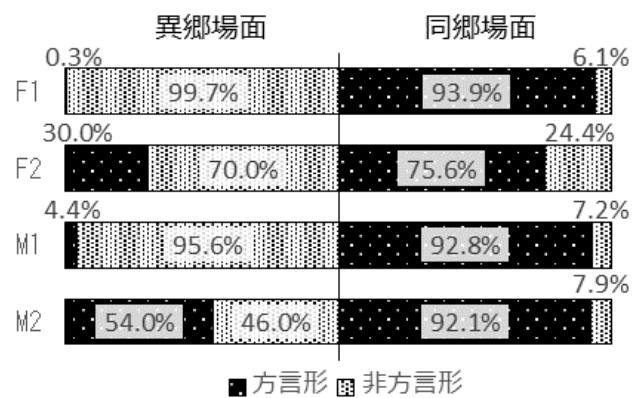


図 1 各話者の方言形/非方言形の場面別使用割合

表 2 各話者の項目別使用形式数一覧

分析項目 (点線以下が方言形)		F1		F2		M1		M2	
		異郷	同郷	異郷	同郷	異郷	同郷	異郷	同郷
断定形式	ダ	172	-	58	3	143	2	8	-
	ヤ	-	136	47	86	1	166	108	88
推量形式	デショ(ウ)	20	-	1	4	16	1	25	3
	ダロ(ウ)	11	-	13	-	16	-	3	-
	ヤロ(ウ)	-	39	3	13	2	34	12	24
動詞否定形式	ナイ※1	88	1	52	12	48	1	13	1
	ヘン/ピン	-	49	5	20	1	15	6	14
	ン	1	27	5	15	5	50	24	9
否定疑問形式	ジャナイ※1	23	7	6	10	13	4	3	7
	ジャン	83	-	10	-	6	-	-	-
	ヤン(カ)	1	44	16	60	4	23	7	26
ノダ相当形式※2	チャウ(ン)	-	8	-	3	-	8	-	7
	ノ(ダ)	60	-	26	-	28	5	2	-
	ンダ	35	-	6	-	19	-	-	-
間投助詞	ン(ヤ)	-	1	-	-	5	10	6	6
	ネン・テン	-	30	19	28	-	8	3	18
	ネ	15	5	14	7	37	3	28	-
終助詞	ナ	-	15	-	2	-	12	8	7
	ヨ	72	13	11	1	41	6	4	4
	ネ	39	2	62	49	64	8	83	11
	デ	-	18	4	2	-	10	1	8
	ナ	-	62	12	28	2	49	23	98

※1 音声的変異ネ(ー)、ジャネ(ー)を含む。※2 主節末に位置し、ネン・テンに対応する説明的用法を持つものに限定した。

まず F1 と M1 の結果を見ると、当該場面では表出しにくいと予見される形式（異郷場面での方言形、同郷場面での非方言形：以下「非期待形式」）が一部の項目を除いて少ないことがわかる。特に F1 は断定形式・推量形式・ノダ相当形式において方言形/非方言形を完全に切換えており、動詞否定形式や否定疑問形式もそれに準じた運用である。M1 も、各場面での非期待形式の数が終助詞を除き 6 例以下に収まっている。

F2 は、異郷場面に限らず同郷場面でも非期待形式が一定数見受けられるという特徴をも

つ。例えば動詞否定形式では、異郷場面での方言形ン・ヘン/ヒンが 10 例ある一方で、同郷場面での非方言形ナイも 12 例の使用がある。間投助詞や終助詞のネも同様であることから、これらは F2 の元来の言語運用自体が非方言（標準語）に寄ったものであることの現れとも考えられる。加えて、異郷場面内部での運用を確認すると、両形式をただ不規則に用いているのではなく、話題内容や、話題提供者が自身か対者かといった事項が動機となり、当該場面内で方言/非方言（標準語）モードに転換する様相が窺えた。

M2 は異郷場面での非期待形式が期待形式を上回る、切換えの最も少ない話者といえる一方で、項目によっては異郷対者への意識を窺わせる使用がある。例えば異郷場面の推量形式では方言形に加え、同郷場面では使用の少ないダロ（ウ）・デショ（ウ）が確認できる。特に後者は異郷場面の推量形式の中でも使用数が最も多く、M2 にとっての切換え項目であることを窺わせる。ノダ相当形式ノ（ダ）や間投助詞ネに関しても同様である。ただ、多寡の差はあるにせよ、異郷場面では全項目で非方言形・方言形の使用が確認できるのに対し、同郷場面では方言形のみ使用の項目が散見される（断定形式・ノダ相当形式・間投助詞）ことから、M2 は相手が方言話者である場合は方言形の使用に注意を払う（細谷 2004:55）大阪方言話者特有の運用特徴が現れた話者であるといえる。

### 3.2. 項目ごとの切換えやすさの違い

続いては使用項目の観点から、場面間の運用の異同を探ってみたい。次頁左に示す図 2 は、全話者の各場面での方言形と非方言形の使用総数を算出し、その割合を項目ごとに並べたものである。これによると、基本的にはそれぞれの場面での期待形式が多数を占めるものの、項目によってその使用に違いのあることがわかる。例えば推量形式は同郷場面・異郷場面ともに 8 割以上が期待形式で占められているのに対し、間投助詞は異郷場面では期待形式が 9 割以上を占めるものの、同郷場面では 7 割近くにとどまっている。これらはすなわち、推量形式は場面間での切換え度合いが比較的高い（切換えられやすい）のに対し、間投助詞は（もともと同郷場面でも非方言形式が一定数用いられていることから）切換え度合いが低い（切換えられにくい）ことを示しているものと思われる。

次頁右の図 3 は、こうした「切換えやすさの度合い（切換え度）」を項目ごとに数値化したものである。数値の高い項目ほど、場面間の切換えが明瞭になされた項目であることを示している。図から、切換え度の高いものとしてノダ相当形式と推量形式が挙げられる。動詞否定形式・否定疑問形式・断定形式がそれに続き、終助詞と間投助詞は際立って低い。

推量形式の切換え度の高さの要因としては、1 つに方言形ヤロ（ウ）に対する話者のイメージが挙げられる。尾崎（2003）によれば、確認要求用法の「やろ」は関西方言話者にとって「東京の人から否定的に受け取られる」とのイメージが強い形式であるという。実際に、本調査の異郷場面において、確認要求用法としてヤロ（ウ）を用いていたのは M2 のみ（12 例中 3 例）で、残る話者は推量ないし不定推量としての使用であった。なお、ヤロ（ウ）の

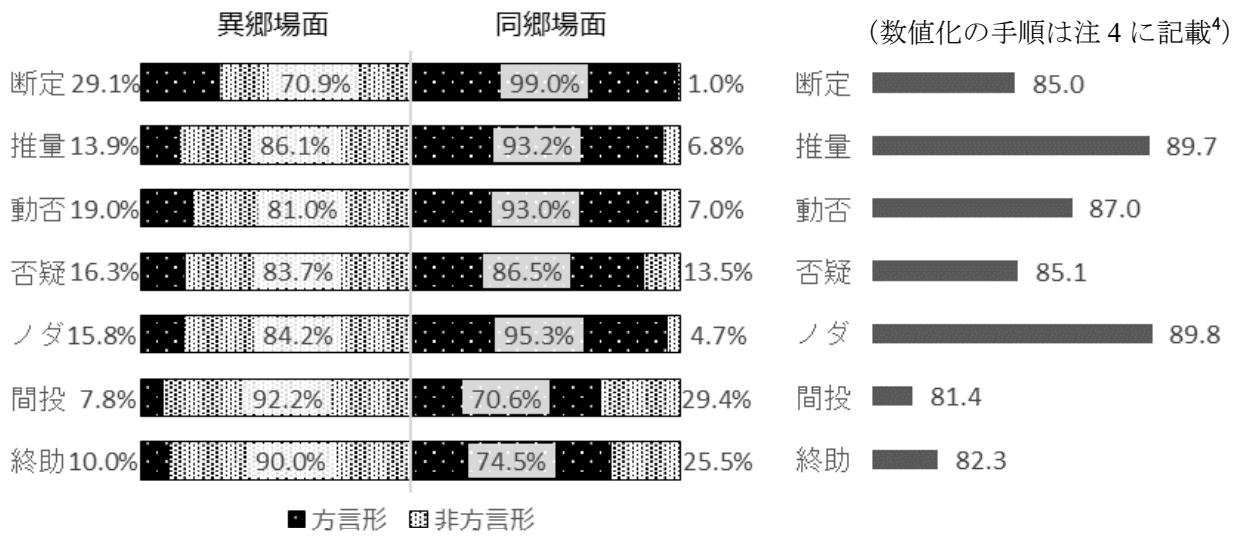


図2 各項目の方言形/非方言形の場面別使用割合

(数値化の手順は注4に記載<sup>4</sup>)



図3 各項目における切換え度(単位:点)

対応形式ダロ（ウ）の確認要求用法としての使用には地域差・性差が指摘されており、かつ近年では関東男性でさえも使用しないと意識する話者が少なくない（尾崎 2003:67）。この影響もあってか、異郷場面における確認要求用法としての推量形式（非方言形）の使用は、デショ（ウ）が多数を占めた（63例中58例）。

ノダ相当形式や動詞否定形式の切換え度の高さは、それぞれの項目の方言形と非方言形の形態的相違に基づくところが大きいように思われる。接触の過程において、話者にとって目立ち度（salience）の高い要素ほど失われやすい（Auer et al.1998）との指摘もあることを踏まえると、これらの形式は切換え項目として意識されやすいと考えられる。実際に談話収録後に行った確認調査において、大阪（関西）方言形式として思い浮かべやすいものの中に両項目の方言形（ネン/テン、ヘン（ン））を含める話者が複数名いた。

一方の終助詞・間投助詞に関しては先にも触れた通り、他項目に比べ、同郷場面での非方言形の比率が一定割合を占めていることが切換え度の低さに現れているものと思われる。特に終助詞ヨ・ネは、ばらつきはあるもののいずれの話者にも同郷場面での使用が認められる。方言形の使用もそれ以上に多いことから早々に結論を出すことは難しいが、当該項目においては非方言形が切換え項目として意識されづらいと推測できる。

一方で、このように量的には切換え度の低い間投助詞・終助詞ではあるが、用法の観点で見ると、場面間で異なる使い方がなされている事例があった。関西方言話者のカジュアル場面におけるネの使用実態に着目した高木（2020）は、当該話者のネの用法上の特徴と

<sup>4</sup> 【手順①】各項目の当該場面での期待形式の割合を点数に置き換える。

例) 断定形式: 異郷場面の期待形式(ダ)=70.9%→70.9点、同郷場面の期待形式(ヤ)=99.0%→99.0点

【手順②】各場面での期待形式の合計点を項目ごとに算出し、それらを100点満点中の値に換算する※。

例) 断定形式:  $(70.9 \text{ 点} + 99.0 \text{ 点}) \times 1/2 = 84.95 \text{ 点} \approx 85.0 \text{ 点}$

※切換え度が最も高い(完全に切換えられている)場合は200点(換算して100点)満点となる。

して、話し手の認識提示が中心であり、聞き手への反応要求（確認要求や聞き手への意識提示）の例がほとんど見られないことを指摘したが、例えば F2 の使用を見ると、確かに話し手の認識提示を示す例（1）が両場面で多数を占めるものの、異郷場面では聞き手への意識提示を示す例（2）も散見された。対する同郷場面では後者の使用は見られなかつたことから、形式上同じネではあるが、場面によって使用する用法に偏りがあるといえる。

- (1) あーなるほどネ。あたしお父さんみたいな人、絶対合わへんわー。 【F2 同郷】
- (2) (SNS のやり取りを) あんま続けんのもさ、あれかなと思ったのネ。 【F2 異郷】

#### 4. 話者の性別による運用の異同

続いて本節では、話者の性差と諸項目の運用との関係について検討する。結論から述べると、前節で取り上げた諸項目における方言形/非方言形の使用の有無ないし多寡そのものに関しては、場面間で明らかな性差は見られなかつた。先の図 1 を見ても、切換えの明瞭な話者とそうでない話者の中には男女それが含まれている。一方で、ある特定の形式において、それらの使用が一方の性に偏るという事例が複数見られた。本節ではその 1 つとして、ノダ相当形式を用いた文末表現のバリエーションを取り上げる。

ノダ相当形式の主節末における出方としては、ノ単独、ンダ、ン単独、ネン/テン、に加え、これら諸形式に終助詞ないしその複合形式（ヨ、ネ、ヨネ、ヨナ等）が接続した形が確認できた。各形式の内訳ならびにその出現数を表 3 に示す。

表 3 ノダ相当形式を用いた文末表現の内訳

	F1		F2		M1		M2	
	異郷	同郷	異郷	同郷	異郷	同郷	異郷	同郷
ノ+φ	59	-	22	-	10	-	2	-
ノ+終助詞	3	-	4	-	18	5	-	-
ンダ+φ	1	-	-	-	1	-	-	-
ンダ+終助詞	34	-	6	-	18	-	-	-
ン+φ	-	-	-	-	1	1	-	-
ン+終助詞	-	1	-	-	4	9	6	6
ネン/テン+φ	-	25	13	22	-	6	3	17
ネン/テン+終助詞	-	5	7	6	-	2	-	1

表から、ノの単独使用（ノ+φ）が全話者を通じて確認できるが、とりわけ女性話者を中心として一定数使用されていることがわかる（いずれも異郷場面での使用）。

- (3) (F1 のアルバイト先は) 暇な＼。夜はすごい暇な＼。 【F1 異郷】
- (4) その人、のり軽い＼ しかも。[略] のりが結構軽めな＼。 【F2 異郷】

平叙文でのノの単独使用が女性に多いことはこれまでにも指摘があり（日本語記述文法研究会編 2003 ほか多数）、本調査においても同様の結果が示されたといえる。なお、同使用は男性話者 M1 にも 10 例見られたが、M1 はノの終助詞後接形をより多用しており、特に

ヨの後接は異郷場面の「ノ+終助詞」18例中16例に上った(5)。M1は同郷場面でもノを5例用いている<sup>5</sup>が、これもすべてヨを伴っている(6)。

(5) スタバのやつ、ちょっと高いノヨ。(他店より) 一回り高いノヨ。【M1 異郷】

(6) あいつは準中〔準中型免許〕乗れんノヨ《乗れるのだよ》。【M1 同郷】

女性話者の「ノ+終助詞」は両名合わせて7例得られ、そのうち6例が「ノ+ネ」の形で現れた。残る1例はF2の「ノ+ヨネ」であり、M1の多用した「ノ+ヨ」の実現形は得られなかった。以上のこととは、女性話者は「ノ+φ」または「ノ+ネ」の形を、男性話者は「ノ+ヨ」の形を用いやすいことを示唆するものと思われる。

むろん、M2に関してはノ自体の使用が少ない上に「ノ+ヨ」の実現例もなかったことから、上記の分析を直ちに結論付けることは早計である。その一方で、方言形ンの使用に目を向けると、終助詞の後接の有無にやはり男女間で差があることに気づく。女性話者の「ン+終助詞」の出現数がF1の1例のみであったのに対し、男性話者からは複数確認できる。「ノ+終助詞」を用いなかつたM2も、ンの実現例はすべて終助詞ヨを伴っていた(8)。

(7) そうなンヨ。[略] 今 ほ ホテル高いンヨ。【M1 同郷】

(8) ちょっとあと一、おれ靴下買いたいンヨ。【M2 異郷】

女性話者は「ン+終助詞」に代わり、非方言形の文末表現としては「ネン/テン+φ」ないしその終助詞後接形(ネンナ/テンナ)を主に用いていた。なお、ノ/ンに終助詞ヨを伴わせる男性話者のこうした運用は、各場面の男性対者からも確認されている。対する女性話者の対者からは見られず、異郷対者は「ノ+φ」「ノ+ネ」、同郷対者は「ネン/テン+φ」「ネンナ/テンナ」の使用に偏っていた。

これらが意味することとして、1つにノの単独使用やネの併用に対する、女性性を帯びた表現であることへの意識が挙げられる。ノやノネが実態としても、また意識の上でも女性使用に偏りが見られることはこれまでにも言及があり(小川2006; 水本2010ほか)、本調査においても実態面では類似の結果を得た。ただ一方で、ノヨに関しても女性の志向形式であることが指摘されており、単純に女性的文末表現の回避が動機になっているとは言い難い。「ン+ヨ」の使用が男性に偏っている点(女性の使用が少ない点)とも合わせて、形式間の用法の違い等も含め、今後の検討課題としたい。

## 5. まとめと今後の課題

ここまで、成育地を離れ異郷の地で暮らす方言話者を対象に、その言語実践の在りようを事例的に考察することを試みた。本発表では特に首都圏に住む大阪出身若年層に目を向

<sup>5</sup> 大阪方言の準体助詞はンを基本とし、直前が撥音になる場合(動詞非過去形ル語尾の撥音便形または動詞否定形式ン・ヘン)において、ノ/ノンが用いられる(野間2014:26)。M1の同郷場面のノは5例中4例が直前に撥音便形を擁することから、方言形ンの異形態とする解釈が可能である。ただ、東京方言においても同現象が見られる(三井2017:63)点を踏まえると、M1の当該使用が方言形か非方言形か判断に迷うところである。本発表では、ンではなくノが選択された点(「乗れるンヨ」ではなく「乗れんノヨ」)に鑑み、便宜的に非方言形のノとして分類している。

け、対者の出身地の違いを変数として、同郷及び異郷場面での運用の異同を記述した。本発表で明らかにした点を、冒頭の目的 A) B) に対応させる形で下記 a) b) に示す。

- a-1) 場面間の切換えのパターンとして、置かれた場面での期待形式の使用を遵守する  
[切換え明瞭型]、両場面で期待形式の使用が一定割合に留まる [切換え緩慢型]、  
両場面で基本的に母方言の使用割合が高い[母方言維持型]の 3 タイプが見られた。
- a-2) 切換え度の高い項目としてはノダ相当形式や推量形式、動詞否定形式が、低い項目  
として終助詞や間投助詞が挙げられた。
- b-1) 場面間の切換え方に関して、現データからは特筆すべき性差は得られなかった。
- b-2) 一方の性に偏る運用として、ノダ相当形式を用いた文末表現の実現形を挙げた。従  
来の指摘どおりノ单独及び「ノ+ネ」は女性に偏る一方、「ノ+ヨ」及びその対応方  
言形「ン+ヨ」は男性に志向され、各場面の対者からも同様の運用が確認された。
- b-1) にも示した通り、本発表では場面間の運用の異同という点での性差を導くことはでき  
なかつた。一方で、[切換え明瞭型] の話者が男女を問わず見られた点は、他方言話者に比  
べ切換えの程度が小さいとされてきた大阪方言話者の運用能力の変容を捉える契機となる  
結果ともいえる。今回は若年層 4 名分という限られたデータ量からの分析となつたが、方  
言話者の切換え能力の実相に迫るためにも、さらなるデータの蓄積が課題である。加えて、  
今回得られた実態や傾向を大阪現住者（非移住者）の運用と比較することにより、移住者  
特有の実践の在り方を導くことも可能になろう。いずれも今後の課題としたい。

## 参考文献

- 小川早百合 (2006) 「話しことばの終助詞の男女差の実際と意識—日本語教育での活用に向けて」 日本語ジェンダー学会編『日本語とジェンダー』 pp.39-51, ひつじ書房./荻野綱男 (1995) 「大阪方言話者の移住による言語変容」 徳川宗賢・真田信治編『関西方言の社会言語学』 pp.178-200, 世界思想社./尾崎喜光 (2003) 「用法に地域差が伴う言語表現に対する相互評価—関東と関西の比較』『社会言語科学』 5-2, pp.58-73, 社会言語科学会./上林葵 (2020) 「関西若年層のカジュアル談話にみるスタイル切換え—首都圏移住者を事例として』『阪大日本語研究』 32, pp.37-61./渋谷勝己 (2002) 「プロジェクトの概要』『阪大社会言語学研究ノート』 4, pp.1-10./渋谷勝己 (2015) 「書きことばにおけるスタイル生成のメカニズム—山東京伝を例として』『社会言語科学』 18-1, pp.23-39, 社会言語科学会./高木千恵 (2020) 「若年層関西方言話者のカジュアルスタイルにおける「ネ」の使用』『阪大日本語研究』 32, pp.1-24./日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』 くろしお出版./野間純平 (2014) 「大阪方言における準体助詞ン・ノ・ノンーノンの分布を中心に』『阪大社会言語学研究ノート』 12, pp.23-36./細谷書子 (2004) 「大阪市方言話者のスタイル切換え』『阪大社会言語学研究ノート』 6, pp.42-63./水本光美 (2010) 「テレビドラマ—“ドラマ語”としての「ことば」』 中村桃子編『ジェンダーで学ぶ言語学』 pp.89-106, 世界思想社./三井はるみ (2017) 「東京都方言」 方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集 (3) 活用体系 (2)』 pp.57-66./ロング, ダニエル (1990) 「大阪と京都で生活する他地方出身者の方言受容の違い』『国語学』 162, pp.12-25./Auer, P., Barden and B. Grosskopf. (1998) Subjective and objective parameters determining “salience” in long-term dialect accommodation. *Journal of Sociolinguistics*, 2-2, pp.163-187.

# 愛知県における語アクセント動態について

榎本 晓<sup>1</sup>

## 1. はじめに

本発表では、愛知県内（名古屋市、知多市、半田市、豊橋市）で行った語アクセント動態に関する調査の結果について報告する（地理については、図1を参照）。<sup>2</sup> 愛知県には、尾張方言、三河方言が存在する。それぞれの方言の分布を、江端（2013）を引用し図2に示す。図中Aは、名古屋市を含む尾張方言の集合、Bは三河方言の集合を示す。Cについては、尾張方言と三河方言を共有するものと説明されている。本発表の主題である「語アクセント」に関しては、尾張方言と三河方言が、異なったアクセント形を示すことが指摘されてきている。三河方言は東京方言に近似のものと報告されるが、尾張方言では東京方言と異なるアクセント形を持つ語が数多く見られる（柴田, 1950; 金田一, 1978）。<sup>3</sup>

本発表では、現代において、各方言間で語アクセント形にどのような違いが存在しているか、また、関係する地域において、世代間でどのような発音変化が生じているかについて報告を行う。



図1 愛知県地図

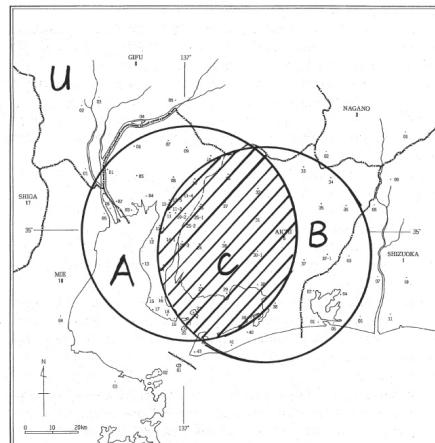


図2 愛知県の方言地図（江端, 2013 より）

## 2. 調査内容

### 2.1 調査の対象とした語について

<sup>1</sup> えのもと あきら(名城大学)

<sup>2</sup> 本発表の内容は、榎本（2021）、榎本他（2022）、榎本他（2023）でも報告されている。ここでは、これらの内容に、名古屋市中学生、知多市中年層・中学生のデータを追加し、4地域における語アクセントの変化を総合的に論ずることを試みる。

<sup>3</sup> 金田一（1978）は、愛知県内のアクセントに、内輪式東京アクセント（尾張式アクセント）、中輪式東京アクセント（西三河式アクセント）、外輪式東京アクセント（東三河式アクセント）の3つを認めている。本発表で調査を行った半田市は、知多半島内にあり、金田一の定義では、尾張式アクセントをとる地域となるが、実際には、半田市では、三河方言に特有の「じゃん、だら、りん」といった表現や、三音節形容詞第一類の発音様式が確認されたりする（本発表調査2の結果参照）。本発表では、半田市（知多半島東岸）が、三河方言域に属すると仮定し議論を進める。

調査においては、(a)この地方の文化の中心である名古屋市で話される方言（尾張方言）に特徴的な、東京方言とは異なるアクセント形を持つ語、(b) 近年アクセント論においてその発音変化が指摘されている語を調査対象とした (cf. 塩田, 2016)。対象語は、次の通りであるが、発表者の観察による名古屋（尾張）方言に典型的な発音パターンとともに示す（「」はアクセント核を表す。また、「いの'ち」「あわ'れ」という発音は、古形となる）。

### [1] 調査で用いられた語について

- |   |                        |
|---|------------------------|
| 1. それは <u>甘い</u> 。その <u>甘さ</u> は格別です。                   | (あま'い、あ'masa)          |
| 2. それは <u>明るい</u> 。しかし、とても <u>重い</u> 。                  | (あかる'い、おも'い)           |
| 3. <u>あくる日</u> に、 <u>くつ</u> を買った。                       | (あく'rひに、く'つ)           |
| 4. <u>勝ち抜く</u> 。 <u>出くわす</u> 。 <u>備え付ける</u> 。           | (かちぬ'く、でくわ'su、そなえつけ'r) |
| 5. <u>いつ</u> <u>帰える</u> の。はやく <u>帰ってね</u> 。             | (いつ、かえ'r、かえ'tte)       |
| 6. ここに <u>居て</u> 、風を <u>感じたり</u> 、景色を <u>見たり</u> して下さい。 | (いて、かんじ'tari、(みた'ri))  |
| 7. 熊が <u>あわれだ</u> 。                                     | (く'ma、あわ're)           |
| 8. <u>命</u> を大切に。                                       | (いの'ち)                 |
| (9. <u>くつ</u> を履いて <u>坂</u> を登った。)                      | (さ'ka)                 |
| (10. それをはやく <u>返してね</u> 。)                              | (かえ'shite ne)          |

### 2.2 調査参加者

調査参加者は、下記の通りとなる。

#### ・調査(1)

知多市で生まれ育ち、現在も在住の方（大正12年生まれ～昭和40年生まれの方 37名）

#### ・調査(2)

名古屋市（中年層（50～60代）10名（平均年齢59.7才（令和6年））、中学生16名）

知多市（中年層（50～60代）15名（平均年齢60.7才（令和6年））、中学生10名）

半田市（中年層（50～60代）10名（平均年齢59.2才（令和6年））、中学生10名）

豊橋市（中高年層（50～80代）12名（平均年齢70.4才（令和6年））、中学生12名）

成人、中学生とも、少なくとも両親のうちどちらかが関係の地区で生育された方で、本人も同じ地区で生まれ育ち在住している方を調査対象とした。

### 2.3 調査手順

上記 [1] に示した内容を印刷したものを調査参加者に提示し、読み上げてもらった。調査(1)では、高齢者を対象として調査を行ったこともあり、負担を考慮し読み上げは1回とした。発音が確認しづらかったり、予測と異なるアクセントパターンで読まれた場合に、調査の最後に関係の文をもう一度読み上げてもらい、アクセント形を再度確認した。調査

(2)では、各調査参加者に2回文を読み上げてもらった（1回目1~10、2回目1~10という順となる）。音声はマイクとPCMレコーダーを通じて録音され、後にコンピューターを用い再生し、書き起こしを行った。

### 3. 調査結果

#### 3.1 調査(1)に関する結果

はじめに、調査(1)に関する結果について報告する。調査結果を表1に示す（紙面の都合上、ここでは、大正12年～昭和20年生まれの方の調査結果のみ示す）。表においては、左端に調査対象語を示し、その次（右側）に各語の東京方言のアクセントパターン、次に知多（尾張）方言（中年層）に典型的と考えられるアクセントパターン（発表者による判断）を示している。表中では、調査参加者が関係の語を東京方言のパターンで読み上げた場合には○で、知多方言におけるアクセントパターンで読み上げた場合に、●で記載している。調査参加者のデータは、年代別に（出生年）を基準に、コラム左端に最高齢者が来るようにして記載されている。表において太字の縦線が入っている部分があるが、これは、その部分でアクセント形の変化が生じていることを示そうと発表者が記入したものである。概略、次のような特徴および発音変化が観察される。

はじめに、「甘い」「重い」「明るい」など、形容詞が関係した語群について、大正12年から昭和6年生までの調査参加者において、これらの形容詞を東京方言と同じ無核平板型のパターンで発音する傾向があることが確認できる。この世代以後、中高の名古屋（尾張）方言的なアクセントパターンが多く確認されるようになっており、名古屋方言が伝播したと推定される（cf. 江端, 1974）。<sup>4</sup> 「勝ち抜く」「出くわす」「備え付ける」などの複合動詞については、この地域では、大正12年生まれの方からずっと、中高のパターンをとっている。

「明くる日」「靴」も同様に、大正12年生まれの方からずっと、知多（尾張）方言特有のパターンをとっている。一方で、「熊」「坂」といった語については、東京方言と同じパターンが多く観察される。次節（3.2）で示すが、これらの語については、「中年層」では、「くま」「さか」といった名古屋（尾張）方言にみられる中高の発音が主流となる。「いつ」「見たり」「あわれ」「命」については、昭和11年生まれの方くらいから、東京方言と同じ発音パターンへの変化が観察されるようになる。馬瀬他（1996）は、広島、長野市で調査を行い、両地域において、昭和21年以降の出生者に「いのち」から「いのち」への急激な発音変化が発生していることを報告し、これを、テレビを媒体とする放送言語の影響としている。<sup>5</sup> ここでのデータは、馬瀬他におけるデータよりも少し前の世代となるが、愛知県でも放送言

<sup>4</sup> この地域における社会的変化としては、名古屋市とつながる鉄道（愛知電気鉄道株式会社（（現）名古屋鉄道株式会社：名古屋市熱田区 - 常滑市大野間）が明治45年に開業している。

<sup>5</sup> 金田一（1978）では、広島、長野県で話される方言は、双方とも「中輪東京式アクセント」に属すと定義されている。母方言が同じ型に属すのであれば、違う場所であっても、同じ時に、同じように発音変化が発生するというのが、メディアの影響の特徴であると思われる。

表1 調査1(知多市高年層)に関する結果

調査対象語	東京方言 (東)	知多方言 <span style="color:red;">知</span>	性別																										
			女	女	女	男	男	女	女	男	男	女	女	男	男	女	女	男	男	女	女	男	女	女	男	女	男		
あまい	あまい	あま'mi'	東	知	東	東	東	知	東	知	東	知	東	知	東	知	東	知	東	知	東	知	東	東	東	東	東	東	
あかるい	あかるい	あかる'i	東	知	東	東	東	知	東	知	東	知	東	知	東	知	東	知	東	知	東	知	東	東	東	東	東	東	
おもしい	おもしい	おも'i	東	東	東	東	東	知	東	知	東	知	東	知	東	知	東	知	東	知	東	知	東	東	東	東	東	東	
あまさ	あまさ	あまさ	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	
かちぬく	かちぬく	かちぬ'k	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	
でくわす	でくわす	でくわ'su	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	
そなえつける	そなえつける	そなえつける	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	
あくるひ	あくるひ	あくるひ	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	
くつ	くつ	くつ	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	
くま	くま'	くま'	東	東	東	東	東	知	東	東	東	知	東	東	知	東	東	知	東	東	知	東	東	東	東	東	東	東	
さか	さか	さか	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a	東	n/a																				
いつ	いつ	いつ	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	
かえる	かえる	かえ'r'る	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	
かえって	かえって	かえ'r'つて	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	東	東	東	東	東	東	東	東	東	
いて	いて	いて	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	
かんじたり	かんじたり	かんじ'dari	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	
みたり	みたり	みたり	知	東	東	東	東	東	知	東	東	東	知	東	東	知	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	
あわれ	あわれ	あわれ	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	東	知	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	
いのち	いのち	いの'ち	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	知	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東	東

知 = かんじたり

語の影響を受け、標準語のアクセントパターンへの変化が発生したと思われる。（「帰る」「帰って」「いて」などについては、この世代（高年層）においては、知多（尾張）方言の発音が主流である。これらの語における標準語の発音パターンへの変化は、昭和40年以降に生まれた方より始まる（調査(2)参照）。）

### 3.2 調査(2)に関する結果

この節では、名古屋市、知多市、半田市、豊橋市において、中年層・若年層（中学生）を対象に行った調査の結果を報告する（豊橋市のみ中高年層対象の調査となる）。はじめに、「甘い」「重い」「明るい」など、形容詞が関係した語群の発音について報告する。結果にお

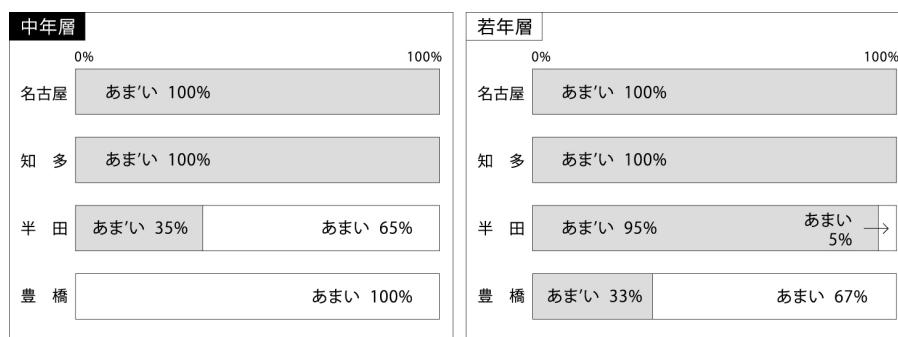


図1 「甘い」の発音に関する集計結果

いて特徴的なのは、半田市・豊橋市の中年層の発音において、「あまい (LHH)」「あかるい (LHHH)」という無核平板型の発音が主となっている点である。これは、これらの地域が三河方言域に含まれることを示していると考えられる。他に確認できるのは、半田市・豊橋市の中学生の発音において、「あまい (LHL)」という中高の型が増えているという点である。同時に、半田市・豊橋市の中学生における中高型の発音の拡がりに「差」が見られることも指摘できる。この発音変化は、名古屋からの地理的距離に

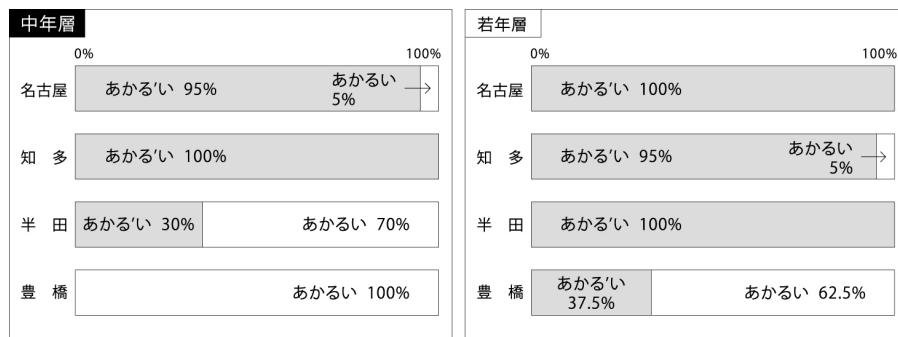


図2 「明るい」の発音に関する集計結果

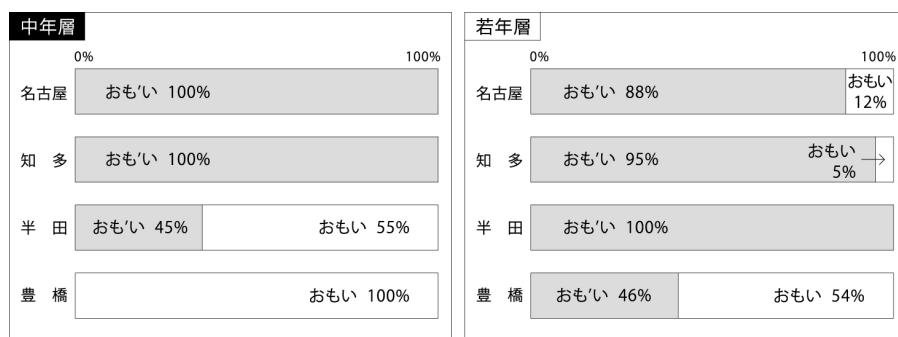


図3 「重い」の発音に関する集計結果

(反) 比例しており、名古屋から遠いほど（豊橋市を指す）、形容詞の中高化の傾向が低くなっている。変化が一律に進んでいないことより、これをメディアの影響ではなく、名古屋（尾張）方言の伝播であると考える。（「甘さ」については、発音傾向は、どの地区も「甘

い」とほぼ同じであったため、紙面の都合上、図の記載を省略する。)

次に複合動詞の発音についてであるが、「勝ち抜く」「備え付ける」に関しては、4 地域全

てにおいて、中年層・若年層ともほぼ 100% 中高の発音となっていた(「備え付ける」については、紙面の都合上図の提示を省略する)。

「出くわす」については、若年層において平板型の発音が一定数確認された。

### 「明くる日」「靴」

「熊」「坂」など名詞に関する結果について報告すると、「明くる日」については、金田一(1978, p.113)が、尾

張・美濃地区で中高の発音がみられると報告しているが、三河地区でも使われていることが確認できる。また、若年層(知多市・半田市)において「あくるひ」という尾高の発音

が使われるようになってきていることも指摘できる。これは標準語と同じアクセントパターンでありメディア等の影響によるものかもしれない。

### 「靴」「熊」について

は、豊橋市中老年層で、尾高の発音を確認できるが、全ての地区で、頭高の発音が主流となっている。これは、愛知県に特有の発音のようである(cf. 岩井,

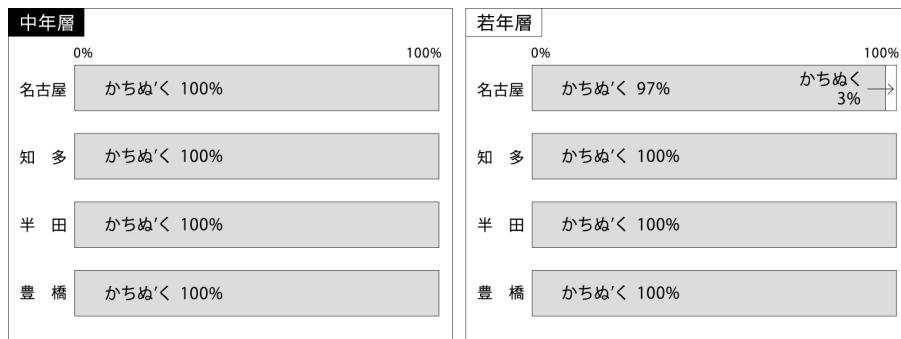


図4 「勝ち抜く」の発音に関する集計結果



図5 「出くわす」の発音に関する集計結果

張・美濃地区で中高の発音がみられると報告しているが、三河地区でも使われていることが確認できる。また、若年層(知多市・半田市)において「あくるひ」という尾高の発音

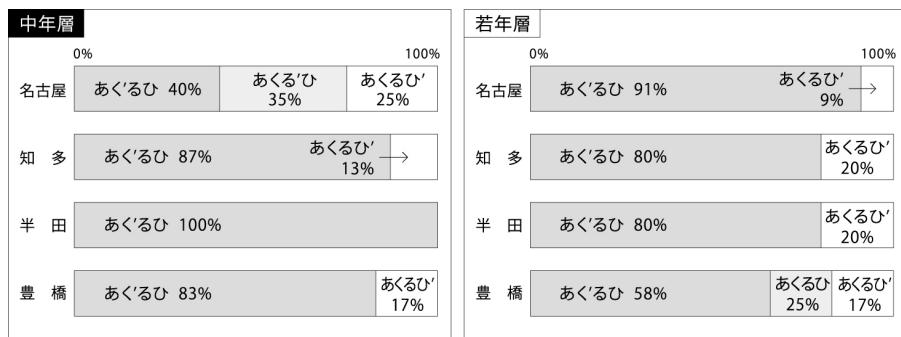


図6 「明くる日」の発音に関する集計結果

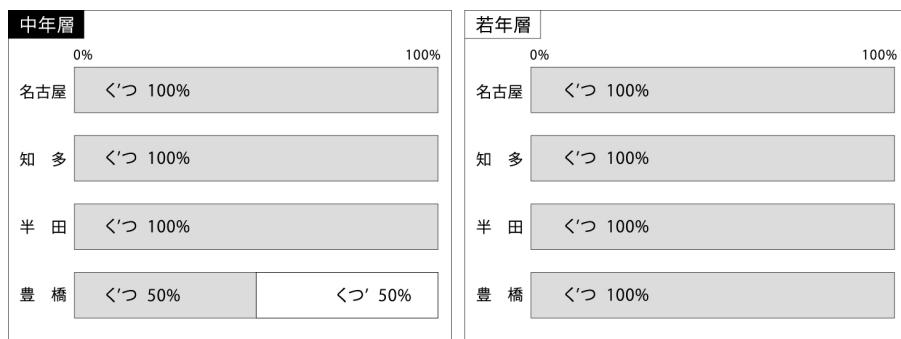


図7 「靴」の発音に関する集計結果

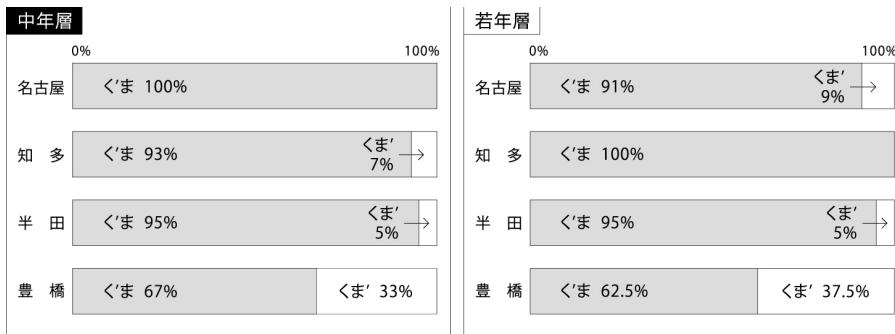


図8 「熊」の発音に関する集計結果

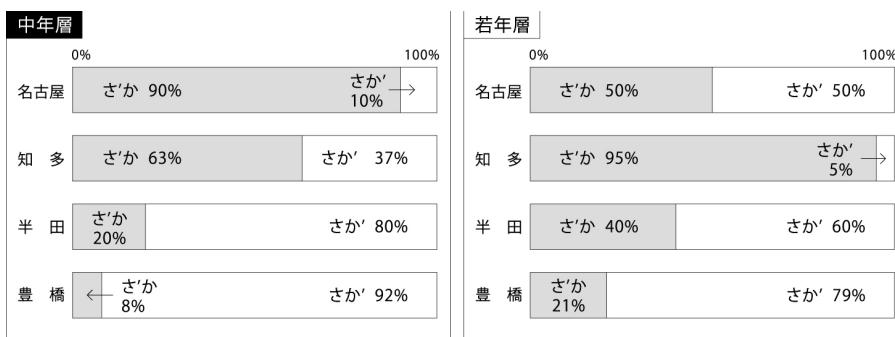


図9 「坂」の発音に関する集計結果

（「帰って」「居て」「感じたり」「返して」などの、疑問詞、動詞の発音についてまとめ、「帰って」の発音に関しては、「帰る」と類似であったため、紙面の都合上、図の提示を

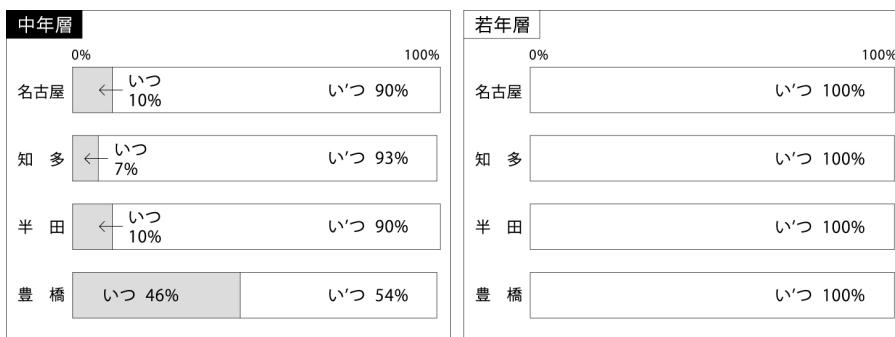


図10 「いつ」の発音に関する集計結果

る。その流れと同じと思われるが、豊橋市中高年層を除き、中年層にわずかに平板型の発音が確認できるが、中年層、若年層とも、ほぼ標準語と同じ頭高型の発音となっている。

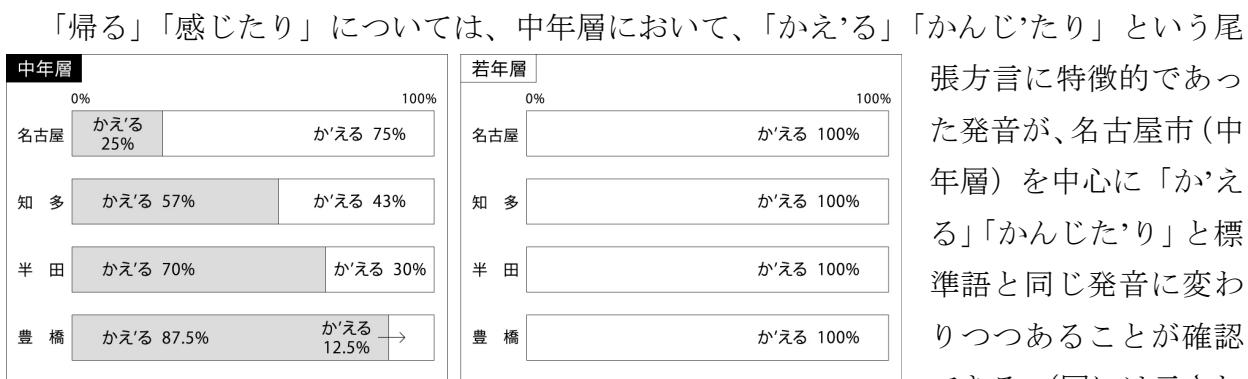


図11 「帰る」の発音に関する集計結果

1983)。また、「坂」については、尾張地区で頭高の発音が主流となっているが、三河地区では、尾高の発音が主流である。発音の変化としては、半田市・豊橋市若年層において若干頭高の発音が増えていていること、名古屋市の若年層で、東京方言と同じ尾高の発音が増えていることが確認できる。

次に、「いつ」「帰る」

省略する)。はじめに、「いつ」の発音についてであるが、調査(1)で言及したが、「いつ」を平板型で発音するケースは、知多市では、昭和 11 年生まれの方くらいから減ってきててい

る。その流れと同じと思われるが、豊橋市中高年層を除き、中年層にわずかに平板型の発音が確認できるが、中年層、若年層とも、ほぼ標準語と同じ頭高型の発音となっている。「帰る」「感じたり」については、中年層において、「かえる」「かんじたり」という尾張方言に特徴的であった発音が、名古屋市(中年層)を中心に「かえる」「かんじたり」と標準語と同じ発音に変わりつつあることが確認できる。(図には示され

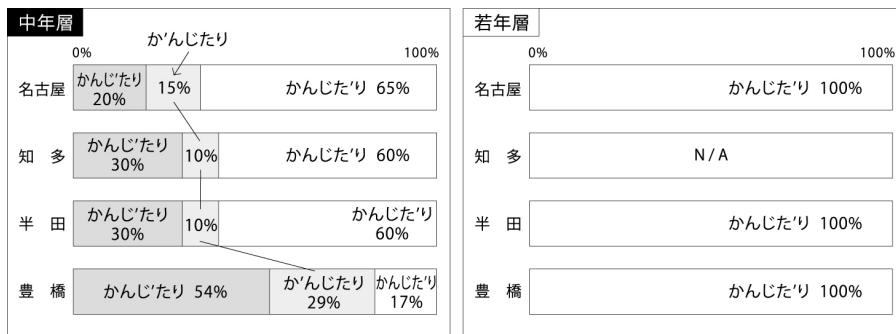


図12 「感じたり」の発音に関する集計結果

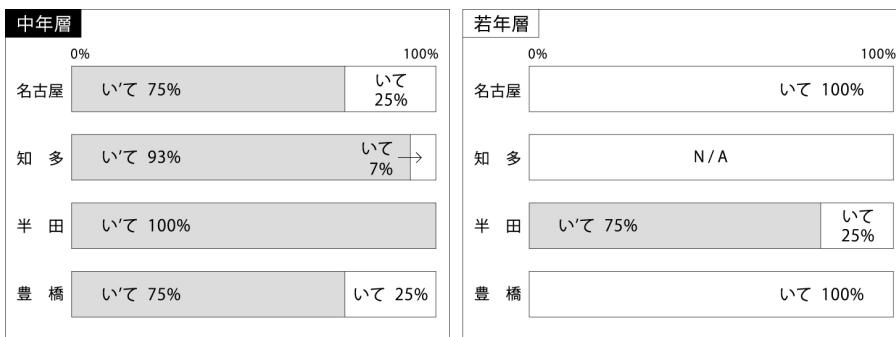


図13 「居て」の発音に関する集計結果

り」「いて」という東京方言と同じパターンの発音となっている。<sup>6</sup> すべてが共通語化されるわけではなく、この地域の文化の中心である名古屋市の言葉の影響も存在していることを強調しておきたい。

ていないが、この変化は、知多市・半田市では、昭和40年生まれの方くらいから顕著となる。また、豊橋市(中高年層)において、「かえる」「かんじる」という(昔の(高年層の))尾張方言に特有の発音が主流を占めていることも興味深い)。これらの動詞について、若年層においては、ほぼ全ての地域において100%「かえる」「かんじた

り」全般的に変化が起きているという点で、メディアを通じた、東京方言の影響を考えることができると思われる。

#### 4.まとめ

本発表では、愛知県内で行った語アクセント動態に関する調査の結果について報告した。アクセント変化の中に、名古屋(尾張)方言の伝播と標準語の浸透の2つの傾向を確認した。言葉の変化において、すべてが共通語化されるわけではなく、この地域の文化の中心である名古屋市の言葉の影響も存在していることを強調しておきたい。

**引用文献** 岩井隆盛(1983)「中部方言の概説」『中部地方の方言』国書刊行会／江端義夫(1974)「愛知県地方の方言の分派とその経脈」『広島大学教育学部紀要』2-22／江端義夫(2013)「総論」『愛知県のことば』明治書院／榎本暁(2021)「愛知県知多方言における語アクセントの変化について」『名城大学人文紀要』127／榎本暁・間瀬三恵子・山添直樹(2022)「愛知県半田市亀崎地区における語アクセントの変化について」『名城大学人文紀要』130／榎本暁・伊藤紀子(2023)「愛知県豊橋市高豊地区における語アクセントの変化について」『名城大学人文紀要』133／金田一春彦(1978)「愛知県アクセントの系譜」『国語学論集』1／塩田雄大(2016)「新・アクセント辞典ポイント解説!～改訂から見える“放送のことば”～」(NHK文研フォーラム2016発表ハンドアウト)／柴田武(1950)『文字と言葉』刀江書院／馬瀬良雄・小橋裕恵・竹田由香里・中東靖恵(1996)「広島市方言における語アクセントの動態」『音声学会会報』210

<sup>6</sup> 全ての地域で調査を実施できていないが、「返して」の発音に関しては、知多市中年層のうち、68%が中高型の「かえ'して」、名古屋市・知多市の中学生は、100%、頭高型の「かえして」となっていた。

# 日琉諸語・諸方言の生成に向けた手法の提案—鹿児島方言を例に—<sup>1</sup>

## 坂井美日<sup>2</sup>

### 1. 本稿の概要

本稿では、既存の生成 AI モデルを活用して日琉諸語・諸方言を生成する手法を提案する。研究目的の 1 つは、消滅危機言語・方言をはじめとする日琉諸語・諸方言の継承支援に資する学習ツール開発である。多くの諸語諸方言は低資源（データ量が乏しい）である。生成 AI のベースは大規模言語モデル（LLM）であるため、精度はデータ量に依存することから、低資源言語・方言の生成は一般に困難である。この克服案として坂井（2024）では、対象となる言語・方言のテキストと辞書を標準日本語対訳で整備し、更にその言語知識をプロンプトに入力することで生成精度が向上する可能性を示した。本稿ではその具体的検証を進め、入力に A. 標準語対訳テキスト、B 標準語対訳辞書、C. 言語知識の三者が揃うことが正確な生成を実現する（1 つでも欠けると困難）ということを述べたうえで、入力や学習の具体的な内容を提案する。AI 活用の可能性という観点からも、当該方言の三者のデータを揃えるのが望ましい。

### 2. 背景と研究の整理

#### 2.1. 消滅危機言語・方言問題の現状

日本においても言語・方言の消滅危機が課題に挙がることが多くなった。文化庁は方言の継承に向けた国語施策を実施し（文化庁 HP）、国立国語研究所をはじめとする研究機関も方言継承支援活動のプロジェクトを開催するなど（木部ほか 2011）対策がなされているが、現時点ではまだ充分な解決に至っていない。

#### 2.2. 生成 AI と語学学習

今回、方言継承支援の観点から新たに着目するのが、いわゆる「生成 AI」である。トランスフォーマーベースの大規模言語モデルを基盤とする生成 AI は、自然言語処理タスク（翻訳や対話応答等）を得意としている。その特徴から語学への導入も進められつつあり、たとえば語学学習アプリ「Duolingo」は、ChatGPT（GPT-4）搭載の音声対話型 AI ボットで外国語の会話力を鍛える教材を開発し（Duolingo 2023）、AI を個別の語学教師とした新しい語学学習スタイルを提供している。

#### 2.3. 低資源であるという課題

AI を活用した諸語諸方言の学習が実現すれば、継承支援の一つの可能性となりう

<sup>1</sup> JSPS 基盤 B 「九州・沖縄方言の継承支援に資する音声対話型生成系 AI の開発」(24K00074) の成果を反映したものである。

<sup>2</sup> ・さかいみか（鹿児島大学）mika.sakai@km.kagoshima-u.ac.jp

る。しかしここには低資源という課題がある。生成 AI のベースは大規模言語モデル (LLM) であり膨大な学習データ量を要することから (たとえば GPT-3 は約 1750 億個のパラメータで 45TB を事前処理した 570GB 以上のテキストを学習 (Brown 2020))、メジャー言語以外で生成 AI モデルを 1 から作るのは難しい。また、既存の生成 AI モデルを使用するにも、精度はやはり学習データ量に依存することから、データが限られる低資源言語・方言の生成は一般に困難であるとされる。鹿児島市方言についても、GPT-4 のデフォルトではほぼ訳出テストに回答できない (坂井 2024)。

## 2.4. 坂井 (2024)

既存の生成 AI モデルを使用して、低資源言語・方言を高い精度で生成するための方法を検討し、坂井(2024) (以下「前稿」) では次のことを述べた。

### (1) 坂井 (2024)

1. 標準日本語 (日琉諸語で最も LLM に学習された言語) の活用 (対訳) が有効。
2. 当該方言の A. 標準語対訳テキスト、B. 標準語対訳辞書、C. 言語知識の概説をプロンプト入力することで方言の生成精度が上がりうる。
3. 言語知識の記述は、音素ベースより仮名ベースのほうが、精度が上がりうる。  
(1)-3 の「音素ベース」とは、仮名文字にとらわれず音韻論上の最小単位である「音素」をベースに説明する手法、「仮名ベース」とは、仮名文字以上の分析をおこなわずに説明する手法である。たとえば次のようなものである。

### (2) 音素ベース例 (母音融合と形容詞の語形)

鹿児島方言では、母音が連続すると母音が融合します。

(法則) 1. ai→e、2. ii→i、3. ui→i、4. ei→e、5. oi→e

この法則は、形容詞の語末にも適用され、発音に反映されます。

(例) あまい (amai) →あめ

嬉しい (ureshii) →うれし

寒い (samui) →さみ

黒い (kuroi) →くれ

### (3) 仮名ベース例 (母音融合と形容詞の語形)

鹿児島方言の形容詞は、次の手順で作ります。

1. 語末の「い」を削除する。
2. 語末から 2 番目の仮名の発音を変更する。
  - ア段ならばエ段に変更。
  - イ段ならば変更なし。
  - ウ段ならばイ段に変更。
  - オ段ならばエ段に変更。

(例)

甘い (あまい : 「ま」はア段) →あめ

嬉しい（うれし：「し」はイ段）→うれし  
寒い（さむい：「む」はウ段）→さみ  
黒い（くろい：「ろ」はオ段）→くれ

前稿で残った課題は、(1) -2 三者の必要性の検証と、具体的な内容の提案である。

## 2.5. 本稿の構成

本稿では GPT-4 を使用し鹿児島市方言を具体例に、3 節において(1) -2 三者の必要性を検証し、結論として精度向上には三者全てが必要であることを示す。4 節では、具体的なデータ整理の方法やプロンプト例を示し生成手法を提案する。

### 3. 検証：対訳テキスト・対訳辞書・言語知識の必要性

#### 3.1. データの概要

本節では、A. 標準語対訳テキスト、B. 標準語対訳辞書、C. 言語知識の概説の必要性の度合いを検証するため、(4) のタスクを GPT-4 を使って実験する。検証に使用するデータは、(5) のとおりである。

##### (4) タスク

「鹿児島方言で話してください。東京スカイツリーについて説明して下さい。200 文字程度でお願いします。」

##### (5) 使用データ

- A. 標準語対訳テキスト（約 20 分）：鹿児島市方言話者（1959 年代生男性、1960 年代生女性）の会話（東京スカイツリーの話はない）を標準語対訳で整理したもの。
- B. 標準語対訳辞書（120 語）：A に出る方言固有語彙を標準語対訳で整理し、動詞は活用の種類と語幹の情報を付けたもの。
- C. 言語知識の概説：鹿児島市方言の概説を、仮名ベースで記述したもの。今回入力した項目は、格・形容詞・動詞・文末・接続。

(5) の内容から分かるように、今回の実験に用いたデータ量は、大規模言語モデル自体の学習量に比べれば非常に小さい。低資源言語・方言であってもデータの入手や収集が現実的な量で実験をおこなうことを見据えている。

出力結果の評価は、文節ごとに次の基準を設け話者に協力してもらいつながら行う<sup>3</sup>。

##### (6) 評価基準

<sup>3</sup> ただし検証における内省判断の採用方法にも課題がある。検証時の内省では言わないという判断でも、他の談話中に言うことがあるなど無自覚の部分もありうる。

評価	基準	点数
A	問題無し	1点
B	不十分（方言文脈の中にあっても良いが、より伝統的な言い方がある。）	0.3点
C	不自然（意味はわかるが、当該方言として違和感がある）	0.1点
D	非文（文法的、意味的に不可）	0点

結果を客観視するため任意の点数化もおこなう。点数化は、厳しい数値となるようBで大きく減点されるよう傾斜をつけている。なお、Dは母方言話者に通じないということを意味するため、一つでもあると致命的であると捉える。また、Aには‘方言として正解である’というほかに、‘方言と標準語が同形であるため標準語の出力でも問題ない’が含まれてしまうことには留意する必要がある。

それではまず、結果の全体を表1に示す。

表1 結果一覧

項目数	プロンプティング	文節数	A	B	C	D	点数	得点率
0	Zero-shot	30	12	12	2	4	15.8	52.7%
1	対訳辞書のみ	37	20	3	4	10	21.3	57.6%
	対訳例文のみ	51	36	8	3	4	38.7	75.9%
	概説のみ	37	26	7	2	2	28.3	76.5%
2	対訳辞書+対訳例文	42	24	4	5	9	25.7	61.2%
	対訳辞書+概説	50	38	3	3	6	39.2	78.4%
	対訳例文+概説	53	43	6	0	4	44.8	84.5%
3	対訳辞書+対訳例文+概説	59	47	11	1	0	50.4	85.4%

### 3.2. Zero-shot

Zero-shot（タスクだけを入力）の結果は、一見すると得点率52.7%でそこそこの精度が出ているように見えるが、(7)に示すようにAの実態はほぼ‘標準語が出力されていても問題ない’だけであり、方言固有形を出力してAというところはない。方言固有形を出力しようとした所はいずれも致命的なDであり、異なる方言圏の語形：中国四国（じやけん、じやけど）、九州肥筑（ばってん、ばい）が出力されている。さらに方言固有形を出力しようとしたところは文脈にもエラーが出ており、たとえば「高さを誇るばってん（高さを誇るけれども）」の部分は文脈として不適合である。

Zero-shotで自然な鹿児島市方言のテキストを生成することはほぼ不可能である。

(7) Zero-shot（紙面煩雑を避けるため B 以下の判定を付記。D には下線。以下同じ）

東京スカイツリーは、東京の墨田区にある電波塔で<sup>B</sup>、高さ<sup>C</sup>634 メートルで<sup>B</sup>日本一の高さを誇るばってん<sup>D</sup>。観光スポットとしても<sup>B</sup>有名で<sup>B</sup>、展望台からの眺めは絶景じゃけんね<sup>D</sup>。下の部分には<sup>B</sup>ショッピングモールもあって<sup>B</sup>、飲食店やお土産店がたくさん<sup>B</sup>ありますよ<sup>C</sup>。夜には<sup>B</sup>ライトアップされて<sup>B</sup>、とても<sup>B</sup>綺麗なんじやけど<sup>D</sup>、その<sup>B</sup>景色を見るのも<sup>B</sup>おすすめですばい<sup>D</sup>。

### 3.3. 1項目入力

1項目入力した結果、辞書・例文・概説いずれのケースも正確な生成には程遠かつた。A の多くは‘標準語が出力されていても問題ない’だけであり、いずれも D が出ている。概説だけを入れた場合の出力は、得点率だけをみれば 76.5%で高得点率のようにも見えるが、実態は(8) に示すように、たとえば 4 文目には「使われっとる」(正しくは「使われとる」) という誤用があったり、最後の 1 文には解釈できない不明部分があつたりと、問題点が散見する<sup>4</sup>。また、GPT-4 が標準日本語でテキスト生成する際の文章レベルを鑑みれば、(8) は全体的に文章レベルが稚拙であり、たとえば 2 文目は‘高いタワー’ という内容を繰り返している。参考に、標準日本語で同タスクを処理させた場合は(9) のように整然とした文章が出力され、繰り返し等は見られない。D 判定が出ることや、文章レベルが下がることなどからは、モデルが元々学習していない言語・方言を、1項目の少数データを入力しただけで生成させることは、AI に負担が大きいということが考えられる。

#### (8) 言語知識の概説のみ入力した場合の出力

東京スカイツリーは、東京都墨田区にあつと。高かタワーで、634 メートルもあつて<sup>B</sup>、世界でも一番高かタワーの一つじや<sup>B</sup>。展望デッキがあつて<sup>B</sup>、そっから東京の景色を一望できるど<sup>C</sup>。テレビやラジオの電波塔としても使われっとる<sup>D</sup>。周辺には<sup>B</sup>ショッピングモールや水族館もあつて<sup>B</sup>、観光客に人気な<sup>B?</sup>場所じやつど。夜になると<sup>C</sup>、きれいな<sup>B</sup>イルミネーションでライトアップされつど、<sup>D</sup>特に夜の景色が美しか。

#### (9) 参考：標準日本語で生成させた場合

東京スカイツリーは、日本の東京都墨田区に位置するテレビ放送塔です。高さは 634 メートルで、2012 年に完成した時点で世界で二番目に高い建造物となりました。この塔は、東京の地上デジタル放送の中心として機能し、観光名所としても非常に人気があります。スカイツリーには展望台が二つあり、素晴らしい東京の景色を一望できるほか、下にはショッピングモールや水族館なども併設されています。夜にはライトアップされ、東京の夜景に華を添えています。

<sup>4</sup> 句読点ミスか？（ライトアップされつど。＝ライトアップされるよ。）条件「と」のミスか？（ライトアップされと、特に夜の景色が美しか＝ライトアップされると、特に夜の景色が美しい。）

### 3.4. 2項目入力

2項目を入力しても、致命的なD判定が一定数出ている。特に、辞書+例文はテキスト生成の入力の基本であるようにも思えるが、精度としては低く得点率は61.2%しか出なかった。文の内容についても(10)に示すように不明な点が多い。たとえば1文目で、東京スカイツリーを「東京のおもちゃな空の塔」と一般的ではない表現をしたり、2文目では与格の「に」とその母音脱落形の「ん」が同時に出てしまっていたり、方言には確認できない「ひとつ高か」という不明語彙がみられたりするなど、意味がとれない出力となっている。また、対訳例文のみ入力した場合の得点率は75.9%あったが、今回の結果では、その対訳例文に対訳辞書を追加したら61.2%に落ちたということになる。ここから、単に入力量を増やせば精度が上がるわけではないということも分かる。また、対訳例文+概説を入力した得点率は84.5%で、これは一見精度が高いように見えるが、Dが4つあり致命的である。たとえば「楽しめるじゃっど」という誤用があるなど(正しくは「楽しめっど」)通用しない文となっていた。

#### (10) 対訳辞書+対訳例文を入力した場合の出力

東京スカイツリーは、東京のおもちゃな<sup>D</sup>空の塔<sup>D</sup>じゃっど。634メータの高さで、世界にん<sup>D</sup>ひとつ高か<sup>D</sup>電波塔じや<sup>C</sup>。スカイツリーのふもてには<sup>D</sup>、商業施設「東京ソラマチ」があつて<sup>B</sup>、ずんばい店やレストランがあつがね<sup>C</sup>。また、展望台からは東京の景色がきれいか<sup>D</sup>見がなっちあ<sup>D</sup>、とても人気<sup>C</sup>あつとこじや。晴れん日にや、富士山も見えるっど<sup>D</sup>。ふつとか建物として<sup>B</sup>、スカイツリーは観光客にも人気<sup>C</sup>あり、日本ん<sup>D</sup>文化や技術の象徴っちされちよつがね<sup>C</sup>。

### 3.5. 3項目入力

3項目を入力すると生成の質が安定する。(11)に示すように、Dが含まれていないことが注目される。Cは1か所促音化すべきところがこれに該当した(×あるど／○あっど)。Bは主に発音面で標準語寄りとされる所が11か所であった(例えば2文目「このタワー」は、属格noの母音脱落形のほうが良いとされる(△この／○こん))。

#### (11) 対訳例文+対訳辞書+概説

東京スカイツリーは、東京のスミダクにあるどー<sup>C</sup>。この<sup>B</sup>タワーは、ふつとかで、世界ん中で一番高かタワーじゃった。スカイツリーンてっぺんから見つと、東京ん景色が一望できっと、よか眺めじやらいね。特に夜ん景色は、光がきらきらして<sup>B</sup>、きれいかどー。スカイツリーン中には<sup>B</sup>おみせもずんばいあつて、おきやつさーが買い物<sup>B</sup>したり、食事したりできっと。また、そこには<sup>B</sup>展望台もあって<sup>B</sup>、わっぜ高かところから<sup>B</sup>東京を見がでくっど。天気のよか日にや、富士山も見えっど。スカイツリーへの行き方は、電車で行くのが<sup>B</sup>便利じやっど。東京スカイツリー駅や押上駅からちかいから<sup>B</sup>、そっから歩いていけっど。

以上、A. 標準語対訳テキスト、B. 標準語対訳辞書、C. 言語知識の三者を揃えるこ

とが、より自然な方言生成を実現する（1つでも欠けると困難）と考えられる。

#### 4. 提案

本節では、今回うまく走ったプロンプト例を示しながら、具体的手法を提案する。

まず、テキストは(12) のように対応関係が分かるよう示すのが良いようである。

##### (12) 対訳テキストの提示例（プロンプト入力の場合<sup>5</sup>）

以下、鹿児島方言の例文です。左側に標準日本語、右側に鹿児島方言が記述されています。

標準日本語＝鹿児島方言

西郷でございます。＝西郷でござす。

ようこそいらっしゃいました！＝ゆくさおさいじやしたー！ ······

対訳辞書も、対応関係が分かるよう整理し、テキストで提示した内容は少なくとも網羅するのが良いと考えられる。なお動詞等の活用語は、概説と対応した活用等のラベルを付ける。

##### (13) 対訳辞書の提示例

以下、鹿児島方言の語彙の辞書です。左側に標準日本語、右側に鹿児島方言が記述されています。

標準日本語＝鹿児島方言

ございます＝ござす

ようこそ＝ゆくさ ······

##### (14) 対訳辞書の提示例（活用語）

###### 【動詞】

標準日本語—鹿児島方言

着る—きっ（一段）

読む—よん（マ行多段：よま-／よみ-／よめ-／よん）

逃げる—にぐっ（二段、語幹1：にげ-／語幹2：にぐ-） ······

概説については、簡潔な説明と例文を示すと良いようである。前稿を踏まえると説明は（少なくとも現段階では）仮名ベースのほうが処理しやすいようである。

##### (15) 概説の提示例（文法）

###### 文末

- 日本語の「だ」「です」は、鹿児島方言では「じや」。（例）太郎だ。=太郎じや。

- 「じや」の過去形肯定形は「じやった」（例）先生だった。=先生じやった。

<sup>5</sup> ファインチューニングの場合、LLMによって最適な方法は異なると考えられるが、たとえばGPTの場合は「prompt」に「日本語「西郷でございます。」を、鹿児島方言に直訳すると？」を入力し、completionに「西郷でござす。」を入力する等の手法が穩当と考えられる。以下同じ。

- 「じゃ」の現在形否定形は「じゃなか」（例）太郎じゃない。=太郎じゃなか。  
・・・・・

なお、概説には禁止事項を追加するのも有効なようである。たとえば(7)に見たように鹿児島方言を生成する際に「ばい」「ばってん」等が混入されがちである場合、(16)のように禁止例や正解例とともにに入力すると、はじく確率が高くなるようである。

#### (16) 禁止事項の提示

##### 【禁止事項】

- 文末で「ばい」や「たい」を使わないで下さい。これらは鹿児島方言ではありません。禁止例「行くばい。」「行くたい。」
- 逆接で「ばってん」を使わないで下さい。「ばってん」は鹿児島方言ではありません。鹿児島方言の逆接は「じやっどん」です。

なお、本稿の提案手法により、(17)のように当該言語・方言の出力も入力も処理可能になることが確認できている。つまり当該言語・方言を用いた対話が可能になる。

#### (17) ChatGPT (GPT-4) と User (発表者) の対話 (鹿児島市方言)

User おやつとーさー！あんべはどうんな？

ChatGPT おやつとーさー！あんべはまこてよかよ。あんたはどうんな？

User ちっとビンタが痛かごたつ。

ChatGPT あんべが痛かったら、いしゃどんに見てもろうたほうがよかかもしけんね。何があつたと？

User 昨日ずっとこけて、ビンタば打っしもうたと。

ChatGPT あいよ、それは大変じゃったね

このように、方言の対話をAI相手にできれば、2.2節に述べたような学習スタイルやその他方言コンテンツを提供する実現可能性が高まる。方言の言語生活にAIを導入することに賛否ありうることは承知しているが、話者当事者達が「こういうAIが欲しい」と求めた時に提供できる準備があるに越したことはなく、その準備は方言研究者がこれまでにも積み重ねてきたテキスト・辞書・概説のデータ収集と整備である。今後も引き続き三者を収集し整備していく必要があるということは変わらない。

##### 【参考文献一覧】

木部暢子・三井はるみ・下地賀代子・盛思超・北原次郎太・山田真寛(2011)『文化庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』国立国語研究所

坂井美日 (2024) 「生成AIを用いた鹿児島方言生成—日琉諸語の低資源言語・方言の生成に向けた試み—」言語処理学会 第30回年次大会 発表論文集

[https://anlp.jp/proceedings/annual\\_meeting/2024/pdf\\_dir/P1-17.pdf...](https://anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2024/pdf_dir/P1-17.pdf)

文化庁HP「消滅の危機にある言語・方言」

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/index.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/index.html) [2024.4.27閲覧]

Brown B. Tom et al. (2020) ‘Language Models are Few-Shot Learners’ Advances in Neural Information Processing Systems (NeurIPS), pp.1877-1901.

Duolingo (2023) 「Introducing Duolingo Max, a learning experience powered by GPT-4」

<https://blog.duolingo.com/duolingo-max>

# 八重山語西表西部諸方言における音調発生

セリック ケナン・荻野千砂子・五十嵐陽介<sup>1</sup>

## 1. はじめに

八重山語西表西部諸方言は西表島の西部に位置する干立、祖納、船浮、網取の4つの集落で伝統的に話されている。話者によると、これらの方言は、網取方言のイントネーションにやや異なる点があることを除き、「同じである」と言う。言語学的に見ても、アクセント、文法、語彙などは殆ど同じであり、この4つの方言は八重山語の中で一つの方言群を成していることは確実であると言える<sup>2</sup>。

西表西部諸方言のアクセント体系については、先行研究（平山 1967、占部 2018）が少なく、不明な点が多い。本発表では、西表西部の全方言を対象とした現地調査の結果に基づき、これらの方言のアクセント体系について詳しく報告するとともに、網取方言を除いた諸方言では、アクセント型の新たな対立を生み出した音調発生（tonogenesis）が起きていることを示す。

## 2. 先行研究

先行研究によると、祖納方言（平山 1967）では3つ（低平型、頭・中高型、尾高型）、船浮方言（占部 2018）では主に2つ（下降型、上昇型）のアクセント型が区別されている。各アクセント型の実現形およびその音韻的解釈を表1、2に示す<sup>3</sup>。

表1 先行研究による各アクセント型の実現（○は軽音節、=duは焦点、=nは累加）

祖納		船浮
型1 低平型	]○○、]○○=du	下降型 ○]○、○]○=n
	]○○○、]○○○=du	
型2 尾高型	○[○、○○=[du	上昇型 ○[○、○[○=n
	○○[○、○○○=[du	
型3 頭・中高型	[○]○、[○]○=du ○[○]○、○[○]○=du	例外 ○[○]○

<sup>1</sup> Kenan CELIK (国立国語研究所)・おぎの ちさこ (福岡教育大学)・いがらし ようすけ (国立国語研究所)

<sup>2</sup> 西表西部諸方言にしか見られない主題形 =mee は代表的な共有改新である。

<sup>3</sup> 本稿で使用する記号は次の通りである。[と]はそれぞれピッチの局所的な上昇および下降を表す。ただし、語頭に置かれた場合は、高始まりおよび低始まりを表す。]]はモーラ内の下降、%は半上昇、！は半下降を表す。なお、助詞境界は=で、語根境界は+で示す。

表2 先行研究による音韻的解釈

祖納（平山 1967）			船浮（占部 2018）		
型	解釈	対応（2拍）	型	解釈	対応
型1 低平型	下がり目が無指定	1・2類	下降型	語頭音節に下がり目	A系列
型2 尾高型	末尾拍 <sup>4</sup> に下がり目	3・4・5類	上昇型	下がり目が無指定	B・C系列
型3 頭・中高型	次末拍に下がり目	3・4・5類	例外型	(上昇型の変種か)	

まず、祖納と船浮の異同について確認しよう。祖納の低平型と船浮の下降型は、その所属語彙が琉球祖語に再建されるA系列（服部 1959、松森 2000a、2000b）に対応することから、実現形は異なるものの、通時的に対応する型であると言える。次に、実現形の方に着目すると、祖納の尾高型は船浮の上昇型に対応することが分かる。同様に、祖納の頭・中高型は船浮について例外として報告されている型と対応している。つまり、少なくとも表層のレベルにおいては、祖納と船浮の違いは型1の実現形のみにあると指摘できる。

しかし、先行研究はそれぞれの方言について異なる分析を提示している。分析の違いは次の3点に集約できる。1つ目は、同じ上昇で実現する型2をめぐる音韻的解釈である。祖納では、下がり目を持つ型として分析されているのに対して、船浮では、ピッチ変動の指定がない型として解釈されている。2つ目は、ピッチの変動単位（いわゆるTBU）である。平山はピッチの変動単位がモーラであると分析しているのに対して、占部はピッチの変動単位が音節であるとしている。特に上昇型について末尾音節の直前に上昇が実現すると明記している。3つ目は、○[○]○などのパターンを示す型3の解釈である。平山は、このパターンを一つの独立したアクセント型として解釈しているのに対して、占部は、○[○]○のパターンを上昇型の変異として解釈できるかもしれないと述べながらも、語例の少なさから断定的な主張を控えている。

平山は、頭・中高型を独立した型として立てていると同時に、尾高型と頭・中高型に分類される語は相補分布を成していることも指摘している。すなわち、語末音節が重音節である語と、語末音節が無声化している語は頭・中高型に所属しているのに対して、それ以外の語は尾高型に所属するとする(1)。

- (1) a) 頭・中高型の所属語 : a]「粟」、mu]n「麦」、pã]fí「箸」、pa]ri「針」、mi[du]n「女」、tʃí[ka]ra「力」、ka[ga]n「鏡」、…  
 b) 尾高型の所属語 : i[ta「板」、mi[na「今」、kã[sa「傘」、kã[ta「肩」、fuʃí[ri「薬」、na:[da「涙」…

<sup>4</sup> 平山で言う「拍」はモーラに該当している。

しかし、平山の記述は幾つかの課題を抱えている。まず、pa]ri 「針」（4類・C系列）や tʃi[ka]ra 「力」（2類・A系列）などの語は頭・中高型に分類されるが、前者は頭・中高型の条件を満たしておらず、また、後者は琉球祖語のA系列に対応しており、B・C系列に対応するとされる頭・中高型とは対応が合わない。つまり、平山の説では、この2語の所属が説明できない。次に、中高型に分類された語は、助詞を付けると尾高型として実現する傾向があると記述している（mi[du]n、midun[du]... 「女、女が...」）が、この現象をどのように解釈すべきかが記されていない。しかし、この現象は重要な意味を持つ可能性がある。なぜならば、占部が分析しているように、ピッチの変動単位が音節であるとするならば、mi[du]n、midun[du]... 「女、女が...」を尾高型として分析できるからである。つまり、平山は頭・中高型の所属語彙を正しく捉えていない可能性がある。

以上の課題に加えて、両方の先行研究について次の問題点も指摘できる。近年の研究により、八重山語諸方言のアクセント体系を正しく捉えるためには、**A.** 名詞と助詞の様々な組み合わせにおけるアクセント型の実現を観察すること、**B.** 複合語におけるアクセント型の対立数を確認しておくことが必要であることが明らかになってきた（セリック・麻生 2023、2024）。しかし、先行研究はこのいずれの点を満たしていない。具体的には、第一に、限られた環境（語の単独発話と1種類の助詞を付けた発話）の観察に基づいている。第二に、複合語のアクセントを検討していない。したがって、西表西部諸方言のアクセント体系は正しく捉えられていない可能性が残っている。

### 3. 調査

表3 話者および調査情報

#### 3.1. 概要

本稿で使用するデータに関する話者および調査情報は表3の通りである。

話者	集落	生年	性	調査	ア資料
A	干立	昭和10年	女	3回	566点
B	祖納	昭和19年	男	2回	465点
C	船浮	昭和15年	男	13回	3572点
D	網取	昭和24年	男	1回	503点

#### 3.2. 結果

調査の結果、4つの方言について(2)の点が明らかになった。ただし、網取では「固定型」が殆ど確認されない。以下では、船浮を中心に詳しく見ていく。

- (2) a) 単純名詞では、3つのアクセント型が区別されている（a型、c型、固定型）
- b) 複合名詞では、少なくとも3つのアクセント型が区別されている（a型、b型、c型）
- c) 音節より上位、文節より下位の「韻律語」（五十嵐2016）が数える単位（McCawley 1978）として機能している

### 3.2.1. 単純名詞

船浮方言の単純名詞では3つの対立するアクセント型が区別されている（表4）。

表4 船浮方言の単純名詞の実現（X：対象語、-：データ無し）

	a型		c型		固定型	
環境	「布」	「照明」	「油」	「袋」	「箸」	「ヘゴ」
a X	nu]nu	a[ha]ri	a[ba]]	fuku[ru]]	[pa:]si	ba[ra]pi
b X ...	nu]nu	a[ha]ri	a[ba	fuku[ru	-	ba[ra]pi
c X=du ...	nu]nu=du	a[ha]ri=du	aba=[du	fukuru=[du	[pa:]si=du	ba[ra]pi=du
d X=n ...	nu[nu]=n	a[ha]ri=n	a[ba=n	fuku[ru=n		ba[ra]pi=n
e X=mee ...	nunu]=mee	a[ha]ri=mee	aba=[mee	fukuru=[mee	[pa:]si=mee	ba[ra]pi=mee
f X=ra ...	-	ahari=[ra	a[ba]=ra	fuku[ru]=ra	[pa:]si=%ra	ba[ra]pi=%ra
g X=si ...	nunu=[si	ahari=[si	a[ba]=si	fuku[ru]=si	-	ba[ra]pi=%si

a型（下降型）は環境a~eにおいて一貫して語頭辺り（1~2モーラ目）にピッチの下降が実現する。これは、占部（2018）の記述と一致する。しかし環境f~gにおいては、語全体がほぼ低平となり、助詞の方が高く実現する。c型（上昇型）も同様に環境によって2つの実現パターンが観察される。環境a~eでは文節の末尾音節が高く実現するが、環境f~gでは語の末尾音節が高く実現する。前者の実現パターンは占部（2018）の記述と一致するが、後者については報告がない。続いて、固定型（頭・中高型）は環境を問わず一貫して次末音節が高く実現する<sup>5</sup>。本稿の話者も占部（2018）で例外として報告されている型を持つということである。のみならず、(3)に示す通り、このパターンで実現する語が一定数見つかっている。さらに、(4)で分かるように、c型との疑似最小対語も存在しているため、平山（1967）が祖納方言について分析しているように、固定型を一つの独立したアクセント型として解釈すべきである。

(3) [pa]si「箸」、[pa]ri「針」、ba[ra]pi「ヘゴ」、a[ma]ci「髪」、[poo]ki「簫」、mi[min]ci「蚯蚓」…

(4) 疑似最少対語：[pa]si「箸」対 t[u]si「年」、[poo]ki「簫」対 baa[ki「笊」、moo[ki「儲け」

上記の通り、環境a~eと環境f~gの間で実現パターンが交替するが、それをどのように解釈すべきかが課題となる。環境a~dは南琉球の他の方言で韻律語と呼ばれる韻律単位（五十嵐2016）が1つだけ形成される環境に対応しているのに対して、環境f~gは2つの韻律

<sup>5</sup> なお、固定型のピッチのピークが、a型のピッチのピークより明らかに高いため、a型と中和することはない。

語が形成される環境に対応している<sup>6</sup>。この対応関係は偶然の結果であるとは考えにくいため、船浮方言においても韻律語が有効であることが示唆される。これを検証するためには、韻律語を形成する助詞が付与された単純名詞と、韻律語を形成しない助詞が付与された複合名詞が同じ韻律的な振る舞いを示しているかどうかを確認する必要がある（次節参照）。

以上、船浮について見てきたが、祖納と干立についても同じ結果が得られた。すなわち、これらの方言の単純名詞では、a型、c型、固定型の3つのアクセント型が対立している。ただし、環境 a~e における a型は文節全体がなだらかな下降で実現することも、低平として実現することもある。また、網取については、a型とc型の明瞭な対立が観察されたものの、安定した固定型は見られない。すなわち、他の方言で固定型に分類される語は a[bu]si 「畔」の1語の単独発話（cf. abusi=[mee ... 「畔は...」]）を除き、全て c型で発音された。

最後に、c型の単独発話について触れる。c型は環境 b~e において文節の末尾音節全体が高く実現するが、単独発話の環境では下降を伴っている（他の方言も同様）。具体的には、語末音節が軽音節である場合は、末尾モーラの中に下降が実現する。語末音節が重音節である場合は、末尾モーラの直前に下降が実現する(5)。その場合、同じ音節構造を持つ a型の語と非常に区別しにくい。しかし、接続形にすると、c型の下降が見られなくなる(6)。つまり、c型の単独発話に見られる下降は語レベルのアクセントによる特徴ではないと解釈できる。したがって、平山が報告している mi[du]n、midun=[du]「女、女が」のパターンは固定型（中高型）としてではなく、c型（尾高型）として解釈し直すべきである。

(5) c型の単独発話 : a[ba] 「油」、jama[tu] 「大和」、ka[ga]n 「鏡」 cf. a型 ta[ta]n 「畠」

(6) a[ba] mii[da] 「油を見た」、ka[gan] mii[da] 「鏡を見た」 cf. ta[ta]n mii[da] 「畠を見た」

### 3.2.2. 複合語

船浮方言の複合名詞では4つの対立するアクセント型が区別されている（表5）。

表5 船浮方言の複合語の実現 (- : データ無し)

環境	a型「田舎言葉」	b型「山大和言葉」	c型「川平言葉」	固定型「膀胱」
a X	ina]ka+muni	jamatu+mu[ni]]	kabi[ra]+muni	si[pa]ri+fukuru
e X=mee ...	ina]ka+muni=mee	jamatu+muni=[mee	kabi[ra]+muni=mee	si[pa]ri+fukuru=mee
f X=ra ...	ina!ka+mu[ni]=ra <sup>7</sup>	jamatu+mu[ni]=ra	kabi[ra]+muni=%ra	-

<sup>6</sup> =mee 「～は」は他の方言になく、その語源も不明であるが、主題と累加助詞の古い形式 =ja、=n と累加の改新形の =min 「～も」があることより、=mee は \*=mi=ja 「=?=主題」、=min は \*=mi=n 「=?=累加」に由来すると推測できる。1モーラの付属形式が2つ続いても韻律語を形成しないことが多良間方言について知られているため、船浮の =mee 「～は」はその通時的な由来からして韻律語を形成していないと考えられる。

<sup>7</sup> この環境では、a型の複合語がb型と同じ実現を示すこともあるようである。「田舎言葉」は1トークンしかないが、同じく a型に分類される mee]ku+muni 「宮古言葉」は mee]ku+muni=[ra ~ meekumu[ni]=ra のように揺れて

前部要素が a 型や固定型に分類される場合は、複合語全体が a 型や固定型になる。しかし、前部要素が c 型に分類される場合は、複合語において 2 つの異なるパターンが観察される。すなわち、前部要素の末尾音節が高く実現するパターンと、文節の末尾音節か（環境 a,e）、後部要素の末尾音節（環境 f）が高く実現するパターンがある。この 2 つのパターンは語彙的に決まっているのに加え、同じ型の条件異音であることを示す音韻条件などが見つからないため、対立するパターンであると解釈する必要がある（前者 c 型、後者 b 型）。

さて、b 型と c 型はどのように対立しているかを見てみよう。そのために、まずそれぞれの環境の韻律構造について考える必要がある。前節で触れたように、単純名詞の実現から、船浮のアクセント体系において韻律語が機能していることが示唆される。この仮説は、単純名詞と複合語との比較からさらに支持される。環境 f~g における c 型の単純名詞の実現（fuku[ru]=ra 「袋から」）と、環境 a,e における c 型の複合語（kabi[ra]+muni 「川平言葉」）の実現は両方とも語末の音節が高くなっている、対応している。このことから、=ra 「～から」や =si 「～で」が付与された単純名詞と単独発話の複合語は同じ韻律構造を持つと解釈できる。つまり、=ra 「～から」や =si 「～で」は語根と同じ韻律的振る舞いを示すということである。これに対して、=du 「～ぞ」、=n 「～も」、~mee 「～は」などは異なる韻律的振る舞いを示している。c 型の単純名詞や b 型の複合語にこれらの助詞が付くと、アクセント型によって指定されている卓立が助詞の方にずれる（kabi[ra] ..., kabira=[du] ... 「川平...、川平ぞ...」）。これは名詞とそれに付く助詞が合わせて一つの単位を成しているということである。以上を踏まえると、船浮では、音節より上位、文節より下位の韻律単位が機能していると解釈できる。そして、韻律語と呼ぶこの単位を導入することによって、b 型と c 型の対立を合理的に説明できる。c 型は一番目の韻律語の末尾音節が高いのに対して、b 型は二番目の韻律語の末尾音節が高い<sup>(7)</sup>（韻律語の境界（）で示す）。干立、祖納、網取の複合語についても同じ形で b 型と c 型の対立が確認できている（固定型は未確認）。

- (7) b 型 : (jamatu)+(mu[ni])、(jamatu)+(mu[ni])(=ra)  
c 型 : (kabi[ra])+(muni)、(kabi[ra])+(muni)=(ra)

## 4. 考察

### 4.1. アクセント体系の音韻的解釈

以上の結果に基づき、船浮方言のアクセント体系を次のように記述できる。第一に、音節より上位、文節より下位の韻律語という単位を有しており、b 型と c 型の場合、この単位が数える単位として機能している。第二に、アクセント型によって指定されているピッチの変動は音節を単位として実現している。第三に、局所的なピッチの変動（上昇）の有無と

---

いることを確認している。現時点では、この現象の範囲や原因について未詳である。

表6 船浮方言のアクセント体系の音韻的解釈

型	ピッチ変動	位置
a型	無し	(該当無し)
b型		第二韻律語（末尾音節の直前）
c型	有り（上昇）	第一韻律語（末尾音節の直前）
固定型		語の次末音節の直前

を有すると解釈する。

a型を指定のない型として分析しているが、韻律語を形成する助詞が付くと、助詞が高く実現している (a[ha]ri, ahari=[ra]「明かり、明かりから」)。しかし、これはa型に限った現象ではなくて、固定型についても助詞の再上昇が観察される (ba[ra]pi, ba[ra]pi=%ora「へゴ、へゴから」)。韻律語を形成する助詞に現れるこの上昇についてはさらなる検討が必要であるが、現時点では、この上昇がa型と固定型の両方に見られることから、アクセント型の指定によるものではないと分析する。

類型的に見て、船浮のアクセント体系が次のような珍しい特徴を見せている。すなわち、ピッチの位置を決定する際に参照される単位がアクセント型によって異なっている。b型とc型の場合は、ピッチの変動位置が韻律語の右端から数えて決定される。しかし、これに対して、固定型の場合は、ピッチの変動位置が語の右端から数えて決定される。その結果、第一韻律語の中にピッチ変動の位置による対立 (c型対固定型) が見られるが、このような対立は南琉球の中では全く見られない。また、如何なる環境においてもピッチ変動の位置が語の中に一定するという固定型の特徴も南琉球の中では他に見つからない。

#### 4.2. 固定型を生み出した音調発生のプロセス

船浮のa型、b型、c型は、八重山語の他の方言でも区別されているアクセント型に対応している。具体的に言うと、八重山の殆どの方言は三型 (a型、b型、c型) のアクセント体系を有するとされており、a型は卓立が指定されておらず、b型とc型はそれぞれ2番目と1番目の韻律語に卓立が指定されていると解釈されている (松森 2016、セリック・麻生 2023、2024、セリック 2023、2024)。これは、船浮のa型、b型、c型の解釈と一致するため、これらのアクセント型は八重山祖語から継承されたアクセント型であると解釈できる。しかし、これに対して、固定型に対応するアクセント型は他の方言には見られない。したがって、固定型は西表西部方言の内部に生じた新しい型である可能性が高い。この可能性を探るために、石垣四箇方言 (宮城 2003) と比較しながら、固定型の所属語彙を検討してみよう (表7、干：干立、祖：祖納、船：船浮)。

固定型に分類される語は次の2点を共有している。第一に、「冬瓜」と「蘇鉄」の例外を除き、石垣でb・c型に分類される語に対応する。第二に、語末母音は石垣方言のiに対応

位置によって4つのアクセント型が対立する。船浮の体系の概要を表6に示す。祖納と干立について同じ解釈を採用できる。網取は、固定型が殆ど確認されないため、a型、b型、c型の三型アクセント体系

表7 固定型の所属語彙 (-: データ無し)

語形	意味	干	祖	船	石垣方言
usi	「臼」	固	c	c	[usi]
nusi	「主」	固	c	c	[nusi]
nuci	「命」	固・c	-	c	[nutsi] [inadzi]
pasi	「箸」	固	固	固	[pası]
pari	「針」	固	固	固	[parı]
fusi	「櫛」	固	c	c	ɸy[si]
abusi	「畔」	固・c	固	固	[abusı]
amaci	「髪」	固	固	固	[akamadzi]
igesi	「角又」	固	固	-	[i:si]
kakuci	「顎」	固	-	-	kɑ[kudzi]
kateci	「ウニ」	固	固	-	kɑ[kidzi]
garasi	「鳥」	固	固	固	[garasi]
saaci	「手拭」	-	固	-	[sadzi]
situci	「蘇鉄」	固	-	-	sj[ti]:dzi
sipari	「小便」	固	固	固	[sibari]
sipuri	「冬瓜」	-	固	-	[sibu]ri
zjooći	「上手」	固	-	固	[dʒo:dzi]
namasi	「膾」	固	固	固	[namasi]
panasi	「話」	固	固	固	[panasi]
barapi	「ヘゴ」	固	固	固	[barabi]
pituri	「一人」	-	固	固	pj[tu:ri]
pooki	「筈」	固	c	固	[po:gı]
miminci	「蚯蚓」	固	-	固	[mimidzi]
jooci	「簪」	固	-	-	[jo:dzi]

音が i の母音に合流した結果、この 2 つの異音は 2 つの独立したアクセント型として語彙的に対立するようになった（固定型：[poo]ki 「筈」 対 c 型：moo[ki] 「儲け」）。これはつまり、西表西部諸方言において声調発生が起きているということである。

**参考文献** 五十嵐陽介（2016）「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150: 33-57／五十嵐陽介・荻野千砂子・セリック, ケナン（2024）「南琉球八重山語黒島方言の単純名詞のアクセント型の数は 2 か 3 か」科研費成果発表会発表原稿（2024 年 2 月 2 日：北星学園大学第 4 会議室）／占部由子（2018）「南琉球八重山語西表島船浮方言の文法概説」修士論文／セリック, ケナン（2023）「鳩間方言の韻律体系の見直し：アクセント型の対立数などを巡って」2023 年 10 月 7 日第 258 回 NINJAL サロン発表資料／セリック, ケナン（2024）「調査速報：八重山語竹富方言の三型アクセント体系」2024 年 1 月 23 日第 266 回 NINJAL サロン発表資料／セリック, ケナン・麻生玲子（2023）「南琉球八重山語における三型アクセント体系のさらなる報告」『日本言語学会第 167 回大会予稿集』520-525／セリック, ケナン・麻生玲子（2024）「八重山語小浜方言の三型のアクセント体系について」『音声研究』28: 1-16／MacCawley, James D. (1978) What is a tone language? In: Victoria A. Fromkin (ed.), *Tone: A linguistic Survey*, 113-131. New York: Academic Press／松森晶子（2000a）「琉球の多型アクセント体系についての一考察—琉球祖語における類別語彙 3 拍語の合流の仕方—」『国語学』51(1), 93-108.／松森晶子（2000b）「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から」『音声研究』4(1), 61-71／宮城信勇（2003）『石垣方言辞典』那覇市：沖縄タイムス社／服部四郎（1959）『日本語の系統』岩波書店／平山輝男（1967）「琉球西表祖納方言のアクセント体系」『音声の研究』13: 197-205. 謝辞 JSPS 科研費 20K00547, 22H00007, 24K03871, 24K00070, 23H00007, 22H00007, 21H04351, 24K16076, 23K17503, 20H01259, 22F22305, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」（代表：浅原正幸）のサブプロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」（代表：五十嵐陽介），同共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」（代表：山田真寛）。なお、干立の話者を紹介してくださった松原英男氏に感謝を申し上げます。

する。後者の点が特に肝心である。西表西部諸方言では \*i が i に合流しているため、西表西部諸方言の i が、石垣方言の i と i の両方に對応している。しかし、西表西部 i:: 石垣 i の対応を示す語の中に、固定型に分類される語は見つからない。これに対して、西表西部 i:: 石垣 i の対応を示す語は西表西部で固定型に分類される傾向が強い。このことより、固定型と c 型の対立は語末音節の母音の違いに由来すると解釈できる。つまり、固定型と c 型は本来対立していた型ではなくて、語末音節の核を条件とした異音であったと考えられる。具体的には、次の変化過程が描ける。まず、語末音節の母音が \*i に遡る c 型の語は（現代の）固定型のパターンで実現していたのに対し、語末音節の母音が \*i 以外の母音に遡る c 型の語は（現代の）c 型のパターンで実現していたという状況があった（c 型：\*[poo]ki 「筈」～ \*moo[ki] 「儲け」）。次に、後の時代において、表層の音調が保持されながら \*i の母

# 愛媛県旧三崎町与侈（よぼこり）の三つ仮名弁について

佐藤栄作<sup>1</sup>・久保博雅<sup>2</sup>・宮岡大<sup>3</sup>

## 1. 問題の所在

愛媛県西宇和郡旧三崎町（現伊方町）与侈（よぼこり）の三つ仮名弁について報告する。江端（1982）には、「三崎町では、[tu] の発音が、全年層を通して、さかんであり、ティ[tu]、ドゥ[du] の発音も「稀に聞かれる」とある。尾道短期大学方言研究会編（1972）では、[tu][du] が与侈など何地点かに存在することが確認できる。高橋（1992）には、「チ[tu]・ツ[tu] は、隣接した高知県ほどではないが、南予や、中予の山間部で聞くことができる。とくに、ツ[tu] は、若い世代からも。」とあるものの、愛媛県には「四つ仮名もなく、三つ仮名の段階のものもない」とする。以上から、旧三崎町与侈地区周辺に[tu][du] が存在していた可能性は高く、[du] があるなら三つ仮名弁である可能性も十分に考えられる。果たして今も旧三崎町には[tu][du] が聞かれるのか、そしてこの地域は三つ仮名弁なのか。まず与侈地区の状況について調査・検討することにした。



図1. 与侈の位置

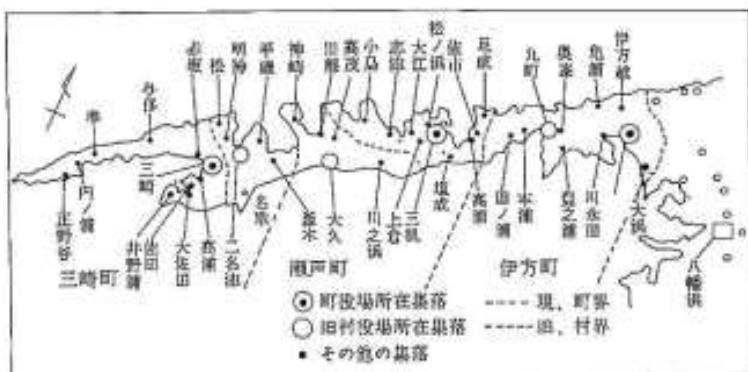


図2. 伊方町内の集落 (梶岡 1985:370)

西宇和郡旧三崎町は、四国の西端、日本一細長いと言われる愛媛県佐田岬半島の先端部に位置し、2005（平成17）年に瀬戸町・伊方町と合併して伊方町となった。1987（昭和62）年に、これまで海岸線を通っていた国道197号が尾根を通るルートで開通するまでは、半島の付け根の八幡浜市から車で3時間もかかったが、開通後は1時間弱となり、陸上交通

<sup>1</sup> さとうえいさく（愛媛大学名誉教授）satoeisaku525(at)gmail.com

<sup>2</sup> くぼひろまさ（四国大学）kubo-hiromasa(at)shikoku-u.ac.jp

<sup>3</sup> みやおかひろし（九州大学）miyaoka.0164(at)gmail.com

の便もよくなつた（鎌田 1996）。一方、豊予海峡を挟んで大分県が目の前であり、今も大分市佐賀関港との間にフェリーが通い（一日 16 便、70 分）、かつては別府航路もあった。

与侈地区は旧三崎町内でも、他の地区とは言葉が違うと言われる地域で、そこに[tu][du]が関わっていると予想される。与侈は、三崎港のある中心部から西へ 3km ほど、佐田三崎半島の尾根の北側に位置する。1983 年には 140 世帯であったが、2024 年 3 月現在は 85 世帯 135 人となっている。産業は漁業が中心で、水田はなく果樹園等との半農半漁。現在、高校生以下の子どもは一人もいなくなり、住民の高齢化が進んでいる。

西宇和郡は、愛媛県方言のうちの南予方言に属する。南予方言南部は、四つ仮名弁で知られる高知県の西南部と合わせて「渭南方言」とする方言区画説がある（杉山 1954, 1964）。しかし、西宇和郡は南予方言の宇和方言に分類され、「渭南方言」には属さない。高知県との県境からも遠い。

## 2. 調査概要

表 1. 調査日程と調査者・調査協力者

	日付	調査者	調査協力者
予備調査 1	2022 年 11 月 13 日	佐藤	KSm, KSf, UTm, TS, AY
予備調査 2	2023 年 12 月 17 日	久保	KA
本調査 1	2023 年 6 月 19 日	佐藤	KSm, KSf, UTm, TS
本調査 2	2024 年 3 月 29 日	佐藤・久保・宮岡	OM, UTf, KC, KH, UTm, YI, OK

表 2. 調査協力者詳細と調査結果概略

	出身	性	生年	外住	職	ツ	ズ/ヅ	
OM	与侈	女	1938(85)	無し	農業	tu(~tsu)	dzu, zu/du	△
UTf	与侈	女	1942(81)	神戸 25 年	無職	tu~tsu	dzu, zu, du	×
KSm	与侈	男	1947(76)	15 年	元漁協	tsu~tu	zu, dzu, du	×
KC	与侈	女	1948(76)	大阪 41 年	無職	tu	du(~dzu)	×
KH	与侈	女	1949(74)	三崎 4 年	農業	tu(~tsu)	dzu, zu/du	△
KSf	与侈	女	1949(74)	関西数年	無職	tsu(~tu)	zu, (~dzu)	×
UTm	与侈	男	1950(73)	大阪 17 年	大工	tu(~tsu)	dzu, zu/du	△
YI	串	女	1952(71)	東京 3 年	無職	tu(~tsu)	du(~dzu-zu)	×
TS	与侈	女	1953(70)	関西数年	無職	tsu	zu, dzu(~du)	×
OK	串	女	1958(65)	京都 4 年	無職	tsu(~tu)	dzu, zu(~du)	×

本調査の調査項目は、以下の通りである。予備調査の結果から、四つ仮名に関わる調査語に、ザダ行の調査語を加えた。調査方法はなぞなぞ式である。絵・写真を用いた項目と用いなかった項目がある。本調査 1 と 2 とで、調査項目に違いがある。

ジヂを含む語	25語	ジ 13語、ヂ 12語（歴史的仮名遣い）
ズヅを含む語	30語	ズ 10語、ヅ 20語（歴史的仮名遣い）
チを含む語	3語	
ツを含む語	15語	
ザゼゾを含む語	15語	ザ 5語、ゼ 5語、ゾ 5語
ダデドを含む語	22語	ダ 7語、デ 7語、ド 8語
ティ、ディを含む語	2語	ティ 1語、ディ 1語
シセテを含む語	4語	シ 2語、セ 1語、テ 1語

### 3. 調査結果

#### 3.1. 音声の概要

歴史的仮名遣いで「ぢ」の拍と「じ」の拍との音声的な差は認められず、[dʒi]～[zi]である。仮名遣いによるミニマルペアをいくつか調査したが、言い分ける意識も実態も認められない。よって、ジヂの区別はないと考える。なお、音声としての[tʃ][dʒ]は外来語「PTA」「ビルディング」で用いられ、ほぼ揺れはない。また、形容詞の「しぶとい」「ひどい」「くどい」等で母音融合が生じて[tʃ][dʒ]となる。

一方、[tʃ][dʒ]はほとんどの話者から聞かれ、今もこの地域に[tʃ][dʒ]が存在することが確認できた。しかし、即三つ仮名弁であるとは言いづらい（後述）。

ザダ行について、四つ仮名以外においても混同がかなり認められる。これらにおいて前鼻音は聞かれなかった（会話の中でのガバ行も同様）。なお、サ行エ段の口蓋化[œ]、[œ̄]～[œ̄]「手」がある。

#### 3.2. 話者別の結果と三つ仮名弁

表3. 話者別の調査結果

	OM	UTf	KC	KH	UTm	YI	OK
机 つくえ	tu	tsu	tu	tu	tu	tu	tsu
月 つき	tu	tsu	tu	tu	tu	tu	tsu
続く つづく	tu	tu	tu	tu	tu	tu	tsu
動物園 どうぶつえん	tu	tsu	tu	tsu	tu, tu	tu	tsu
続く つづく	dzu, du	dzu	du	dzu	du	du	du
水 みづ	du, zu	du	du	du, du	du, du	du	dzu, zu
鼠 ねずみ	zu, dzu	dzu	dzu	zu	du, dzu	dzu	du
雀 すずめ	zu	dzu	du	zu	du, zu	du	zu
動物園 どうぶつえん	do, zo	do	do	do	do, zo, dzo	do	do
手 て	tse, tee	te	te, tse	te	tse, se	te	te

表3は、本調査2の話者7名の調査結果を一部示したものである。以下、本調査1も加えた10名について調査結果を報告する。

まず「つ」についてみると、ほぼ全てが[tu]であったのがOM・KC・KH・UTm・YI氏、ほぼ[tsu]であったのがKsf・TS・OK氏、UTf・KSm氏は[tu]と[tsu]の両方が聞かれた。

ズヅについてみると、OM・KH・UTm氏は、今回の調査語の範囲では、歴史的仮名遣いの「ず」より「づ」に[du]が多い。OM氏は85歳であり、「づ」を含む18語のうち9語に[du]が聞かれ、「ず」を含む10語のうち[du]が聞かれたのは1語のみ、ほぼ三つ仮名弁であると言えよう。KH氏もOM氏に近い。KH氏は74歳であるが与侈以外で生活したのは旧三崎町内での4年だけである。「づ」を含む20語のうち10語で[du]が聞かれ、「ず」の10語のうち[du]が聞かれたのは、撥音直後の2語を含む3語だけである。KH氏は、三つ仮名弁が二つ仮名弁へ変化し始めた段階と言ってよいだろう。UTm氏は、調査でも会話でもザダ行の搖れが大きく、さらに変化した段階である。

KC氏は、「つ」は[tu]であるが、ズヅともにほぼ[du]であり、三つ仮名弁とは言えない。ここでは「二つ仮名弁Dタイプ」とする。KC氏に近いのがYI氏である。この2名は「ざぜぞ」のダ行化[da, de, do]も目立ち、特にYI氏は際立っている。YI氏は与侈でなく隣の串地区の出身であるが、それがどう関係しているのか、現時点では不明である。

「つ」に[tu]と[tsu]が聞かれるUTf・KSmの両氏は、ズヅに区別はなく、[zu]と[du]が聞かれる。「二つ仮名弁DZタイプ」としておく。

「つ」にほぼ[tsu]しか聞かれなかったKsf・TS・OK氏の3名は、[du]も極めて少ない。Ksf氏とTS氏は、ズヅは大半が[zu]で、OK氏は[dzu]である。OK氏は他の二人より[du]が多いが、[du]は少ない。3名は、ザダ行の混同が認められるものの、共通語に似た二つ仮名弁である。ここでは「二つ仮名弁Zタイプ」とする。

以上から、与侈の三つ仮名弁に関わる事象は、表4のようにまとめられる。

表4.与侈の三つ仮名弁

	話者	ジヂ	ツ	ズ	ヅ
三つ仮名弁	OM, KH, UTm	[zi]～[dzi]	[tu]	[zu]～[dzu]	[du]
二つ仮名弁 Dタイプ	KC, YI	[zi]～[dzi]	[tu]	[du] (～[zu]～[dzu])	
二つ仮名弁 DZタイプ	UTf, KSm	[zi]～[dzi]	[tu]～[tsu]	[zu]～[dzu]～[du]	
二つ仮名弁 Zタイプ	Ksf, TS, OK	[zi]～[dzi]	[tsu]	[zu]～[dzu] (～[du])	

### 3.3. ザダ行の混同と三つ仮名弁

与侈には、ア段（ザダ）、エ段（ゼデ）、オ段（ゾド）にも混同が認められる。混同は、ザゼゾ→ダデドが多いようである。このことが「二つ仮名弁Dタイプ」の存在に関わっているとも考えられる。

### (1) ザダ行の混同が見られた語（複数の話者から聞かれた例）

- a. ザ行→ダ行: [çida] 膝、[dabuton] 座布団、[goda] 莫蘿、[sade] 栄螺、[kade] 風、[çindo] 心臓、[mido] 溝、[sendo] 先祖、[do:kin] 雜巾
- b. ダ行→ザ行: [kadza] 花壇、[edza] 枝、[mukaze]~[mukadze] 百足、[sodze] 袖、[edzozidzai] 江戸時代、[dzo:butuen]~[zo:butuen] 動物園

### 3.4. 周辺方言との関係

今回の調査で「四つ仮名弁」は確認できず、高知県方言のような前鼻音も聞かれなかつた。[tu][du]の存在を高知県方言と関連づけるのは難しい<sup>4</sup>。

一方、大分県方言とのつながりの方が有力かもしれない。糸井（1959）、杉村（2001）は、発音が[dj][du]で統合して二つ仮名となっている大分県内の地点について記している<sup>5</sup>。現在は臼杵市と合併した大野郡川登村（野津町）である。ここの状況は、現時点で管見に入った中で最も与侈に近い。旧川登村は臼杵市の内陸部だが、佐田岬半島の先端に最も近い佐賀関のすぐ南に位置している。四つ仮名弁から二つ仮名へ向かう際、ダ行寄りとなる地域が佐田岬先端に近い与侈とその対岸の臼杵市に存在することは、極めて興味深い。

## 4. 現段階でのまとめ

与侈方言は、高年層において[tu]はよく聞かれ、[du]も聞かれるが、高年層が皆三つ仮名弁であるとは言えない。明らかになったこととしては、

- (2) a. 三つ仮名弁に近い個人は存在し、地点としては三つ仮名弁の最終段階を示していると思われること。
- b. ジヂの区別はなく、[tj][dj]は連母音融合の場合にのみ生じ、[d]に前鼻音は聞かれない。つまり、高知県方言の四つ仮名の音声とは大きく異なっていること（久野他 1991、岸江他 2005）。
- c. 豊予海峡を挟んで向かいの大分県方言との類似が認められること。特に「ズ」「ヅ」が[dzu][zu]に吸収される地域が多い中、与侈ではむしろ[du]の方へ寄っている語や話者が存在する点が注目され、糸井（1959）の報告する大野郡川登村に類似すること。

<sup>4</sup> 当地の伝承として、戦国時代に南予の山間部である旧東宇和郡城川町（現西予市城川町）から逃げた武士が、豊後（大分）へ渡る前に松地区にとどまり、そこに居ついた者が移って定住したのが与侈であるという（串在住の阿部善信氏談）。それゆえ、与侈・松と他の地域とでは言葉が異なるととらえる人もいる。城川町について、四つ仮名・三つ仮名弁という報告は現在ない。かつてその地に住んでいた四つ仮名弁の人々が集団で移住したということが、果たしてありうるだろうか。

<sup>5</sup> 糸井（1959）によると、変化の方向として、大野郡川登村（野津町）では「二つがな弁」でもザ行がダ行に統合されている。ここでは「ズ」も「ヅ」も[du]で発音される（例:[dukkin]頭巾、[aduki]小豆、[sudume]雀、[kadu]数）。「ツ」も並行的に[tu]（例:[tuba]唇、[natu]夏）。また、「ジ」と「ヂ」の区別もなく、[di][di]と発音される。（例:[odi]怖い、[sadi]敏捷な；「おぞい」「さとい」の母音融合形）。従って、「ジ」「ヂ」は[di]、「ス」「ズ」は[du]の二つ仮名と言うことができる。

杉藤（1983, 1984）は、四つ仮名弁から三つ仮名弁・二つ仮名弁への変化とザダ行の混同とを一つの現象ととらえる。ザダ行の混同の「ある段階」として二つ仮名弁を位置付けるなら、四つ仮名弁・三つ仮名弁はザダ行の混同の遅れている地域であることになる。ところが、与侈は三つ仮名弁が残った地域であり、しかもザダ行の混同は他地域以上である。これをどうとらえるか。

ザ行	za~dza~da	zi~dzi	zu~dzu~du	ze~dze~de	zo~dzo~do
ダ行	da(~dza~za)	zi~dzi	zu~dzu~du	de(~dze~ze)	do(~dzo~zo)

今回、与侈には3つのタイプの二つ仮名弁が存在すると報告したが、それらはどのようにして生じ、それぞれはどう位置づけられるだろう。現段階で分かっていることは、ザダ行の混同がかなり激しいこと、そして「二つ仮名弁Dタイプ」が存在することである。

「二つ仮名弁Dタイプ」の存在は、与侈におけるザダ行の混同がかつてはザ行のダ行化であったことを示しているのではないだろうか。注意したいのは、[tu][du] がかなり後まで残ることである。タ行の破擦音化としてイ段とウ段とを一まとめにしづらい。むしろ、サ行工段「セ」の口蓋化が残存していること、「手」が破擦音[tee][tse] であることから、与侈のタ行はかつてイ段と工段とが口蓋化して破擦音化した[tə, tci, tu, tee, to] であったと推定できるのではないか。すなわち、ウ段の破擦音化はザ行ダ行の混同の原因ではなかったのではないか。工段の口蓋化消失とウ段の破擦音化は後から生じたと考えられないだろうか。

「二つ仮名弁」の3タイプは、いずれも「三つ仮名弁」から生じ得、DZタイプはDタイプを経る必要はないが、本発表ではZタイプを新しいと想定し、以下のような仮説を提案しておきたい。

表5.四つ仮名弁（仮定）

サ行	/sa, si, su, se, so/ [sa, si, su, ee, so]	ザ行	/za, zi, zu, ze, zo/ [za, zi, zu, ze, zo]
タ行	/ta, ti, tu, te, to/ [ta, ti, tu, ee, to]	ダ行	/da, di, du, de, do/ [da, di, du, ee, do]

サ行ザ行のイ段工段（全段か）は後部歯茎音であり、タ行ダ行のイ段工段は口蓋化しているだろう。この口蓋化が破擦音化につながったとしておくが、時期は不明である。ザダ行の混同はなかったとする。ただし、サ行ザ行がもともと破擦音を含んでいた可能性もある。

表6.四つ仮名弁→三つ仮名弁（前段階）

サ行	/sa, si, su, se, so/ [sa, si, su, ee, so]	ザ行	/za, zi, zu, ze, zo/ [za, <u>z</u> , zu, <u>ze</u> , zo]
タ行	/ta, ti, tu, te, to/ [ta, ti, tu, ee, to]	ダ行	/da, di, du, de, do/ [da, di, <u>dz</u> , du, <u>de</u> , do]

ザダ行のイ段工段に混同が生じる。ウ段の破擦音化は生じていないとする。この段階をスタートとするべきかもしれない。

表7.三つ仮名弁

サ行	/sa, si, su, se, so/ [sa, si, su, ee, so]	ザ行	/za, (zi), zu, (ze), zo/ [za, zi~dzi, zu, ze, zo]
タ行	/ta, ti, tu, te, to/ [ta, tsi, tu, te~tee, to]	ダ行	/da, di, du, de, do/ [da, dzi~zi, du, de~dze, do]

ザダ行のイ段工段の混同によって、ザダ行全体に混同が波及したとも考えられる。この段階で、タダ行の工段の口蓋化が消失しても、三つ仮名弁には違いない。

表8.三つ仮名弁→二つ仮名弁

サ行	/sa, si, su, se, so/ [sa, si, su, ee, so]	ザ行	/za, (zi), zu, ze, zo/ [za, zi~dzi, zu, ze, zo]
タ行	/ta, ti, tu, te, to/ [ta, tsi, tu~tsu, te~tee, to]	ダ行	/da, di, du, de, do/ [da, dzi~zi, du~dzu, de~dze, do]

タ行ウ段に破擦音化が生じた段階である。破擦音化の原因について、現時点では不明である。工段の口蓋化は衰退していく。ザダ行の混同は生じたままである。

表9.二つ仮名弁Dタイプ

サ行	/sa, si, su, se, so/ [sa, si, su, se, so]	ザ行	/za, (zi), (zu), ze, zo/ [za, zi~dzi, dzu~du, ze, zo]
タ行	/ta, ti, tu, te, to/ [ta, tsi, tu~tsu, te, to]	ダ行	/da, di, du, de, do/ [da, dzi~zi, du~dzu, de, do]

ザダ行の混同は生じている。

表10.二つ仮名弁Zタイプ(教育・共通語の影響があったか?)

サ行	/sa, si, su, se, so/ [sa, si, su, ee, so]	ザ行	/za, zi, zu, ze, zo/ [za, zi~dzi, zu~dzu, ze, zo]
タ行	/ta, ti, tu, te, to/ [ta, tsi, tsu, te, to]	ダ行	/da, (di), (du), de, do/ [da, dzi~zi, dzu~zu, de, do]

前段階はDZタイプか。ザダ行の混同が収束すれば、共通語と同じである。

## 5.今後の課題

旧三崎町の人々は、与侈は言葉が違うと言う。その代表が[tu][du]の存在であるととらえ、今回の調査を実施することにした。確かに与侈地区在住の高年層から[tu][du]が聞かれたが、串出身者にも認められた。過剰修正の可能性もあるが、周辺地域の調査が不可欠である。果たして、三つ仮名弁は与侈だけ他地域より遅くまで残ったのか、他地域でもそれほど違わなかったのか。それを明らかにしていきたい。与侈においても調査協力者の数を増やし、ザダ行の混同状況や個人差をさらに慎重に分析する必要があると考えている。

そして、注目されるのは、[tu][du]の残存と「二つ仮名弁Dタイプ」の存在である。これは、四つ仮名弁から二つ仮名弁へ移行する過程で必ず出現する段階なのか。久野他（1995）の高知県での四つ仮名消失過程とは異なるように思われる。四つ仮名弁から二つ仮名弁への変化について、どのような地域差があったのだろうか。「二つ仮名弁 D タイプ」が大分県臼杵市野津町（旧川登村）と与多に共通するなら、かつて豊予海峡を跨いで、佐田岬半島と大分市佐賀関、臼杵市あたりに分布していた可能性も生じる。このことは、愛媛県西部の方言と大分県方言との関係を明らかにする調査研究の一つの柱になろう。そして、四つ仮名弁の消失、ザダ行混同・統合の地域差・分布、史的変遷を解明するために貢献できると考える。

## 付記

本研究は、JSPS 科研費 JP23K18661,JP21H00530,JP21J21555 の助成を受けています。

## 参考文献

- 梶岡謙治（1985）「第三章第五節 都市・集落・観光」愛媛県史編さん委員会（編）『愛媛県史 地誌 II（南予）』347-379. 愛媛県.
- 糸井寛一（1959）「大分県大野郡川登村（新野津町）」国立国語研究所（編）『日本方言の記述的研究』239-264. 明治書院.
- 江端義夫（1982）「愛媛県の方言」日野資純・飯豊毅一・佐藤亮一（編）『講座方言学 8 中国・四国地方の方言』395-423. 国書刊行会.
- 尾道短期大学方言研究会（編）（1972）『佐田岬三崎町言語地図』私家版.
- 鎌田良二（1996）「海峡と方言—大分と愛媛・佐田岬—」『甲南国文』43: 1-22.
- 岸江信介・吉廣綾子・山口陽子（2005）「高知方言における四つ仮名体系の動態」『言語文化研究』12: 137-172.
- 久野マリ子・久野眞・大野眞男・杉村孝夫（1991）『四つ仮名方言の動態と意識—高知県中村市・安芸市の数量調査—』國學院大學日本文化研究所.
- 久野マリ子・久野眞・大野眞男・杉村孝夫（1995）「四つ仮名対立の消失過程—高知県中村市・安芸市の場合—」『国語学』180: 96(1)-84(13).
- 杉藤美代子（1983）「「四つ仮名」の混同と「ザ・ゼ・ゾ」—「ダ・デ・ド」の混同に関する史的考察」『樟蔭国文学』20: 1-18.
- 杉藤美代子（1984）「音変化の過程に関する一考察—「四つ仮名」の混同と「ザゼゾ-ダデド」の混同」『国語学』138: 20-34.
- 杉村孝夫（2001）「九州方言の四つ仮名」『音声研究』5(3): 10-18.
- 杉山正世（1954）「渭南方言区の設定について」『愛媛国文研究』3: 113-124.
- 杉山正世（1964）「愛媛県の方言区画」日本方言研究会（編）『日本の方言区画』446-458. 東京堂出版.
- 高橋顕志（1992）「愛媛県方言」平山輝男・久野マリ子・久野眞・大野眞男・杉村孝夫・大島一郎（編）『現代日本語方言大辞典』1: 252-257. 明治書院.

# 八重山黒島方言の指示詞体系について<sup>1</sup>

荻野千砂子<sup>2</sup>

## 1 琉球語指示詞体系に関する先行研究

中本（1983）は琉球方言の指示代名詞の祖型を近称、中称、遠称で説明する（表1）。原田（2015）は黒島方言で三形式が見られることを指摘し、「話者の近くにいる場合は kuri、遠く離れている場合は、hari（いずれも単数の場合）を用いる」と述べる。黒島方言では語頭の /ka-/ が /ha-/ となるため hari が遠称になる。一方「uri」という指示代名詞もあり、これはいわゆる中称であるが、kuri、hari の範囲までも指示できる（p.80）とも述べる。uri は距離では説明できないようだが、何であるかは述べられていない。

共通語のコソアのように、近称、中称、遠称では説明できないという見解は、早くに述べられていた。内間（1984）は、琉球方言の指示代名詞で、「これ」と「それ」の区別が曖昧になっていることに注目し、奄美・沖縄型の体系は、基本的に「これ・それ」対「あれ」の二極関係構造であると指摘する。こうなる理由として、琉球方言の人称代名詞に、聞き手を含む「私達」（inclusive）と含まない「私達」（exclusive）の別があることが関連しているのではないかと考察する。遠称は、「私達」（inclusive）のソトに位置づけられるとする。しかし、先島（宮古・八重山）型では異なるとし、表に「遠称」を明記していない。内間（1984）の内容を私にまとめ直したものが表2である。

表1 琉球祖形と黒島の指示詞

	近称	中称	遠称
中本（1983） 琉球祖形	*kore	*ore	*are *kare
原田（2015） 黒島の指示詞	kuri	uri	hari
			uri

表2 内間（1984）の指示詞体系

地点 沖縄	共通語	これ	それ	あれ	
	琉球語	ko系	o系	a系	
	心的領域 と距離	私達（inclusive）		遠称	
		発言者	聴者		
近称					
沖縄本島瀬底		ɸuri	?uri	hari	
沖縄本島国頭		ɸuri		?ari	
沖縄本島謝敷		?uri		?ari	
地点 先島	心的領域	私達（inclusive）		遠称	
		発言者	聴者		
八重山石垣川平		kuri	uri	kari	
八重山波照間		kuri		uri	

## 2 八重山竹富町黒島方言の調査概要

では八重山に遠称はないのだろうか。今回、黒島方言での調査結果を報告する。主な調査協力者は2名である（A氏：保里集落、S10年生男性。B氏：東筋集落、S14年生男性）。調査方法は、共通語を翻訳する方法と私が作成した黒島方言を文法判断してもらう方法を併用した。調査では、図や絵を用いたり、実際に物を置いたりして、具体的な場面を設定し

<sup>1</sup> 本研究は、JSPS 科研費 20K00547,22H00007,24K03871, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「危機言語・方言」の研究助成を受けている。

<sup>2</sup> おぎの ちさこ（福岡教育大学）

た。調査期間は2013年以来、断続的に実施している。用例は、一行目に簡易的な音素表記で書き、成節鼻音はN、促音は子音を重ね、長母音は母音を重ねて表記する。二行目に文法情報を、三行目に共通語訳を書いた。非文法的な用法は×で示す。接語境界は=で示し、接辞境界は-で示し、複合語境界は+で示した。また、文法情報を書くときに、/ku-/系、/u-/系、/ha-/系を便宜的に共通語のコ系、ソ系、ア系で訳した。

### 3 問題点

#### 3. 1 単数で近いもの

近いものは、(1)のようにuriかkuriで指すことができる。hariは使用不可である。そのとき、uriとkuriに人称制約はない。私と話者が向かい合う場面を想定した。私が大きな箱を抱えて話者の家に行ったとする。話者が私に気づいて「それは、何か？」と尋ねるとき、(2)のようにuriでもkuriでも指せる。uriとkuriは近称として用いられると言える(主題のja「は」が後接したuri=ja、kuri=jaは、音声形としてuree、kureeのように実現する)。

- (1) {ure/kure/×hare}e=ja      nuu      jar-iba=ja?  
{それ/これ/あれ}.主題=主題      何      コピュラ-已然=終助詞  
「これは何か？」

- (2) {ure/kure}e=ja      nuu      jar-iba=ja?  
{それ/これ}.主題=主題      何      コピュラ-已然=終助詞  
「それは何か？」

#### 3. 2 単数で遠いもの

次に、遠いものを指す用法を調べるために、昼間、海のかなたの地平線に、突然赤い光が見えたという場面を想定した。指さし無しで言うこともできた。場所の指示詞を用いると、(3a)のようにhamaのみが許容される。しかし、指さしをすると、(3b)のようにumaも使用できた。さらに、ものを指す指示詞を用いると、(4)のようにuri、kuri、hariのすべてが使用できた。名詞修飾で「あの光はなんだ?」という場合も、unu(その)、kunu(この)、hanu(あの)がすべて使用できる。遠いものであっても、ものを指す指示詞や名詞修飾では、一番目に/u-/が使われる傾向にある。

- (3a) 指さし無し{×uma/×kuma/ hama}=na      ar-u      pikar-ee      munoo      nuu=ja?  
(3b) 指さし有り{uma/×kuma/ hama}=na      ar-u      pikar-ee      munoo      nuu=ja?  
{そこ/ここ/あそこ}=場所格      ある-連体      光る-存続      もの.主題      何=終助詞  
「あそこにある光っているものは何か？」
- (4) {ure/kure/hare}e      nuu=ja?  
{それ/これ/あれ}.主題      何=終助詞  
「あれは何だ？」

これをまとめると、表3のようになる。「遠」での使用を+として示すと、/ha-/は+が4個になるので「遠」だと言えそうだが、/ku-/や/u-/で、+がゼロにならない。場所の kuma のみは「近」を表すと考えられる。

もし、/ku-/や/u-/に遠称の要素があるとすると、/ha-/の「遠」との区別がないということになる。だが、(1) で見たように、近い物は kuri や uri で指す。では、なぜ、「遠」で kuri や uri が使用できるのだろうか。

次に、複数のものの場合を調査した。

表3 単数の「遠」での使用状況

共通語	近称コ	中称ソ	遠称ア
場所	kuma	uma	hama
指さし無し・遠			+
指さし有り・遠		+	+
もの	kuri	uri	hari
名詞修飾	kunu	unu	hanu
指さし無し・遠	+	+	+
指さし有り・遠	+	+	+
+の数/解釈	2/遠?	3/遠?	4/遠

#### 4 複数で話し手からの距離がそれぞれ異なるもの

時計屋で、1.5メートル四方のガラスケースの中に時計が置いてあり、話者（客の役）と私（店員の役）が向かい合って立っている場面を想定した。今、客側に一つ、店員側に一つずつ時計があるとする。話者が、自分側の時計を指さし、「この時計を見せてくれ。」と言い、次に、定員側の時計を指さし、「その時計も見せてくれ。」と言うとする。続けると、(5) のように、自分側の時計を/ku-/で指し、店員側の時計を/ha-/で指した。

- (5) kunu tokee=ju baN=ha misir-i.  
 この 時計=対格 私=方向格 見せる-命令  
 「この時計を見せて。」  
hanu tokee=ju baN=ha misir-i.  
 あの 時計=対格 私=方向格 見せる-命令  
 「その時計を見せて。」

また、自分の目の前のお菓子より、向かい合っている友人のお菓子の方が好きだという場面も想定した。お菓子を交換したいとき、自分の前のお菓子を uri、友人の前のお菓子を hari で指す。(5) も (6) も聞き手領域で/ha-/を用いているが、共通語であれば遠称は使えない。この用法が内間（1984）で、/ha-/を「私達」というウチに入れた理由ではないかと考える。

- (6) uri=ju uma=ha viir-u=wa. hari=ja uma=ha viir-i.  
 これ=対格 そこ=方向格 くれる-非過去=終助詞 あれ=主題 そこ=方向格 くれる-命令  
 「これはそっちへやるよ。それをこっちへくれ。」

確かに、ここでの/ha-/は距離としては近くのものである。しかし、話し手から見ると、一番目の/u-/や/ku-/のものより離れたものを指している。そのため、相対的遠近の「遠」だと捉えることができる。一番目の/u-/は明示されなくとも想定できればよく、例えば、友人が北海道旅行に行っていることを知っている場合、黒島の地元が「近」の uma になり、北海

道が「遠」の hama になる。そのため、(7) のように電話で尋ねることができる。

- (7) hama=nu      waasikee      nuu=ba      s-i=ja?  
      あそこ=属格    天気.主題    何=対格    する-非過去=終助詞  
      「そっちの天気はどうか？」

## 5 複数で話し手からの距離が同じもの

### 5. 1 「離れている」という意味での相対的な「遠」

次に、話し手からまでの距離が同等で近い場面を設定した。時計屋で、話者側（客の役）の右と左に時計が一つずつあるとする。話者は、右側の時計を「unu 時計を見せて」と言い、次に左側の時計を「hanu 時計を見せて」と言った。次に、二つの物の間を縮める場面を作り、物も変えた。私と話者の目の前に、飲みかけのお茶とコーヒーがあるとする。話者が私に「どちらがおまえのか」と尋ねるとする。(8) のように、お茶を kuri、コーヒーを hari で指した。uri と hari でも指せる。最初に/u-/が出てくることが多い。

- (8) kuri=tu      haree      nuu=du      uva      munu=ra?  
      これ=共格    あれ.主題    何=焦点    おまえ.所有格    もの=終助詞  
      「これとこれは、どちらがおまえの物か？」

次に、話し手からまでの距離が同等で遠い場合を設定した。今、浜辺にいると想定する。遠くの左側の島を指さして「あそこには男の神様がいるよ」と言い、遠くの右側の島を指さして「あそこには女の神様がいるよ」と言うとする。(9) のように一番目の島を hanu、二番目の島を kunu と言った。付け加えで、「unu 島と言って、次に hanu 島と言ってもいいよ」と説明をうけた。

- (9) hanu      sima=naa=ja      bikidumu=nu      kamisama=nu=du      waa=doo.  
      あの      島=場所格=主題    男=所有格      神様=主格=焦点    いる.尊敬.非過去=終助詞  
      「あの島には男の神様がいらっしゃるよ。」  
kunu      sima=naa=ja      midumu=nu      kamisama=nu=du      waa=doo.  
      あの      島=場所格=主題    女=所有格      神様=主格=焦点    いる.尊敬.非過去=終助詞  
      「あの島には女の神様がいらっしゃるよ。」

重要なことは、ものや場所までの距離が「近」でも「遠」でも、二つ以上あれば、/u-/と/ha-/、/u-/と/ku-/、/ha-/と/ku-/など異なる指示詞で指すという点である (uri と uri、kuri と kuri も非文ではない)。よって、/ha-/は/u-/を起点として離れていることを表すと考える。

### 5. 2 /ha-/は異なるものを指す

私（歯医者の役）が器具で、話者（患者の役）の歯に触れて「ここが痛いか？」と尋ねるとする。(10) のように歯医者は uma で尋ねる。患者が「そこが痛いです」と答えるときに

/u-/と/ku-/のどちらも使える。次に、歯医者が隣の歯に触れて「ここは痛いか？」と尋ねるとき、(11) のように hama も使える。しかし、患者は hama が言いにくいと言われる。だが、さらに反対側の歯を歯医者が触れるときは、歯医者も患者も(12) のように hama が使える。患者も、反対側の歯だと、一番目の歯より離れているため、別の歯だと認識できるためだと考える。

- (10) uma jam-i=du si-i? {uma/kuma}=nu=du jam-u=doo.  
 そこ 痛む-連用=焦点 する-連用  
 歯医者 「ここ、痛いか？」 患者「そこが痛いです。」
- (11) {uma/kuma/hama}=ja jam-uN? {uma/kuma}/×hama}=ja jam-anuN.  
 {そこ/ここ/あそこ}=主題 痛む-非過去 {そこ/ここ/あそこ}=主題 痛む-否定  
 (隣の歯) 歯医者 「ここは痛いか？」 患者「そこは痛くないです。」
- (12) {uma/kuma/hama}=ja jam-uN?  
 {そこ/ここ/あそこ}=主題 痛む-非過去  
 (反対側の歯) 歯医者 「ここは痛いか？」  
 {uma/kuma/hama}=N jam-i=du si-i.  
 {そこ/ここ/あそこ}=添加 痛む-連用=焦点 する-連用  
 患者「そこも痛いです。」

表4 指示詞の組み合わせ例

どちらも近		どちらも遠	
一番目	二番目	一番目	二番目
ku-と ha-	ha-と ku-		
u- と ha-	ha- と u-		
u- と ku-	u- と ha-		
ku-と u-	ku-と ha-		

一番目のものや場所を/u-//ku-/で指し、二番目以降は/ha-/で指すことで、異なるものや場所を明示していると考える。(11) で、歯医者は、隣の歯は一番目とは別の歯だと認識しているため、hama が使えるのだろう。だが、患者側は見えないので hama が使いにくい。3節で、単数の「遠」の場合でも、/u-//ku-/が使用できたのは、「一番目のものや場所を指す用法」だからだと考える。場所の kuma のみは「近」という素性を持つため、一番目でも使用が制限される。

## 6 /ku-/と/u-/の違い

ここまで、/ku-/と/u-/はほぼ一番目で使われていた。両者の違いについて考える。話者と私が離れて立っているとする。私が黒島方言で「こっちを見ろ」と言うと、話者がどうするのかを調査した。私が離れて立って、(13) のように kuma を用いて呼びかけると、話者の A 氏 B 氏とも、私を見るという。(14) のように uma を用いると、A 氏は私を見ると答えたが、B 氏は私に「どこ？と尋ねる」と答えた。uma だけだと分からぬから、指をさせ、とも言わされた。つまり、kuma は単独で発話者自身の場所を指すことができるが、uma の場合、指さしがないと場所が定まらないということになる。

- (13) kuma=ju      mir-i.  
       ここ=対格      見る-命令  
       「ここを見る。」
- (14) uma=ju      mir-i.  
       そこ=対格      見る-命令  
       「ここを見る。」

方向の場合も違いが見られた。例えば、ドッジボールで、姉が相手チームについて、今ボールを投げようとしているとする。(15) のように kuma を使うと、話者のA氏B氏とも、姉は私をめがけて投げると言う。(16) のように uma を使うと、A氏は私の方へ投げると言つたが、B氏は、uma だけではどこか分からぬと言つた。例えば、肩の上あたりの空間を指して uma と言えば、「私の近くに投げ、かつ、外して（当てないで）くれ」という意味になると言つた。uma は場所としては定まっておらず、指さし行為などによって、初めて場所が定まると言える。しかし、指さしなどが無ければ、発話者周辺になるのだろうと考える。

- (15) kuma=ha      jar-iba.  
       ここ=方向格      やる-已然  
       「こちらへ投げて。」
- (16) uma=ha      jar-iba.  
       そこ=方向格      やる-已然  
       「こちらへ投げて。」

/ku-/が最も使いにくいのは、(17) の例である。話者（親の役）が、子供部屋に入ったとする。子供が慌てて何かを後ろに隠した。親は物を見ていない。親が怪しんで、「それは何だ？隠した物を出せ」と言う場面では、uri と hari は使えるが、kuri が使えない。その後、親に言われて、子供が物を前に出したら、親は「kuri は何か？」と聞ける。そのため、kuri は実態として物が確認できる場合に使用するものと考える。

- (17) {×kure/ure/hare}e      nuu=du      aa=ra?  
       {これ/それ/あれ}.主題      何=焦点      ある.非過去=終助詞  
       「それは何だ？」

## 7 /u-/、/ku-/、/ha-/の特性のまとめ

以上をまとめると、/u-/は指さしをすれば、どんな場面でも使用できる。そのため、一番目に用いられることが多い。よって、/u-/は unmarked (無標) な指示詞だと考える。

/u-/に対し、/ku-/や/ha-/は二番目以降のものを指すときに用いるため、これらは marked (有標) な指示詞であると考える。/ha-/は、/u-/から「離れているもの」を指し、結果として「別のもの」を指す。このときの「離れている」とは、相対的な「遠」であり、聞き手領域であっても/ha-/で指せる。一直線上であれば物理的な距離としての「遠」が出てくる。hama は、見えない場所であっても、指さしをすれば、(18) のように言える。共通語では非文となる。

- (18) hama=naa=ja      junaN=nu      aN=doo.      (黒島から与那国は見えない)  
       あそこ=場所格=主題      与那国=主格      ある.非過去=終助詞  
       「×あそこに与那国があるよ。（方向「あちら」相当の可能性あり）

/ku-/は、/u-/と離れていない、別のものを表す。また、「実態を確認できる」という特性があると考える。場所の *kuma* は、指さしの有無に関わらず「近」を表せる。ただし、共通語の「ここ」と全く同じ意味ではない。例えば、子供達がうるさいので、近くの広場で遊ばせようする場合に(19)と言える。芸能館は、話者宅から3軒程度離れている。/ku-/は「実態確認」ができればよいので、近くて、限定されるものや場所であれば使用できるのだと考える。以上をまとめたのが表5である。+は特性があること、++は特性が強いことを示している。(+)は、使用はできるが、少ないことを表す。

表5 /u-/・/ku-/・/ha-/の特性のまとめ

	/ku-/	/u-/	/ha-/
特性	実態確認	すべて	離れている
場所	<i>kuma</i>	<i>uma</i>	<i>hama</i>
単数・近	++	+	
単数・遠		+	++
複数・二番目以降	+	(+)	+
もの			
名詞修飾	<i>kuri</i>	<i>uri</i>	<i>hari</i>
	<i>kunu</i>	<i>unu</i>	<i>hanu</i>
単数・近	+	++	
単数・遠	+	++	+
複数・二番目以降	+	(+)	+

- (19) *kuma=nu geinookaN=ha par-iba.*  
 ここ=所有格 芸能館=方向格 行く-已然  
 「{そこ/近く}の芸能館へ行け。」

## 8 文脈指示

文脈指示は、現場指示の用法と同じ仕組みで説明できると考える。単数の場合は、先行詞の有無に関わらず、/u-/で指す。例えば、友人が「おまえ、宝くじが当たったって？」と言ったので、話者が「それは嘘だよ」と答えるとする。このとき、*uri* を用いる。続けて友人が「おまえがみんなに賞金を分けると、太郎が言っているよ?」と言ったとする。話者が驚いて「それは嘘だよ」と言う場合、(20)のように *uri* と *kuri* が使える。しかし、*hari* は使えない。また、記憶指示では、先行する名詞がなく共通語ではア系を使うが、黒島では、(21)のように、/u-/や/ku-/を使用する。祭りの日にいつも使う、料理を入れる皿を探して、家族に尋ねる場面を想定した。独り言で言ってもいいとする。

- (20) {*ure/kure/xhare*}e naN munui=doo.  
 {それ/これ/あれ}.主題 嘘 言葉=終助詞  
 「それは嘘だよ。」

- (21) {*unu/kunu*} sara maa=ha=du hazam-i usik-ee=ra?  
 {その/この} 皿 どこ=方向格=焦点 隠す-連用 おく-完了=終助詞  
 「あの皿はどこに置いたかな？」

/ha-/は複数のものがある場合に使用できる。例えば、本屋に行く友人に、漫画の新巻が出

ていたら買ってきてほしい、加えて、家にある一巻が汚れたので、一巻があれば新品を買ってきてほしいと頼むとする。これを続けて言う場合、(22) のように、新巻は *uri*、一巻は *hari* で指せた。*/u-/*でないものを*/ha-*が指しているのだと考える。

- (22) ara+hoN=nu Nzi-ka uri=ju ha-i ku-u=joo.  
新+本=主格 出る-条件 それ=対格 買う-連用 来る-命令=終助詞  
「新しい本が出ていたら、それを買ってきて。」  
ikkaN=nuN aa-ka {uri/hari}=N ha-i ki-i viir-i.  
一巻=添加 ある-条件 {それ/あれ}=添加 買う-連用 来る-連用 くれる-命令  
「一巻もあったら、それも買ってってくれ。」

また、*/ha-*は時間的な「遠」を指せる。今が三月だとする。直近の予定を尋ねられ、「その日は予定が入っているよ」と答える場合、*unu* を用いる。その後、大晦日の予定を尋ねられたとする。かなり先の話であるため、(23) のように *hanu* が使用できる。

- (23) {unu/kunu/hanu} piN=na mee bahar-anuN=doo.  
{その/この/あの} 日=主題 もう 分かる-否定=終助詞  
「その日は、まだ分からないよ。」

## 9 派生的な意味—可視性、明瞭性—

最後に、派生的な意味ではないかと考えられる例をあげる。(24) は、話者宅にて私の背後にもう一人別の人気が立っている場面である。昼間だと *unu* だが、夜だと見えにくいくらい *hanu* が使えるという。B 氏は、(25) で星がはっきり見えているときは *kuri* で、*hari* はぼんやりしているときだと説明した。*/ku-*の「実態を確認できる」という特徴は可視性や明瞭性の意味を持つことができ、*/ha-*は*/ku-*と対局にあるため、不可視性や不明瞭性の意味を帯びるのではないかと考える。

- (24) {unu} [昼間] /hanu [夜] } psu taa-r-iba=ja?  
{その/あの} 人 誰-コピュラ-已然=終助詞  
「その人は誰か？」  
(25) {uri/kuri/hari}=du ni+nu+pa+busi.  
{それ/あれ/これ}=焦点 子+の+方+星  
「あれが北極星だ。」

### [参考文献]

- 内間直仁 (1984) 『琉球方言文法の研究』笠間書院  
内間直仁 (1994) 『琉球方言助詞と表現の研究』第7章 武蔵野書院  
中本正智 (1983) 『琉球語彙史の研究』三一書房  
原田走一郎 (2015) 『南琉球八重山黒島方言の文法』博士論文

# 京都市方言の文末詞ガナの用法

松丸 真大<sup>1</sup>

## 1 はじめに

本発表では、京都市方言で用いられる文末詞ガナについて、関西の他方言における記述を踏まえつつその用法の再整理をおこなう。そのうえで、従来、文末詞の意味や使用条件とされてきたものの中に種類の異なるものがあり、それらを分けて考えることで、文末詞の方言対照が可能になるという展望を示す。

ここで扱う京都市方言とは、近畿地方京都府京都市で話される日本語方言の1つである。京都府内の方言区画では山城方言域に区分される（奥村 1962）。京都市方言のガナについては、様々な方言辞典に記載がある。例として『京ことば辞典』『京都府方言辞典』の記述を(1)にあげる。

- (1) a. ガナ《助詞》 終助詞。強意。念を押す気持ちを表す。「お金がいるんか。きょうは銀行休みやガナ」。「どこ探してタンヤ。ここにチャントあるガナ」。「いきまへんがな（京阪）、いけないね（東京）、いやだんがな（京阪）、いやですよ（東京）」[言語違]（井之口・堀井 1992: 81）  
b. ガナ [終助] …ではないか。強意、念押し。[中略] 若はヤンカ、ヤンを使う。（中井 2002: 155）

ここから、ガナは標準語の「ではないか」に相当する形式で、「念を押す」表現であることがわかる。また、類似表現としてヤン(カ)があることもうかがえる。このような記述から、ガナとヤン(カ)との類似点・相違点に目が向くのはごく自然なことである。実際、従来のガナの記述はヤン(カ)との比較に重点がおかれてきた(詳しくは3節で述べる)。本発表は、ガナ自体の用法に焦点を当て、それを方言間で対照できる形で整理する。

用法の整理にあたっては、先行記述に加えて発表者の内省<sup>2</sup>を用いる。先行記述は兵庫県西脇市と奈良県生駒市のものであるが、その用法はかなりの程度重なっている。そこで先行研究の記述をベースにしつつ、それとは異なる部分について言及していく方法を探る。

以下、2節でガナの形態的な特徴について述べた後、3節で先行記述を踏まえつつガナの用法を整理する。これをもとに、京都市方言と他方言のガナの違いを明らかにする。

<sup>1</sup> まつまる みちお（滋賀大学） matumaru@edu.shiga-u.ac.jp

<sup>2</sup> 発表者の居住歴は次の通り；0-15歳：京都府京都市、15-23歳：東京都江戸川区、23-33歳：大阪府北摂地域、33-37歳：滋賀県大津市、37-：京都府京都市

## 2 ガナの形態

議論に先立ち、ガナはそれ以上分析できない一つの形式であることを示す。ガナの「ガ」は(2a)のように単独で生起できず、(2b)のように「ガ」に「ナ」以外の形式を続けられず、(2c)のように「ガ」と「ナ」の間に別の形式が介入できない。

- (2) a. 冗談や{\*ガ<sup>3</sup>/ガナ}。  
b. 冗談や{ガナ/\*ガネ/\*ガイ/\*ガイナ}。  
c. 分かってる{ガナ/\*ガヨナ}。 cf. 分かってる{ナ/ヨナ}

以上からこれ以降の分析ではガナを1つの文末詞として扱う。以下、ガナが共起できる形式と生起可能な文タイプについて述べる。

ガナは文を終止する述語形態に付く。丁寧形式とも共起できる。当該方言では形容動詞・名詞述語で文を終止する場合はコピュラが必須だが、ガナが付く場合もコピュラが必要である。

- (3) a. 雨が{降る/降った/降らへん/降ります/\*降って}ガナ。  
b. {痛い/痛かった/痛くない/痛いです/\*痛うて}ガナ。  
c. {元気や/元気やった/元気とちやう/元気です/\*元気}ガナ。  
d. {学生や/学生やった/学生とちやう/学生です/\*学生}ガナ。

ガナは、推量形式とは共起しにくい<sup>4</sup>が、可能性判断(4b)、蓋然性判断(4c)、証拠性判断(4d)を表す認識的モダリティ形式とは共起可能である。ヤン(カ)や(ト)チガウ(カ)などの確認要求を表す形式とは共起できない(4e)。また、ガナは他の文末詞が後接・前接することはない(5)。

- (4) a. 行く{?やろ/\*でしょう}ガナ。  
b. 行くかもしだれんガナ。  
c. 行く{はずや/にちがいない}ガナ。

<sup>3</sup> 当該方言には「だからさっきからそう言うてるやろガ」のように、推量形式に「ガ」が続く表現がある。この、推量形式に続く「ガ」は、共時的には、そして京都市方言においては、ガナとは別に扱うべきであるし、意味・機能もガナとは異なると考える(大江2018参照)。このように考えるのは、「推量+ガ」とガナの生起環境が(i)のように異なるからである。

(i) a. 今から{行く/行きます}{\*ガ/ガナ}。 [終止形の後]  
b. そう言うてるやろ{ガ/?ガナ}。 [推量形の後]  
c. そう言うてるでしょう{ガ/\*ガナ}。 [推量形の後]

なお中井(2002: 141)でも、「～よ・～じゃないか」を意味する「ガ」と、推量形につく「ガ」の2つが立項されているが、やはりガナと「ガ」は別形式として扱われている。

<sup>4</sup> 兵庫県西脇市方言(木川1996)や奈良県生駒市方言(前川2000)では、推量形式にガナが付くことが可能とされている。

- d. 行く{らしい/みたいや/そうや}ガナ。
  - e. 行く{\*んとちがうか/\*やん(か)}ガナ。
- (5) a. 行くガナ{\*ナ/\*ネ/\*ワ/\*デ/\*ヨ/\*サ/\*カ/\*イ/\*イナ}。  
 b. 行く{\*ナ/\*ネ/\*ワ/\*デ/\*ヨ/\*サ/\*カ/\*イ/\*イナ}ガナ。

また、当該方言には「のだ」相当形式としてネンとンヤの2種類があるが、ガナが共起できるのはンヤのほうだけである。

- (6) a. 明日、東京に{行くンヤ/\*行くネン}ガナ。  
 b. 昨日、東京に{行ったンヤ/\*行っテン}ガナ。

最後に、ガナが生起できるのは、(7)に示すように、平叙文に限られる。

- (7) a. そこにあるガナ。  
 b. \*あなたも行くかガナ。  
 c. \*誰が行く(んや)ガナ。  
 d. \*俺が行こうガナ  
 e. \*一緒に行こうガナ。  
 f. \*早く行けガナ。

### 3 ガナの用法

#### 3.1 先行記述の整理

木川（1996）は兵庫県西脇市、前川（2000）は奈良県生駒市で用いられるガナの意味・用法について、類似の意味を持つヤンカと対比しながら考察している。どちらも筆者自身の内省をもとに考察が進められており、木川氏は1955年生まれ、前川氏は1976年生まれである。以下では、木川（1996）と前川（2000）の成果をまとめ、現時点で明らかになっているガナの用法を整理する。

2つの研究はどちらも、田野村（1988）がおこなった標準語の「ではないか」の用法分類をもとにしている。田野村（1988）は「ではないか」という否定疑問形が意味・構文・音調の面で表1の3つに分類できることを指摘した。そして、近畿方言の「やんか」「(や)がな」や岡山方言の「(じや)が」が「ではないか<sub>1</sub>」とほぼ重なる機能を持つと指摘している(p.18)。

木川（1996）と前川（2000）はそれぞれの方言のガナについて、田野村（1998）の「ではないか<sub>1</sub>」と重なる用法と、「ではないか」にない用法の2つに大きくわけ、ヤンカと対比しながらガナが使用できる条件を導いた。どちらの研究でも「ではないか」と重なる用法の分類では、蓮沼（1995）の分類を採用している。蓮沼（1995）の分類のうち「ではないか」に関わるものを表2にあげる。

表1 標準語「ではないか」の3つの用法（田野村 1988: 17）

ではないか <sub>1</sub>	発見した事態を驚き等の感情を込めて表現したり、ある事柄を認識するよう相手に求めたりするもの 「よう、山田じゃないか。」「何をする、危ないじゃないか。」「自分から言い出したんじゃないか。」
ではないか <sub>2</sub>	推定を表現する 「(不審な様子から)どうもあの男犯人じゃないか?」「(空模様を見て)雨でも降るんじゃないか?」
ではないか <sub>3</sub>	「ない」が否定辞本来の性格を發揮する、否定疑問を表す 「(1は素数でないことを教えられて) そうか、1は素数じゃないか。」「(1 ハ素数デナイト君ハ言ウガ得心デキナイ。)本当に 1 は素数じゃないか?」

表2 蓬沼（1995）による「ではないか<sub>1</sub>」の用法分類

共通認識の喚起	「認識的に優位な位置にいる話し手が、自己と同様な認識を持つように聞き手を促し、その成立状態を確認する」もの (p. 393) 「同級生に加藤さんていた{じゃないか/だろう/よね}？ 背の高い男の子。」
認識形成の要請	「通常の認識能力を持っていれば、認識できて当然といった見込みに基づいて、聞き手に認識形成を要請する」もの (p. 394) 「だから言った{じゃないの/だろう/*よね}。あの人には気をつけなさいって。」
認識生成のアピール	「話し手自身が知識を獲得したことを詠嘆的に表明する」もの (p. 396) 「[箱を開けてみたら中身が空なのを発見して] なんだ、空っぽ{じゃないか/*だろう/*だよね}」

この分類枠でガナとヤンカの適格性を判断した結果、(9)～(11)に示すように、どの分類にもガナが使える例と使えない例があることがわかった。

#### (9) 共通認識の喚起

- a. 同級生に加藤っておった{?ガナ/ヤンカ/ヤナイカ}。背の高い奴。
- b. 仮に30人来るとする{ガナ/ヤンカ/ヤナイカ}。そしたら、一人5千円の会費で、15万円ぐらいの予算でいけるで。

(木川 1996: 533)

(10) 認識形成の要請

- a. 何すんねん。危ない{ヤンカ/ガナ}。
- b. [仕事を辞め大学に行くと言う相手に] バカなこと言ってるんじゃない！もう短大出た{ヤンカ/?ガナ}。
- c. せやから、ゆーた{ヤンカ/ガナ}。あの人には気をつけろって。

(前川 2000: 83-84)

(11) 認識生成のアピール

- a. [箱を開けてみたら空っぽなのを発見して] なんや、空っぽ{ヤンカ/やガナ}。
- b. あんた 怪我してる{ヤンカ/ガナ}。手当せな。
- c. 久しぶり{ヤンカ/?やガナ} 弁慶。
- d. 君の結婚相手、なかなかべっぴんやそう{ヤンカ/?やガナ}。

(前川 2000: 85-87)

また、「ではないか」では表せないガナの用法として、次のような例を挙げている。

- (12) a. [捜し物をしている人に、そのありかを知っているだろうと責められて]  
知らん{ガナ/ヤンカ/?ヤナイカ}。
- b. [何年も会っていない人と再会して]  
A: 私のこと、覚えとてか。  
B: よう覚えとる{ガナ/?ヤンカ/\*ヤナイカ}。
- c. 「そら お前が 謝りに 行かなあかんで」て みんなに 言われたさかい 行った{ガナ/\*ヤンカ/\*ヤナイカ}。ほしたら 向こうは 何にも 気が付いてなかつた ゆ一  
やないか。行って 損したわ。 (木川 1996: 55-56)
- d. [出来るかどうか不安がっている相手に] あんたやつたら 出来る{ガナ/?ヤンカ}。

(前川 2000: 90)

以上の観察に基づいて、木川 (1996)、前川 (2000) はガナに(13)のような意味・機能があるとしている。

- (13) a. 「話し手は聞き手が自分とは異なる認識を持っている（あるいは話し手の認識をそのまま受容しない）という判断のもとに自分の認識を主張しようとする」  
(木川 1996: 54)
- b. 「「ガナ」が話し手の主張であり、その主張を聞き手に押しつけるのに対し、「ヤンカ」には、聞き手にその主張を持ちかけ、その認識を共有するように働きかける機能がある」 (木川 1996: 64)
- c. 「「(ヤ)ガナ」が生起できないのは、聞き手の記憶や知識の中にある筈の、或いは聞き手が認識済の事柄を確認する場合であり、生起できるのは、ある事柄を聞

き手に一方的に受け入れさせる場合、話し手の判断・評価、或いは聞き手が忘れたか、まだ知らない事柄を述べる場合である」 (前川 2000: 93-94)

上の(13)からは、ヤン(カ)との対比という形ではあるが、これらを文脈・伝達内容・伝達態度という異なるレベルで整理しなおすことで、ガナの特徴を抽出できる。それが(14)である。

#### (14) ガナの意味的・語用論的な特徴

- a. 文脈 : 話し手の認識と状況（聞き手の認識も含む）とが矛盾する
- b. 伝達内容 : 話し手にとって既定の事柄
- c. 伝達態度 : 聞き手に一方的に受け入れさせる（聞き手に受容しないという選択肢はない）

まず(13a)はガナを用いる際の文脈の特徴である。この特徴を(14a)とした。ただし、話し手の認識と異なるのは聞き手の認識だけではない。例えば(11a)は、箱を開ける以前の話し手の認識と、箱を開けたときの話し手の認識の間に異なりがある。これらをまとめて「状況」として扱う。(14b)は伝達内容に関わる特徴で、(13c)「話し手の判断・評価」から導いた。ここでの「既定」とは「話し手の中で知識として確立している」状態である。最後に(13b)「押しつける」や(13c)「一方的に受け入れさせる」は、「どのようにして聞き手と情報のやりとりをするか」という伝達態度に関わる特徴である。

以上、ガナの特徴を「どのような状況で」「何を」「どのように」伝えるかという点に分解して再整理した。こうすることで、これまでの記述を解釈しなおすことができるだけでなく、方言間で用法の違いを見やすくすることも可能になる。次節ではこの点について述べる。

### 3.2 ガナの諸用法

前節(14)の特徴を全て満たすのがガナの典型的な用法であるが、ガナには(14)の一部の特徴を欠いた用法もある。例えば(11ab)は「箱の中身が空っぽ」であること、「相手が怪我をしている」ことは発話現場で得た情報であり、発話時に話し手の知識として確立しているとは言いかたい。したがって(14b)の特徴を欠いているといえる。また、(12bc)は話し手の認識と矛盾するような状況が文脈中に想定できいため、(14a)の特徴を欠いているといえる。とはいっても、話し手と状況の間で何らかのギャップが生じていることは想定できる。例えば、(12b)は「私のこと、覚えとてか？」と聞き手が質問していることから、「話し手が聞き手を覚えていない可能性を想定している」ことがうかがえる。つまり「覚えていないかも」という聞き手認識と「覚えている」という話し手認識の矛盾があると言えよう。(12c)は「行く気はなかった」が「行った」という、心情と行動の矛盾がガナによって表さ

れているといえる。このように(12bc)は、話し手認識と状況との間に対立とまでは言えないものの何らかのくい違いが生じている。このように考えると、ガナには少なくとも次の3つの用法が設定できる。

表3 ガナの用法

(例)	対立認識更新 要求	驚きの表示	想起
	(10)(12ad)	(11)	(12bc)
a 話し手認識が状況と矛盾	●	●	△
b 話し手にとって既定の事柄	●	--	●
c 一方的に受け入れさせる	●	●	●

●:当該の特徴をもつ --:当該の特徴をもたない △:特徴が変質している

なお(9)～(11)のうち、ガナが不適格となる例について少し説明しておく。ガナが(9)「共通認識の喚起」で用いられないのは、その用法が(14ac)の特徴を満たしていないからだと説明できる。また、(10b)(11cd)のように「聞き手に属する情報」にガナが使えないのは、聞き手情報を聞き手にむかって「一方的に受け入れさせる」ことが不自然だからである。

### 3.3 京都市方言のガナの用法

最後に、前節で設定した用法分類を用いて、京都市方言のガナと木川(1996)、前川(2000)との違いを明らかにする。

まず、(9)「共通認識の喚起」でガナが使えないことは他方言と共通している。また、〈対立認識更新要求〉や〈驚きの表示〉ではガナが適格となる。(以下、用法名は〈 〉で示す)

- (15) a. 何すんねん。危ないガナ。 (=10a))
- b. せやから、ゆーたガナ。あの人には気をつけろって。 (=10c))
- c. [探し物をしている人に、そのありかを知っているだろうと責められて]  
        知らんガナ。 (=12a))
- d. [出来るかどうか不安がっている相手に] あんたやったら出来るガナ。 (=12d))
- (16) a. [箱を開けてみたら空っぽなのを発見して] なんや、空っぽやガナ。 (=11a))
- b. あんた 怪我してるガナ。手当せな。 (=11b))

一方、〈想起〉では使いにくい例がある。(17a)のように、話し手の認識と聞き手の認識の間にズレがあることが読み込める文脈ではガナが使えるが、(17b)のように、話し手認識と矛盾するような事柄が想定できない文脈では使いにくくなる。

- (17) a. [私のこと覚えてる？と聞かれ] よう覚えてるガナ。 (=12b))

- b. ??「そらお前が謝りに行かなあかんで」てみんなに言われたから行ったガナ。  
 (=12c))
- c. [ある落語家の過去。聞き手が生まれる前の話]  
 ??スポーツ刈りで（師匠の桂）米朝について歩いてやんの【歩いているのを】よー  
 見たよ。[背丈が] ちーちゃい子やったガナ。 (前川 2000: 89)

以上、京都市方言のガナは〈想起〉を表しにくいということがわかる。また、その理由として当該方言では(14a)「話し手認識と状況とが矛盾する」ことがガナの適否に関わるということが指摘できる。

## 4 おわりに

従来の文末詞ガナの記述は、類似形式ヤン(カ)の分析枠を使い、それに当てはまるガナと、それに当てはまらないガナという分析のされ方をしてきた。それに対して本発表では、ガナ自体に焦点を当て、その記述に必要な特徴の抽出と、特徴の有無による用法分類を試みた。そして、その用法分類を用いて、京都市方言のガナを他方言と比べてみた。その結果、京都市方言のガナは〈対立認識更新要求〉と〈驚きの表示〉をもつが、〈想起〉はあまり発達していないことがわかった。

本発表は、京都市方言の文末詞ガナの用法を設定するにあたって、(方言)文末詞あるいは終助詞の記述に必要なものは何かという点を出発点として分析した。今回とりあげたガナを分析する場合には、文脈・伝達内容・伝達態度の3つの条件で記述できると考える。しかし、他の文末詞(例えはヤン(カ)など)を分析する場合にもこの3つで十分かどうかはわからない。ただし、このような方針で記述していくば、類似する意味用法をもつ文末詞の異同を鳥瞰できる見取り図のようなものを作れる可能性が秘められていると考えている。

## 引用文献

- 井之口有一・堀井令以知(1992)『京ことば辞典』東京堂出版  
 大江元貴(2018)「現代日本語共通語におけるガ、ダ」『日本語文法』18(3), pp. 76-92.  
 奥村三雄(1962)「京都府方言」模垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂, pp. 253-300.  
 木川行央(1996)「兵庫県西脇市方言における終助詞「ガナ」と「ヤンカ」・「ヤナイカ」」平山輝男博士  
 士米寿記念会編『日本語研究書領域の視点〈上巻〉』明治書院, pp. 47-62  
 田野村忠温(1988)「否定疑問小考」『国語学』152, pp. 左16-左30  
 中井幸比古(2002)『京都府方言辞典』和泉書院  
 蓮沼昭子(1995)「対話における確認行為—「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」仁田義雄編  
 『復文の研究(下)』くろしお出版, pp. 389-419  
 前川朱里(2000)「(ヤ) ガナ」と「ヤンカ」の用法・機能上の相違について—「ではないか」との対  
 比を中心に—『現代日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座現代日本語学研究  
 室)7, pp. 77-97

## 《方言関係新刊書目》(117号につづく)

国立国語研究所研究図書室が 2023 年 9 月以降に受け入れた図書の中から、2018 年以降の刊行物を選びました。なお、同図書室目録に未記載の文献でも、内容を確認したものは掲載しました。

お気づきの点は、日本方言研究会事務局

〒370-1193 群馬県佐波郡玉村町上之手 1395-1 群馬県立女子大学文学部国文学科 気付  
hougen-jim@e-mail.jp

までお知らせください。

### ▼Python で動かして学ぶ自然言語処理入門

柳井孝介, 庄司美沙著, 翔泳社, xvi+284p+挿図-23cm. 2019(H31)年 01 月

### ▼群馬の方言：その開く世界

篠木れい子著, みやま文庫, 199p-19cm. 2020(R02)年 03 月

### ▼完全図解中国手語

卢祥著, 北京 : 航空工业出版社, 215p+挿図-24cm. 2021(R03)年 07 月

### ▼中日否定与否定极性副词的研究

葛金龙著, 杭州 : 浙江工商大学出版社, 9+2+206p+挿図-25cm. 2021(R03)年 12 月

### ▼愛するよりも愛されたい（令和言葉・奈良弁で訳した万葉集 1）

佐々木良 [訳], 万葉社, 191p-15cm. 2022(R04)年 01 月

### ▼方言比較与吳語史研究：石汝杰教授榮休紀念論文集

陶寰, 盛益民, 黃河主编, 上海 : 中西書局, 2+433p+挿図-24cm. 2022(R04)年 01 月

### ▼出雲国風土記：地図・写本編

島根県古代文化センター編, 八木書店出版部, 八木書店 (発売), iv+638p+図版[4]p+挿図+地図-31cm.  
2022(R04)年 03 月

### ▼琉球：沖縄復帰 50 年記念特別展

東京国立博物館 [ほか] 編, NHK, NHK プロモーション, 読売新聞社, 489p+挿図-25cm.  
2022(R04)年 05 月

### ▼教科書には載っていない調査研究がうまくいくコツ

板垣貴志著, クロスメディア・パブリッシング, インプレス (発売), 181p+挿図-19cm.  
2022(R04)年 07 月

### ▼人文学のためのテキストデータ構築入門：TEI ガイドラインに準拠した取り組みにむけて

石田友梨 [ほか] 編, 井上さやか [ほか] 執筆, 文学通信, 421p+挿図-26cm. 2022(R04)年 07 月

### ▼基礎から学ぶ統計学

中原治著, 羊土社, 334p+挿図-26cm. 2022(R04)年 09 月

### ▼対話することばの市民：CEFR の思想から言語教育の未来へ（日本語教育学研究 11）

細川英雄編著, ココ出版, v+299p-22cm. 2022(R04)年 12 月

- ▼異文化コミュニケーション：自文化と異文化の理解をめざして  
上村妙子著，専修大学出版局，viii+218p+挿図-21cm. 2023(R05)年01月
- ▼言語接触・混合言語・言語生態  
藤代節編，神戸市看護大学人間科学領域，viii+213p+挿図-26cm. 2023(R05)年03月
- ▼長唄の伝承：旋律形成に関する学際的研究（日本女子大学叢書25）  
坂本清恵編，高桑いづみ，配川美加，星野厚子執筆，檜書店，435p+挿図-21cm. 2023(R05)年03月
- ▼おもしろ方言47都道府県まるわかり！：小学生のミカタ  
神永暁監修，小学館，127p+挿図-21cm. 2023(R05)年04月
- ▼現代汉语“日化”現象研究：以鲁迅译著为例  
陈彪著，北京：中國社会科学出版社，2+2+253p-24cm. 2023(R05)年04月
- ▼Formal analysis for natural language processing : a handbook  
Zhiwei Feng, translated by Lan Sun, Xiaowei He, Bo Sun, Singapore : Springer, xvii+796p. +ill. -25cm. 2023(R05)年05月
- ▼なぜ谷は「ヤ」とよむのか：鳥取の地名研究  
古屋修二著，今井出版（発売），317p+挿図+地図-26cm. 2023(R05)年05月
- ▼jsPsychによるオンライン音声実験レシピ（リベラルアーツコトバ双書4）  
黄竹佑，岸山健，野口大斗著，教養検定会議，viii+116p+挿図-18cm. 2023(R05)年06月
- ▼開国前夜、日欧をつないだのは漢字だった：東西交流と日本語との出会い  
小川誉子美著，ひつじ書房，xiii+205p-20cm. 2023(R05)年06月
- ▼ご当地珍名見つけ隊：高信先生の全国行脚  
高信幸男著，恒春閣，207p+挿図-19cm. 2023(R05)年06月
- ▼島口（しまぐち）むんばなし1  
東美佐夫著，南海日日新聞社編，南方新社，364p+挿図+地図-21cm. 2023(R05)年06月
- ▼島口（しまぐち）むんばなし2  
東美佐夫著，南海日日新聞社編，南方新社，182p+挿図+地図-21cm. 2023(R05)年06月
- ▼Compass Japanese intermediate resource book : コンパス日本語中級  
安座間喜治，木内厚子，西村美緒著，くろしお出版，346p+挿図-26cm. 2023(R05)年07月
- ▼近世後期上方語の研究：関西弁の歴史  
村上謙著，花鳥社，xi+317p-21cm. 2023(R05)年07月
- ▼しまくとうばで言えるかな？  
我那覇祥子企画編集，ウエズタカシ絵，ジグゼコミュニケーションズ，31p+挿図-20×27cm. 2023(R05)年07月
- ▼太子の少年（令和言葉・奈良弁で訳した万葉集2）  
佐々木良訳，万葉社，191p-15cm. 2023(R05)年07月
- ▼中日汉字词比較研究  
何华珍等著，上海：上海交通大学出版社，2+513p-24cm. 2023(R05)年07月

- ▼なぜ、おかしの名前はパピュペポが多いのか? : 言語学者、小学生の質問に本気で答える  
 川原繁人著, ディスカヴァー・トゥエンティワン, 287p+挿図-19cm. 2023(R05)年 07 月
- ▼方言と日本のこころ (NHK テキスト [NHK こころをよむ : 2023 年 7 月-9 月])  
 澤村美幸著, 日本放送協会, NHK 出版編集, NHK 出版, 207p+挿図-21cm. 2023(R05)年 07 月
- ▼Corpus dialectology (Studies in corpus linguistics110)  
 edited by Elissa Pustka, Carmen Quijada Van den Berghe, Verena Weiland, Amsterdam : J. Benjamins, vi+220p. +ill. (somecol.)-25cm. 2023(R05)年 08 月
- ▼Indirect speech acts  
 Nicolas Ruytenbeek, Cambridge : Cambridge University Press, xii+226p. +ill.-22cm.  
 2023(R05)年 08 月
- ▼ある限界集落の記録 : 昭和二十年代の奥山に生きて  
 小谷裕幸著, 富山房企画, 富山房インターナショナル (発売), 228p+挿図-21cm. 2023(R05)年 08 月
- ▼外資系の言語学 : コード・スイッチング : 英語力よりも必要なコミュニケーション能力  
 黒田良著, 日本橋出版, 星雲社 (発売), 135p+挿図-19cm. 2023(R05)年 08 月
- ▼カタカナ語大百科  
 深谷圭助監修, 成美堂出版, 255p+挿図-19cm. 2023(R05)年 08 月
- ▼人類学者と言語学者が森に入って考えたこと  
 奥野克巳, 伊藤雄馬著, 教育評論社, 222p+挿図+肖像+地図-19cm. 2023(R05)年 08 月
- ▼遠野物語 : 全訳注 (講談社学術文庫 2780)  
 柳田國男著, 新谷尚紀訳, 講談社, 333p+挿図+肖像+地図-15cm. 2023(R05)年 08 月
- ▼日本語と近隣言語における文法化 (ひつじ研究叢書(言語編)第 196 卷)  
 ナロック ハイコ, 青木博史編, ひつじ書房, v+327p-22cm. 2023(R05)年 08 月
- ▼宮本常一「抵抗」の民俗学 : 地方からの叛逆  
 門田岳久著, 慶應義塾大学出版会, 392+26p+挿図+地図-20cm. 2023(R05)年 08 月
- ▼よみがえる大野日本語=タミル語接触言語説 : タミル語による記紀、万葉集の未詳語などの考察  
 田中孝顕著, 幻冬舎メディアコンサルティング, 幻冬舎(発売), 633p-22cm. 2023(R05)年 08 月
- ▼AI 時代に言語学の存在の意味はあるのか? : 認知文法の思考法  
 町田章著, ひつじ書房, viii+165p+挿図-21cm. 2023(R05)年 09 月
- ▼Tsūji, interpreters in and around early modern Japan  
 Mino Saito, Miki Sato, editors, Cham : Palgrave Macmillan, xv+206p. +ill. +maps-22cm.  
 2023(R05)年 09 月
- ▼生きた言語とは何か : 思考停止への警鐘  
 大嶋仁著, 弦書房, 224p-19cm. 2023(R05)年 09 月
- ▼解釈可能な AI : 機械学習モデルの解釈手法を実践的に理解する  
 Ajay Thampi 著, 松田晃一訳, マイナビ出版, xii+355p+挿図-24cm. 2023(R05)年 09 月
- ▼感情の民俗学 : 泣くことと笑うことの正体を求めて

- 畠中章宏著, イースト・プレス, 199p-19cm. 2023 (R05) 年 09 月
- ▼言語と教育にみるユーラシアの葛藤：少数民族アイデンティティ確立への教育人類学的アプローチ  
ボルジギン・ムンクバト著, 明石書店, 291p+挿図+肖像+地図-22cm. 2023 (R05) 年 09 月
- ▼言語本質論と個別言語分析（言語過程説の探求：第2巻）  
小川文昭, 上田博和, 宮崎正弘著, 明石書店, 362p+挿図-22cm. 2023 (R05) 年 09 月
- ▼ことばと行動：言語の基礎から臨床まで（新装版）  
日本行動分析学会編, 浅野俊夫, 山本淳一責任編集, 武藤崇, 吉岡昌子新装版編集, 金剛出版, xi+379p-22cm. 2023 (R05) 年 09 月
- ▼自然物象名の語源：日本語は漢字からつくられている  
江副水城著, 鳥影社, 431p-22cm. 2023 (R05) 年 09 月
- ▼地図・地名からよくわかる！京都謎解き街歩き 増補改訂版  
浅井建爾著, 実業之日本社, 252p+挿図+地図-18cm. 2023 (R05) 年 09 月
- ▼特集社会学・社会調査における機械学習の応用  
社会調査協会編, 社会調査協会, 京都通信社（発売）, 109p+挿図-26cm. 2023 (R05) 年 09 月
- ▼話し手・聞き手と言語表現：語用論と文法の接点  
吉田幸治編, 金澤俊吾〔ほか〕著, 開拓社, xi+218p+挿図-19cm. 2023 (R05) 年 09 月
- ▼遙かなるウラジオストク：明治・大正時代の日本人居留民の足跡を追って  
堀江満智著, 22世紀アート, 日興企画（発売）, 325p+挿図+肖像+地図-21cm. 2023 (R05) 年 09 月
- ▼文系のためのデータサイエンス・AI 入門  
市川正樹著, 学術図書出版社, x+243p+挿図-21cm. 2023 (R05) 年 09 月
- ▼北海道に行ってみた（先住民族アイヌを学ぶ2）  
石川康宏, 建石始, 大澤香共編, 日本機関紙出版センター, 203p+挿図+肖像+地図-21cm. 2023 (R05) 年 09 月
- ▼柳田國男（Century books：人と思想 199）  
菅野覚明著, 清水書院, 371+xip+図版[1]枚+挿図+肖像-19cm. 2023 (R05) 年 09 月
- ▼琉球諸島の歴史人類学：信仰と習俗の民族誌  
青山優太郎著, 六一書房, ix+244p-22cm. 2023 (R05) 年 09 月
- ▼Azuma Old Japanese : a comparative grammar and reconstruction  
John Kupchik, Berlin : De Gruyter Mouton, xxxiv+522p. +ill. -24cm. 2023 (R05) 年 10 月
- ▼秋田・大潟村の話しつこ：語り継ぎたいモノガタリ  
佐藤晃之輔著, 秋田文化出版, 246p-19cm. 2023 (R05) 年 10 月
- ▼一般言語学から見た日本語の語形成と音韻構造  
窪菌晴夫著, くろしお出版, viii+303p+挿図-21cm. 2023 (R05) 年 10 月
- ▼イン/ポライトネス研究の新たな地平：批判的社会言語学の広がり  
大塚生子, 柳田亮吾, 山下仁編著, 三元社, xii+375p-21cm. 2023 (R05) 年 10 月

- ▼感情を表す形容詞の意味分析（人文科学の一流的研究を目指す博士論文叢書 12）  
加藤恵梨著, 日中言語文化出版社, vii+142p-21cm. 2023 (R05) 年 10 月
- ▼現代中国人に日本はどう「イメージ」されるか：メディアが構築する 21 世紀の日本  
江暉著, ひつじ書房, xiii+372p+挿図-22cm. 2023 (R05) 年 10 月
- ▼ことばをめぐる包摂と排除（ことばと社会：多言語社会研究 25 号）  
「ことばと社会」編集委員会編, 三元社, 265p+挿図+肖像+地図-21cm. 2023 (R05) 年 10 月
- ▼自閉スペクトラム症と言語  
幕内充編, ひつじ書房, x+165p-21cm. 2023 (R05) 年 10 月
- ▼地名の原景：列島にひびく原始の声（平凡社新書 1041）  
木村紀子著, 平凡社, 189p+挿図+地図-18cm. 2023 (R05) 年 10 月
- ▼データを用いたことばとコミュニケーション研究の手法  
大津隆広編, ひつじ書房, viii+252p+挿図-22cm. 2023 (R05) 年 10 月
- ▼日本における言語社会化ハンドブック  
クック峯岸治子, 高田明編, ひつじ書房, viii+344p-21cm. 2023 (R05) 年 10 月
- ▼日本民俗学の萌芽と生成：近世から明治まで  
板橋春夫著, 七月社, 315p+挿図-22cm. 2023 (R05) 年 10 月
- ▼方言漢字事典  
笹原宏之編著, 研究社, xv+273p+挿図+地図-19cm. 2023 (R05) 年 10 月
- ▼方言のレトリック（ひつじ研究叢書(言語編)第 200 卷）  
半沢幹一著, ひつじ書房, ix+307p+挿図+地図-22cm. 2023 (R05) 年 10 月
- ▼「ツイッター」にとって美とはなにか：SNS 以後に「書く」ということ  
大谷能生著, フィルムアート社, 340p-19cm. 2023 (R05) 年 11 月
- ▼意味がわかる AI 入門：自然言語処理をめぐる哲学の挑戦（筑摩選書 0267）  
次田瞬著, 筑摩書房, 254+xp-19cm. 2023 (R05) 年 11 月
- ▼大阪弁で読む”変身”  
フランツ・カフカ作, 西田岳峰訳, 幻冬舎メディアコンサルティング, 幻冬舎（発売）, 110p-19cm. 2023 (R05) 年 11 月
- ▼言語学的ラップの世界  
川原繁人著, feat. Mummy-D [ほか], 東京書籍, 221p+挿図-19cm. 2023 (R05) 年 11 月
- ▼甲南大学キャンパスことば辞典 1992・2009・2022：パンキョー・コーイキ・キソキョーツー  
修訂版  
都染直也編, 都染直也, 192p-26cm. 2023 (R05) 年 11 月
- ▼信州方言辞典：詩集  
和田攻著, 土曜美術社出版販売, 141p-22cm. 2023 (R05) 年 11 月
- ▼日本の都市 100 年地図：100 年前の全国 100 都市詳細地図集  
今尾恵介著, 河出書房新社, 451p+地図-31cm. 2023 (R05) 年 11 月

- ▼方言はなぜ存在するのか：ことばの変化と地理空間  
大西拓一郎著，大修館書店，254p-21cm. 2023(R05)年11月
- ▼類型論から見た「語」の本質  
沈力編，ひつじ書房，vi+351p+挿図-22cm. 2023(R05)年11月
- ▼Endangered compound prosody in Kansai Japanese : implications for the syntax-prosody interface  
by Andrew Angeles, Leiden ; Boston : Brill, xv+[289]p. +ill. -25cm. 2023(R05)年12月
- ▼The formalization of dialectics  
edited by Elena Ficara and Graham Priest, London : Routledge, [viii]+112p. +ill. -26cm. 2023(R05)年12月
- ▼The life cycle of language : past, present, and future  
edited by Darya Kavitskaya and Alan C.L. Yu, Oxford : Oxford University Press, xxvi+466p. +ill. -24cm. 2023(R05)年12月
- ▼奄美人入門：歴史と、その意識の形成  
榎原洋史著，南方新社，380p+肖像-19cm. 2023(R05)年12月
- ▼語りかける柳田國男  
宮崎靖士著，森話社，269p-20cm. 2023(R05)年12月
- ▼言語の力：「思考・価値観・感情」なぜ新しい言語を持つと世界が変わるのか?  
ビオリカ・マリアン著, 桜田直美訳, KADOKAWA, 391p+挿図-19cm. 2023(R05)年12月
- ▼言語発達障害学  
石坂郁代, 水戸陽子編著, 医歯薬出版, xii+259p-26cm. 2023(R05)年12月
- ▼コーパスによる日本語史研究：近世編  
岡部嘉幸, 橋本行洋, 小木曾智信編, ひつじ書房, xi+393p+挿図-21cm. 2023(R05)年12月
- ▼国史・古記録・寺誌（大東急記念文庫善本叢刊(中古中世篇) 第15巻）  
築島裕責任編集, 大東急記念文庫, 渋古書院（製作発売）, 723+41p-23cm. 2023(R05)年12月
- ▼接続する柳田國男（日文研・共同研究報告書199）  
大塚英志編, 水声社, 439p+挿図+肖像-22cm. 2023(R05)年12月
- ▼大限界：オタク用語辞典  
小出祥子編, 名古屋短期大学小出ゼミ(2022・2023年度生)著, 三省堂, 287p-19cm. 2023(R05)年12月
- ▼地名散歩：地図に隠された歴史をたどる（角川新書K-438）  
今尾恵介著, KADOKAWA, 238p-18cm. 2023(R05)年12月
- ▼日本史の謎は「地形」で解ける, 日本人の起源篇（PHP文庫た94-4）  
竹村公太郎著, PHP研究所, 277p+挿図-15cm. 2023(R05)年12月
- ▼波動はるかに：多言語のある日々  
上斗米正子著, 遊行社, 255p+挿図-19cm. 2023(R05)年12月

▼文政 10 年東北農村の御用留：須賀川市桑名家文書から（東北アジア研究センター叢書：第 74 号）

荒武賢一朗, 武田作一編著, 東北大学東北アジア研究センター, 138p+図版[2]p+挿図+地図-30cm.  
2023 (R05) 年 12 月

▼民俗学からみる列島文化

小川直之編, アーツアンドクラフト, 270p+挿図-21cm. 2023 (R05) 年 12 月

▼近世文芸とその周縁：上方編（研究叢書 563）

神谷勝広著, 和泉書院, iv+260p+挿図-22cm. 2024 (R01) 年 01 月

▼こん坂をのぼりきったら（銀鈴叢書：大分弁俳句集 2）

油布晃著, 銀の鈴社, 80p+挿図-20cm. 2024 (R01) 年 01 月

▼白石片倉家中・佐藤家文書：宮城県蔵王町・近世在郷武士の記録を読む

荒武賢一朗, 白石古文書の会編, 東北大学東北アジア研究センター, 221p+図版[7]p+挿図+地図-26cm.  
2024 (R01) 年 01 月

▼Emoji and social media paralanguage

Michele Zappavigna, Lorenzo Logi, Cambridge : Cambridge University Press,  
xv+251p. +ill. (chiefly col.)-23cm. 2024 (R01) 年 02 月

▼インタビュー大全：相手の心を開くための 14 章

大塚明子著, 田畠書店, 239p+挿図-21cm. 2024 (R01) 年 02 月

▼語(かだ)るびや・語(かだ)るべし青森県の方言報告書 2023

今村かほる編, 弘前学院大学文学部今村かほる, 120p+挿図-30cm. 2024 (R01) 年 02 月

▼川平方言会話集

川平老人クラブ寿会, セリック・ケナン, 麻生玲子編, 国立国語研究所研究系, 45p+挿図-21cm.  
2024 (R01) 年 02 月

▼式亭三馬の言語描写：三馬蔵書印書を手掛かりに

長崎靖子著, 武藏野書院, 474p+挿図-22cm. 2024 (R01) 年 02 月

▼ゴールデンカムイ：絵から学ぶアイヌ文化

中川裕著, 集英社, 558p-18cm. 2024 (R01) 年 02 月

▼ことばの古代探訪：アイヌ語と秋田弁から

金子俊隆著, 無明舎出版, 176p-19cm. 2024 (R01) 年 02 月

▼はじめての統計的因果推論

林岳彦著, 岩波書店, xiv+267p+挿図-22cm. 2024 (R01) 年 02 月

▼東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究（文化庁委託事業報告書 2）

東北大学方言研究センター編, 東北大学大学院文学研究科日本語学研究室, 134p+挿図-30cm.  
2024 (R01) 年 02 月

▼方言で知ろう！昭和の遊び：宮城県名取市・岩沼市（令和 5 年度文化庁東日本大震災被災地方言の記録作成及び啓発事業）

櫛引祐希子文・編集, 高笠晴菜, 滝清紗希絵, 東北大学方言研究センター, 22p+挿図-21cm.

2024(R01)年02月

▼文字・表記・音韻（小林芳規著作集：第5巻）

小林芳規著, 沢古書院, 13+600p+挿図-22cm.

2024(R01)年02月

▼Language and dialect death : theorising sound change in obsolescent gascon

Damien Mooney, Cham : Palgrave Macmillan, xix+223p.+ill.-22cm.

2024(R01)年03月

▼Language change in real-and apparent-time : coherence in the individual and the community

Karen V. Beaman, New York, NY : Routledge, [xx]+314p.+ill.-24cm.

2024(R01)年03月

▼日本語・琉球諸語による歴史比較言語学

平子達也, 五十嵐陽介, トマ・ペラール著, 岩波書店, xi+144p+挿図+地図-21cm. 2024(R01)年03月

▼南琉球・宮古語池間方言辞典：西原地区版 第2版

仲間博之〔ほか〕編著, 国立国語研究所言語変異研究領域, xxxiv+672p-21cm. 2024(R01)年03月

(担当：山岡華菜子)

## 2023 年度方言関係博士論文・修士論文・卒業論文一覧

各大学からの情報提供により、2023 年度の方言関係の博士論文・修士論文・卒業論文の題目などを掲載します。大学名は 50 音順です。今後とも積極的な情報提供をお願いいたします。

### ■博士論文■

#### 【九州大学大学院人文科学府言語学講座】

##### ○日本語諸方言における「ラ行五段化」の総合的研究（宮岡大）

本論文は、日本の方言学において「ラ行五段化」と呼ばれてきた現象を取り上げ、大規模な現地調査と既存資料の綿密な分析をもとにして当該現象の通方言的メカニズムを明らかにした研究である。本論文は 3 部構成になっている。第 1 部（第 3 章から第 12 章）では、ラ行五段化がみられるときこれまでの方言のうち、執筆者本人の現地調査によって得られた 10 方言の動詞形態論を記述している。ここで示す各方言の動詞形態論は、本論文の共通の分析枠組みによって比較可能な形で整理され、その後の分析の基礎となる重要なデータとして機能している。第 2 部（第 13 章から第 15 章）では、ラ行五段化形式に生じる/r/ が、動詞の構造のどこに生じるのか、という形態論的問題を扱い、これが方言によって異なることを示している。/r/ が動詞語根末に含まれる方言と、接辞初頭に含まれる方言に区分できることを示すとともに、それぞれの方言内で共通点があること、その共通点が理論的に解釈可能であることも論じている。第 3 部（第 16 章から第 18 章）では、ラ行五段化が生じるメカニズムに焦点を当てている。特に、ラ行五段化現象が一段動詞の全てに対して一斉に生じる現象ではないという点に注目し、どのような特徴を持った動詞がラ行五段化しやすいのか、という問題を解決するために、この現象を引き起こすいくつかの要因を特定し、さらにこれらを階層として順序づけるという新規な一般化を提示している。

##### ○福岡県柳川市方言の記述研究（松岡葵）

本論文は、福岡県柳川市方言（以下、柳川方言）について、その言語体系の総合的記述（第 1 部）と、理論的・通言語的に特に注目される 2 つのケーススタディ（第 2 部）を行った研究である。第 1 部は 17 章からなる総合的記述（450 ページ）である。音声・文法の体系の記述に加え、語彙集と談話資料を添付しており、消滅危機言語の「3 点セット」を提示している。第 2 部は個別トピックを掘り下げ、一般言語学的・通言語的な観点から議論を行うことを目指している。まず、柳川方言における 1 モーラ名詞の母音延長現象（例：mee=kara 「目から」）を出発点に、その現象を最小語制約（word minimality constraint）という理論的問題として捉え、この現象に関わる要因（接語の種類と接語モーラ数）が他のさまざまな方言における母音延長にも適用できることを示すとともに、母音延長が生じる環境に階層性があることを指摘する。次に、日琉 10 方言を対象に心情述語文の格標示における方言差を記述し、類型化をおこない、心情述語文の格標示に意味的結合価・意味役割・述語の品詞の三つが関与していることを示している。本論文は柳川方言の総合的記述として最初の研究であり、また最小語制約・心情述語文の格標示に関する方言類型論としても最初の研究である。

【広島大学大学院教育学研究科教育学習科学専攻教科教育学分野国語文化教育学専攻】

(2021年度)

○愛媛県松山市方言における命令表現についての記述的研究（久保博雅）

## ■修士論文■

【桜美林大学大学院国際学術研究科グローバルコミュニケーション実践研究学位プログラム】

○三陸方言の語形に関する研究（阿部文洋）

【大阪教育大学院教育学研究科国際協働教育コース日本語教育支援高度化領域】

○日本語教育における方言教育の教材の分析—関西方言の教科書とオンライン教材の比較—（王玉湖）

【大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻】

○鹿児島県志布志市方言の疑問文に使用される終助詞について—高年層話者の体系を中心として—  
(松末聰一郎)

本研究では、鹿児島県志布志市方言の高年層話者の疑問文に単独で使用される 7 つの終助詞「カ」「ケ」「ナ」「ネ」「ヤ」「オ」「ヨ」を対象とし、これらが統語面あるいは待遇面において異なりを示すことを明らかにした。また、本研究では上述の 7 つの終助詞のうち「ケ」に着目し、その独話としての用法を記述した。さらに、独話の「ケ」の成立の要因や「ケ」が当該方言の若年層話者に継承されている理由についても考察を行った。

○関西若年層におけるテシマウ相当形式の使い分け—方言形の残存に注目して—（片山まどか）

【金沢大学大学院人間社会環境研究科人文学専攻専門深化型プログラム】

○石川県能登の準体助詞について（平山美玖）

【九州大学大学院人文科学府言語学講座】

○ The Verbal Morphology of the Tsugaru Dialect Spoken in Fukaura, Aomori Prefecture: With an Accompanying Grammatical Sketch (Max Monson)

This thesis presents a detailed description of the verbal morphophonology of Tsugaru Dialect (TD), an endangered Japanese dialect spoken in the Tsugaru region of western Aomori Prefecture in the far north of the

main Japanese island of Honshu. The thesis divides into two major parts. Part 1 is a short grammatical sketch of TD and Part 2 is a detailed description of the verbal morphophonology of TD. Part 1 is intended for the readers to situate the verb morphology of TD within a broader phonological and grammatical context.

TD belongs to the North Tōhoku dialect group of Japanese (Shibatani 1990). Together with the Kagoshima dialect, it is considered to be one of the least intelligible to speakers of other Japanese dialects (Ōtsuki 2018). Although much prior descriptive work on TD has dealt with a specific feature of TD (i.e., Yoshida 2009), this paper provides a comprehensive grammatical sketch, touching on phonology, including its phonemic inventory and distinctive features such as intervocalic consonant voicing and vowel devoicing; syllable structure and phonotactics; prosody and intonation; case marking, including differential argument marking (DAM); derivational and inflectional morphology; tense, aspect, and modality (TAM); morphosyntactic alignment; syntax; information structure; and other salient typological features. I conclude by presenting a detailed analysis of the morphophonology of the verbal inflection system of TD.

#### 【神戸大学大学院国際文化学研究科グローバル文化専攻】

##### ○関西弁との接触による移住者の言語変化（中村堯）

#### 【東北大学大学院文学研究科日本語学専攻】

##### ○身体に関する方言オノマトペの研究（赤間咲良）

本論文は、身体に起きる痛みや違和感を表すオノマトペを対象とし、全国での通信調査によって得られた結果から、オノマトペの形態とオノマトペの使用における地域差を明らかにしたものである。オノマトペの形態では、いびきを表すオノマトペにおいて長音の使用が多くみられるように、対象とするオノマトペによって使用される特殊拍等が異なっており、また、オノマトペの使用では、語形によって分布の比重が東西で異なっていること等を明らかにした。

##### ○テレビドラマにおけるヴァーチャル日本語の研究—方言の表現効果を中心に—（佐藤未依奈）

本論文は、テレビドラマにおけるヴァーチャル日本語の用いられ方を実証的に明らかにすることを目的としたものである。NHK 連続テレビ小説『エール』を対象に全編の文字起こし資料を作成し、作品におけるヴァーチャル日本語を網羅的に記述した。結果、ヴァーチャル福島方言の方言的特徴としては、リアル福島方言を模倣したものや模倣が不完全で誤用と思われるもの等が出現するという実態が明らかになり、出現の多寡には「意味の理解に支障が出ない」等の要因が関係することが示唆された。

##### ○仙台市の介護現場における方言の使用・理解についての研究（山田はるか）

本研究は、仙台市の介護現場における方言によるコミュニケーション・ギャップの解消のため、介護士を対象とした方言支援ツールの語彙の選定を行った。仙台市の介護関係者に対し、高齢者の方言

が分からなかった経験についてアンケート調査を行い、回答された方言語彙の重要度等についても補助調査を行った。その結果、利用者の感情を訴える方言や「仰向けになる」等の動作に関わる方言などは、介護現場で理解する必要性が高いことが明らかになった。

【広島大学大学院人間社会科学研究科教育科学専攻教師教育デザイン学プログラム国語文化教育学領域】

- 広島県呉市豊島方言における食生活語彙の生業差—漬物語彙「コーコ」の典型性に着目して—  
(研裕太)

■卒業論文■

【秋田大学教育文化学部地域文化学科】

- 若者の終助詞使用と親しさの関わり（及川瑞稀）
- 従来の方言の在り方とは異なる秋田方言の実態（草別優希奈）
- 現代におけることわざの実態とその効用（柴田拓実）

【岩手大学教育学部】

- ひらがな「を」の呼称における地域差—東北地方を中心に—（日下部早咲）
- あいづち表現「ダカラ」における音調の地域差—東北・鹿児島の若年層を中心に—（倉山佳奈）
- 児童・生徒の作文における親族名称の特徴—明治・大正・昭和の文集から—（菅原紋）
- 対面とSNSにおける方言使用の場面差—東北方言話者の意識調査を中心に—（野月裕元）

【大阪教育大学教育学部教育協働学科グローバル教育講座多文化リテラシーコース】

- 関西方言における待遇表現に関する研究—若年層が使用する「ハル」「ヤル」「ヨル」を中心に—  
(吉永健人)

## 【大阪大学文学部日本語学専修】

### ○関西における否定条件表現ント、ナ、ンカッタラについて（井本真理菜）

本研究では関西方言で用いられる否定条件表現ント、ナ、ンカッタラについて記述した。これらがどのような形態的特徴を持っているか、用法ごとにどのような使い分けがなされているかという点を中心に分析を行った。そして、ントとナは後件が望ましくない事態のときに使われやすいが、ンカッタラは後件の内容に関わらず使われることを明らかにした。

### ○若年層奈良県北部生育者は「奈良弁」をどう認識しているか—近畿圏の方言認知状況および他方言との接触状況から—（鈴木真生）

本稿は、方言認知地図による調査とアンケートによる調査を行うことで、若年層奈良県北部生育者による「奈良弁」の認知状況を、その背景となる近畿圏の方言認知状況および他方言との接触状況から調査、考察したものである。調査の結果、若年層奈良県北部生育者は「奈良弁」を認知しているもののそれはあくまで意識上のことであり、他のことばとの差異や特徴には決して自覚的でないことが分かった。また、母方言についても奈良県内で話されることばとしての「奈良弁」はほぼ認知されず、大阪府から奈良県北中部、すなわちインフォーマントらの生育地と大阪府とで共通して話されていることばであると認知される結果となった。近畿圏の方言認知状況では接触機会の多い地域ほどその方言を鋭敏に区別する傾向が見られたほか、関西弁について特異な認知状況が見られた。さらにその接觸機会については、人口の流入状況や外住歴、行動圏等において大阪が圧倒的に多数でありながらも近畿圏外も含むその他多様な地域との接觸が見られたほか、外住歴および行動圏の拡大がもたらすそうした接觸機会の増加は、「奈良弁」の存在を認知させない方向に働くことが分かった。

### ○大阪方言における1拍語の母音延長—生じない場合に着目して—（松原菜月）

### ○大阪方言の終助詞ヨとイントネーション（金子涼香）

### ○富山市若年層女性の方言における行為指示表現について—「シラレ」を中心に—（田近菜摘）

富山市方言の行為指示表現には、尊敬語（ヲ）レルに由来する「シラレ」という形式がある。本研究では、富山市出身の若年層女性である筆者の内省をもとに、発話機能と指示相手の二つの観点から、「シラレ」の発話機能を明らかにしている。

## 【金沢大学人間社会学域人文学類】

### ○燕市を中心とした新潟方言における「とても」相当副詞群の対照研究（阿部翠）

### ○長野県飯田下伊那方言の推量表現「ラ」「ダラ」の生起範囲と世代差の考察—標準語・静岡県中部方言・長野県上伊那方言との比較を通して—（木下英利香）

○富山吳西方言における3モーラ名詞アクセントの共通語化（蓑崎美月）

○富山県富山市方言における助数詞アクセントの世代差について（村田くる美）

（2021年度）

○飛騨方言における移動動詞「行く」「来る」の使い分け（西田隆誠）

### 【九州大学文学部言語学・応用言語学研究室】

○宮崎県都城方言における疑問詞疑問表現の韻律特徴（渡邊花恋）

本研究の目的は、宮崎県都城方言の韻律特徴に焦点を当て、疑問詞疑問表現の韻律パターンを分析することである。都城方言では、疑問詞疑問文において疑問詞以降にアクセントが消去されることが分かっている（福田 2023）。しかし、疑問詞が従属節にあるときのアクセント消去の法則は、他方言では指摘があるものの（早田 1985、久保 1989）、都城方言では明らかになっていない。本研究で明らかにしたことは以下の通りである。まず、都城方言では、疑問詞以降のアクセントの消去が、従属節末まで続く場合と、主節末まで続く場合の2パターンあることを述べる。ここで、従属節の従属度（南 1974 による）はアクセント消去の範囲には関係しない。次に、アクセント消去において、「主節のアクセントが WH 焦点によって削除される場合は、疑問詞を含む埋め込み節のアクセントも削除される。」という法則があることを報告する。

### 【共愛学園前橋国際大学国際社会学部国際社会学科】

（2022年度）

○「伊勢崎方言辞典」の作成（寺内真侃）

現伊勢崎市域に存在した7町村のうち方言資料が現存する6町村の方言文献を参考とし、その全てを手作業でデータ化した後、ツールを用いて一元化し、「伊勢崎方言辞典」を作成した。また、その作成の過程の中で方言辞典作成の課題と解決策を述べた。

（2020年度）

○全国の学校方言（堀江亜理紗）

各種文献や先行研究、インターネット、SNS 情報から、全国の学校方言を調査し論じた。品詞ごとに意味を説明し、都道府県ごとにまとめた。都道府県別の学校方言、方言区画による広域の学校方言、市町村別のような狭域の学校方言が存在することが分かった。

○「2019みんなで作ろう「ぐんま方言かるたパートⅡ」コンクール」の軌跡（仲慎吾）

2019年度に実施した「みんなで作ろう「ぐんま方言かるたパートⅡ」コンクール」の全貌を事務局側から記録した。また、応募作品から一般の方の考える方言かるたの読み札の特徴を明らかにした。応募作品の半数以上に七五調もしくは五七調の組み合わせが利用されることが明らかとなった。

### 【県立広島大学地域創生学部】

#### ○草津地区・庚午地区における「ものの言い方」の違い—広島市立庚午中学校のアンケート調査から—（佐々木涼香）

漁師町として発展した草津地区および新興住宅地を含む庚午地区出身の中学生の言語接触・言語変化を明らかにするため、広島市立庚午中学校の全学年の生徒を対象に、依頼・感謝・断り・怒り・共感の5場面に関するアンケート調査（共通語翻訳記述式）を実施した。中学入学から間もない1年生は、互いへの遠慮からか、両小学校出身者の言葉遣いの差は小さく（共通語的な丁寧なもの言い）、学年が進行し、人間関係が安定するにつれ、それぞれの地域性の滲んだ言葉遣い（方言的な丁寧/非丁寧なもの言い）が観察された。

### 【甲南大学文学部日本語日本文学科】

#### ○地域資源としての方言について—利用されている「方言」の『印象』と『対象』に着目して—

（倉光青波）

本論では、インターネットで集めた「日本アーリベンジャーズポスター」「西諸弁ポスター」「方言看板・ポスター」について、それぞれ方言の使用率、使用されている語句の印象、誰に向けて作られたものか等に注目し分析した。主要都市圏以外の観光地や、名産品が多くない地域では、その代わりの資源として「方言」を利用することが多いこと、また、地域の外に向けて発信する際は、悪い印象の語句でも総合的に見て良い印象になるような写真を使うなど工夫していることがわかった。なお、方言の利用を地域別に見ると、真田信治『日本語のゆれ』（1983）等の首都圏・関西圏での標準語形高分布率を表わす地図と相補するかたちで、両圏では地域資源としての方言利用が少なくなる現象もみられた。

### 【國學院大學文学部日本文学科】

#### ○新潟県長岡市中之島方言の研究（五十嵐雪菜）

#### ○地域文化資源として活用される北海道方言に関する研究（玉田桜子）

### 【滋賀大学教育学部】

#### ○広島市方言における行為指示表現「～んさい」「～んちやい」の用法（内田あす香）

#### ○薩隅方言話者の移住による母方言の摩滅（村尾椰々夏）

#### ○関西方言における「ねんたら」の発生と使用実態（宿女唯）

(2022 年度)

- 方言における、「裏」の意味範囲（小寺優汰）

#### 【四国大学文学部日本文学科】

- 卑罵語の特徴とその場面差—近畿・四国地域を例として—（孫悦榕）

- 高知方言におけるアスペクト表現形式について（永澤恋菜）

- 大阪方言における言語イメージ—命令表現を中心に—（長瀬優作）

- 沖縄方言における文末イントネーションの研究—「サ」と「バ」に着目して—（仲盛裕里絵）

- 愛媛県東予方言におけるアスペクトの記述研究（毛利ひより）

#### 【実践女子大学文学部国文学科】

- 福島県中通りにおける方言の使用実態—方言に対する意識調査から—（柿島菜央）

- マンガの大坂方言における「動詞+否定形」の使用—実際の大坂方言との比較を通して—（清水明日紀）

- 現代における愛知方言の使用状況（長尾恩）

(2022 年度)

- 福岡県北九州市方言のアスペクト形式の変遷—現在「～チャル」は「～てあげる」の意味でアスペクト形式ではない—（荒川すず）

- 「おかえりモネ」に見られる方言のリアルさを測定する—「なんちゃって方言ドラマ」の衰退—（大橋優海）

- 千葉県南部地方の方言は新方言などを用いることなく衰退する—「にっしゃ」「てっぱつ」等の古くからの方言は一部存続する—（佐久間美月）

- 世代の違いに注目した新潟県中越下越方言の研究—「よろっと（そろっと）」等は若年層の方が使用率が高い—（志田鈴奈）

- 静岡方言の過剰な装飾化—扇風機の風にあたりながら「ずらー」ということ—（園田琴子）

- 千葉県茂原市の中学生の方言意識—8割以上が方言を使用しているという意識はない—（中山妃菜）

○スポーツ漫画とアニメにおける方言の扱いに関する研究—東北弁話者だとあまり活躍できない—  
(萩原桃香)

○聞き手と話し手の使用意識に注目した若者言葉のエセ方言に関する研究—効果を意識する話し手と効果を感じない聞き手— (安池紗菜)

○熊本県熊本市の進行相を表すヨル・トルの使い分け—1人称主語かどうかや配慮の有無での使い分けはない— (山田菜央)

○方言同士の意識的なコードスイッチング—共通語のほかに関西共通語／播州方言でもスイッチする— (横山夏帆)

○千葉県南部地方における高年層と若年層の方言調査—「なんとば」は消えて「あおなじみ」は生き残る— (吉田美空)

#### 【島根大学法文学部言語文化学科】

○鳥取県米子市方言のとりたて否定形「ヘン」—接辞-(r)ahen と接語=hen を対照して— (梅原彩華)

本稿では、鳥取県米子市方言の動詞とりたて否定形の否定辞-(r)ahen について、当該方言話者である50代男性への面接調査と20代女性(筆者)の内省を通して記述を行った。本稿の目的は、多くの論考で取り上げられてきた同意要求を表す接語=hen に対して、この起源形であるが、これまで詳しく記述されてこなかった、否定辞-(r)ahen の形や意味を明らかにすることである。その結果、-(r)ahen は、話し手の主体的否定という意味の中でも、〈否定意志〉〈否定推量〉を表すことが明らかになった。そして、調査対象であった50代男性は、否定辞-(r)ahen が否定の意味を持たない否定疑問文形式となり、さらに接語=hen として同意要求に特化したモダリティ形式へと文法化していくプロセスに位置づけられ、20代女性(筆者)は文法化した結果に位置づけられる。

○出雲方言における副助詞「ほど」について (中本学仁)

本稿では、出雲方言において用いられる副助詞「ほど」を取り上げた。出雲方言の「ほど」は、共通語と同じ「家から学校まで1時間ほどかかる」のような「程度」用法に加えて、「牛乳ほど買ってきて(牛乳だけ買ってきて)」のような「限定」の用法も持つ。本稿では、出雲方言の「ほど」の「限定」用法について、共通語の「だけ」と主に対照し、その違いを明らかにした。両者は意味的にはほとんど同じだが、出雲方言の「ほど」は気を遣うべき相手・場面での発話に現れやすいことが明らかになった。たとえば、「お手数ですが、ここに印鑑ほどお願いします」のような場合は、「だけ」よりも「ほど」が好んで用いられる。

(2022年度)

○兵庫県丹波市方言におけるテヤ敬語—標準語形式との使い分けをめぐって— (中原綾那)

本論文では、兵庫県丹波市方言において「先生なら教室にオッテヤ」のように用いられる素材待遇形式である「テヤ敬語」を取り上げ、その運用ルールについて、筆者の内省をもとに明らかにした。

その結果、当該方言の「テヤ敬語」の運用のあり方は、近畿方言の待遇表現運用の特徴として知られる〈第三者待遇偏用〉と同様であることが明らかになった。また、「テヤ敬語」の待遇の対象となる人物は、標準語形式「イラッシャル」を使うほど遠くはないが、無標形式を使うほど近くはない人物であることも明らかになった。

#### 【中京大学文学部言語表現学科】

- 関西出身者の移住と言語変容（井上由璃花）
- 長野県松本市方言の世代差（小林健斗）
- 長野県東信地区における文末表現「～シナイ」について（園田萌乃）
- 東三河方言の現在（堀江桃香）

#### 【津田塾大学学芸学部英語英文学科】

- On the Fine Representation of Agentivity under the Three-Layered VP Hypothesis: With Special Reference to -(r)asaru（七条乙衣）

#### 【東京大学文学部日本語日本文学（国語学）専修課程】

- 複合連体辞「トイウ」の変異とその選択要因（小川慧）
- 鹿児島市方言における疑問文—終助詞ヶを中心に—（尾辻菜々子）
- 熊本市方言の文末詞モン（桑原千彰）
- 群馬県方言における「マーズ」の機能分析（佐藤千優）
- 東京都檜原方言の母音融合（盧捷）

#### 【東北大学文学部日本語学専修】

- 北海道方言若年層話者における助動詞「さる」の使用実態（記内勇汰）  
本論文では、北海道方言若年層話者における助動詞「さる」の使用実態についての調査・分析を行った。今回の調査は回答者の便宜を重視し、Google Form のアンケート機能を用いて実施した。調査結果から、結果用法の「さる」は、マイナス状況を表す文章において使用率が高くなり、「力のコント

「ロールの難しさ」・「誤動作・誤生起の生じやすさ」・「自身の行動で物事が進んだかどうか」という概念を満たすとより使用率が高くなるとわかった。また、異分析により「ささる」という形の使用が増えていることも明らかになった。

#### 【日本大学文理学部国文学科】

##### ○日本大学男子剣道部員における方言意識（伊藤和樹）

日本大学男子剣道部員全員を対象に、方言と共通語に対する意識を尋ねるアンケート調査を行った。主に、さまざまな出身地の部員が一緒に暮らす寮で生活する寮生（有効回答数：41）と、主に首都圏で生育した首都圏の実家から通う通い生（有効回答数：34）の意識の違いを検討した。

#### 【広島大学教育学部第三類国語文化系コース】

##### ○キャラクターにおける方言使用の特徴について—愛媛県東中予方言を中心に—（廣藤澄夏）

（2021年度）

##### ○徳島方言における疑問文の文末音調（山形佑実）

#### 【宮城教育大学教育学部】

##### ○宮城県の方言研究—中部沿岸地域に着目して—（阿部颯太）

##### ○仙台における郭言葉に関する研究（古関遙香）

##### ○民話における方言の研究（高橋ほの佳）

#### 【名桜大学国際学群語学教育専攻】

##### ○北琉球沖縄語名護宮里方言のアクセント分析（仲尾鈴音）

##### ○沖縄県うるま市石川で話されるウチナーヤマトゥグチの終助詞「レ」に関する研究（西原来夏）

##### ○沖縄県名護市大東やんばるヤマトゥグチのアクセント分析（比嘉香心）

（2022年度）

##### ○ウチナーヤマトグウチアクセントの地域差解明に向けた基礎研究—本部町瀬底出身者を例に— （上間瑞樹）

## 【立正大学文学部文学科】

### ○芸予諸島における広島方言の使用状況調査と記録—上蒲刈島にて—（黒澤昂）

呉市南部の上蒲刈島方言の語彙と自然談話を記録した。語彙については、共通語と同じ語と方言特有の語をあわせて収集し、一部は用例とあわせる形で 382 語記録した。また、196 語の音声を web 公開した。自然談話については、約 7 分の談話を文字化し、音声を web 公開した。公開 URL は次のとおり。

語彙：[https://drive.google.com/drive/folders/10jbCIQKo2VC8gtQB9yCuPSeF2HZo03kN?usp=drive\\_link](https://drive.google.com/drive/folders/10jbCIQKo2VC8gtQB9yCuPSeF2HZo03kN?usp=drive_link)

談話：<https://drive.google.com/drive/folders/11nHn2WrjOIE1DYYKHzHMwWK2Jvr9wYa0?usp=sharing>

### ○青森県津軽地方方言における待遇表現—中泊町と弘前市の比較から—（福山愛理）

青森県中泊町旧小泊村出身の 80 代の女性 1 名を対象に面接調査をおこない、上下関係やウチソト関係による待遇表現の使い分けを記述した。そのうえで『日本のふるさとことば集成』所収の弘前市方言の自然談話にみられる待遇表現と比較した。弘前市方言と中泊町方言ではおおむね同じ待遇表現が使われているが、先行研究の指摘どおり、文末詞「ネサ」「ネハ」は弘前市方言にしか見られない。中泊町方言では「ベガ」（標準語「だろうか」相当）など別の表現が代わりに使われている可能性がある。

## 【立命館大学文学部】

### ○関東・東北地方出身者の大阪方言の獲得（古田陽菜）

本研究では、関東・東北地方出身者 20 名を対象に大阪府で使用されている方言に対して知識をもっているか、使用するかを調査した。調査の結果、文法項目は語彙項目に比べて知識を持ちやすいことがわかった。使用されやすい傾向がある項目は近畿地方全域で使用される表現である。形容詞、動詞とも心理的なものは使用されにくい。また、標準語にもある形態素を使っている項目が使用されやすい傾向にある。

## — お 知 ら せ —

### 〈次回のお知らせ〉

次回の第119回の研究発表会は、**2024年11月2日（土）**にオンラインにて開催の予定です。

### 〈発表募集〉

- 応募資格・条件：方言研究に関心をお持ちの方なら、どなたでも応募することができます。研究発表は、日本語方言とその関連領域に関する未発表のものとし、1題につき発表30分、質疑20分（予定）です。
- 応募締切：**2024年8月9日（金）**必着
- 応募書類：次の2点（A4判用紙計2枚）をご提出ください。
  - 申込書：A4判用紙1枚に、発表題目・氏名・所属・研究略歴・連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）を記載してください。
  - 発表要旨：冒頭に発表題目を記した上で、研究の目的・方法・結論を具体的に明記してください。氏名・所属は記載せず、本文においても応募者が特定できるような表現を避けてください。分量は、図表等込みでA4判用紙1枚以内です。
- 応募先と応募方法：下記連絡先①（研究発表会委員会）宛に、メールの添付ファイル（Microsoft WordもしくはPDF）でお送りください。その場合、特殊な記号を使うなど、文字化けが予想される場合には、プリントアウトしたものを持ち込んだ形でPDFファイルをお送りください。
- 応募可能数：筆頭発表者として応募できるのは1件です。応募書類の提出者を筆頭発表者として扱います。
- その他：研究発表会委員会で審査の上、採否を決定します。採用決定後、発表題目、発表者名（連名発表の場合、氏名の順序も）は変更できません。採用された方には、**2024年10月6日（日）**までに発表原稿集の原稿を提出していただきます。その他、詳細はホームページをご覧ください。

#### 連絡先①

研究発表会委員会（委員長：大橋純一）  
〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1  
秋田大学教育文化学部  
地域文化学科気付  
hougen-happyou@e-mail.jp

#### 連絡先②

事務局（総務委員長：新井小枝子）  
〒370-1193 群馬県佐波郡玉村町上之手1395-1  
群馬県立女子大学文学部  
国文学科気付  
hougen-jim@e-mail.jp

日本方言研究会ホームページ <http://dialectology-jp.org/>

### 〈ご寄付をいただきました〉

広島大学に事務局において活動されてきた「方言研究ゼミナール」より、当会に250,222円のご寄付をいただきました。「方言研究ゼミナール」では、『方言資料叢刊』（1991年～2006年）を刊行して、研究活動をより広げてきました。『方言資料叢刊』は、「広島大学学術情報リポジトリ」においても、Web公開されています。このたび、当会の発展に役立ててほしいとのことで、刊行物の収益の一部をお送りいただいた次第です。心よりお礼申し上げるとともに、みなさまにご報告いたします。

日本方言研究会

# Conference Papers of the Dialectological Circle of Japan

No. 118 (May 31, 2024), National Institute of Japanese Language and Linguistics

## Presentation

1. NAKAMURA Gyo: Language changes among Japanese internal immigrants to the Kansai region due to contact with the Kansai dialect: Analysis of conversation data
2. KAMBAYASHI Aoi: A case analysis of language practice by young adults from Osaka living in the Tokyo metropolitan area
3. ENOMOTO Akira: On the dynamics of word accent in Aichi prefecture
4. SAKAI Mika: A proposed methodology for generating Japanese-Ryukyuan languages and dialects: A case study of the Kagoshima dialect
5. CELIK Kenan, OGINO Chisako, IGARASHI Yosuke: Tonogenesis in the western dialects of Iriomote Island, Yaeyama
6. SATO Eisaku, KUBO Hiromasa, MIYAOKA Hiroshi: The “mitsugana” system of the Yokobori dialect, Ehime prefecture
7. OGINO Chisako: About the demonstrative system of the Kuroshima dialect of Yaeyama
8. MATSUMARU Michio: The uses of the sentence-final particle =*gana* in the Kyoto City dialect